

札幌市文化財調査報告書

Ⅵ

1974

札幌市教育委員会

札幌市文化財調査報告書 VI

N 293 遺 跡

1974. 6

札幌市教育委員会

例 言

1. 本書は、昭和48年8月31日から9月26日にかけて実施した北海道住宅商工協同組合の宅地造成現場内に所在するN293遺跡の発掘調査報告書である。地番は、札幌市西区手稲前田105番地である。
2. 本調査は、札幌市教育委員会文化財調査員上野秀一が担当し、羽賀憲二の協力を得て現場の仕事を遂行した。
3. 本書の執筆は、上野が編集し、上記2名のほかに発掘調査に従事した下記の者が、各項目別に担当し、文末に文責を明記した。
4. 発掘調査、整理において、下記の人々より助言と協力を賜った。
北海道大学文学部教授 大場 利夫
札幌市文化財保護委員 大場 利夫
北海道教育委員会文化財保護主事 藤本英夫、高橋稀一、福田友之
北海道開拓記念館学芸員 野村 崇
北海道大学理学部教授 勝井 義雄
北海道大学文学部附属北方文化研究施設
5. 発掘調査には、下記の人々が従事した。
長谷川克浩、内山真澄、伊藤加代子、中津欣也
明治大学学生 石本省三、青山学院大学学生 杉浦重信、北海道大学学生
6. 遺物整理、挿図浄書、原稿浄書には、下記の人々が当った。
森本雅子、佐々木裕美子、長谷川克浩、吉嶋ひな、中津欣也（以上順不同敬称略）
7. 遺跡付近から採取した泥炭層の花粉分析は、北海道開拓記念館 山田悟郎研究職員にお願いした。
8. 炭素による年代測定は、学習院大学木越邦彦研究室に依頼した。
9. 石質の肉眼鑑定は、北海道大学理学部大学院君波和雄氏、北海道開拓記念館研究職員赤松守雄氏にお願いした。
10. 発掘期間中、整理、報告書出版迄北海道住宅商工協同組合、扶桑建設には、たえざる御協力と御理解を賜った事を記し、感謝の意を表する次第である。

凡 例

- ① 挿図は、遺構出土の土器拓影，石器実測図縮尺2分の1，発掘区及び関連遺跡出土土器拓影縮尺3分の1，同石器実測図縮尺2分の1。
- ② 遺構の内，ピットの 実測図縮尺20分の1，40分の1，竪穴住居跡状遺構実測図縮尺40分の1。
- ③ 写真は，遺構出土土器及び石器縮尺2分の1，発掘区出土土器縮尺3分の1，同石器縮尺2分の1。
- ④ 遺構の平面実測図中の記号は，遺物の出土した場所を示している。内訳は，以下の通りである。
 - 印：土器片
 - 印：石器・石片
 - △ 印：木炭片
 - (x)

目 次

例 言

凡 例

挿 図 目 次

図 版 目 次

表 目 次

第1章 発掘までの経過 1

第2章 遺跡の位置と環境 2

第3章 発掘調査の方法と層序 11

 第1節 発掘調査の方法 11

 第2節 層 準 11

第4章 遺構及び出土遺物 16

 第1節 ピット 16

 第2節 竪穴住居跡状遺構 52

 第3節 まとめ 59

第5章 発掘区出土遺物 64

 第1節 土 器 64

 第2節 石 器 71

第6章 石狩海岸の三つの砂丘列の形成
 年代について 75

第7章 N 293 遺跡の花粉分析(山田悟郎) 90

結 語 95

挿 図 目 次

- 第1図 N 293 遺跡と周辺の遺跡の位置
第2図 遺跡付近地形図
第3図 遺跡発掘区配置図および遺構関連図
第4図 遺跡の地層断面図
第5図 遺跡付近の泥炭層の地層断面図
第6図 第1号, 第2号ピット実測図
第7図 第3号, 第4号ピット実測図
第8図 第3号ピット出土遺物
第9図 第3号(1・3~18・21・22), 第4号(2・19・20)ピット出土遺物
第10図 第5号, 第6号, 第7号, 第8号, 第9号ピット実測図
第11図 第1号(1・2・8), 第2号(3~7), 第6号(9・10), 第7号(11~13), 第9号(14~19)ピット出土遺物
第12図 第10号, 第11号ピット実測図
第13図 第10号(2~8), 第11号(1)ピット出土遺物
第14図 第10号ピット出土遺物
第15図 第10号ピット出土遺物
第16図 第12号, 第13号ピット実測図
第17図 第14号, 第15号, 第16号, 第17号ピット実測図
第18図 第18号, 第19号, 第20号, 第21号ピット実測図
第19図 第9号(4), 第16号(11~14), 第18号(1~3), 第30号(6), 第38号(10), 第39号(15, 16), 第46号(5), 第48号(7~9)ピット出土遺物
第20図 第22号, 第23号, 第24号ピット実測図
第21図 第25号, 第26号, 第27号, 第28号ピット実測図
第22図 第29号, 第30号, 第31号ピット実測図
第23図 第32号, 第33号, 第34号, 第35号, 第36号, 第37号ピット実測図
第24図 第38号, 第39号, 第40号, 第41号, 第42号ピット実測図
第25図 第43号ピット実測図
第26図 第44号, 第45号, 第46号, 第47号ピット実測図
第27図 第48号, 第49号ピット実測図
第28図 第1号堅穴住居跡状遺構実測図
第29図 第1号(1~7), 第2号(8~10), 第3号(11)堅穴住居跡状遺構出土遺物
第30図 第2号堅穴住居跡状遺構実測図
第31図 第3号堅穴住居跡状遺構実測図
第32図 ピットのタイプ別分布図
第33図 ピット, 堅穴住居跡状遺構の時代別分布図
第34図 発掘区出土石器拓影(1)
第35図 発掘区出土石器拓影(2)
第36図 発掘区出土石器実測図(1)
第37図 発掘区出土石器実測図(2)
第38図 N295遺跡出土遺物
第39図 N309遺跡出土石器拓影(1)
第40図 N309遺跡出土石器拓影(2)
第41図 N309遺跡出土石器拓影(3)
第42図 N309遺跡出土石器拓影(4)
第43図 N309遺跡出土石器実測図
第44図 N309(1~5), N295(6)遺跡出土石器実測図
第45図 N156(1~6), N294(7~11), N309(12~16), 石狩町M26(17), 同O114(18~20)遺跡出土石器拓影
第46図 石狩町花畔 M33遺跡出土石器拓影
第47図 石狩町上花畔 M51(1~17), 生振O57(18~33)遺跡出土石器拓影
第48図 石狩町生振 O25遺跡出土石器拓影
第49図 N295遺跡付近の泥炭層の花粉分析図表

図 版 目 次

- 1 A 遺跡遠景（南より）
B 遺跡近景（北西より）
- 2 A G-9区セクション
B 第1号, 第2号ピット（東より）
- 3 A 第3号, 第4号ピット（南より）
B 第5号, 第6号, 第7号ピット（西より）
- 4 A 第8号, 第9号ピット（北西より）
B 第10号, 第11号ピット（南東より）
- 5 A 第12号ピット（南西より）
B 第13号ピット（南より）
- 6 A 第24号ピット（南より）
B 第25号, 第26号ピット（西より）
- 7 A 第32号, 第35号, 第37号ピット（南より）
B 第1号堅穴住居跡状遺構（南より）
- 8 A 第2号堅穴住居跡状遺構（北東より）
B 第3号堅穴住居跡状遺構（北西より）
- 9 A 第1号, 第2号, 第6号, 第7号, 第9号ピット出土遺物
B 第18号, 第29号, 第38号, 第39号, 第46号, 第48号ピット出土遺物
- 10A 第3号ピット出土土器
B 第3号, 第4号ピット出土土器
- 11A・B 第10号, 第11号ピット出土土器(1), (2)
- 12A 第16号ピット, 第1号, 第2号堅穴住居跡遺構出土土器
B 遺構出土土器・石片
- 13A・B 発掘区出土土器(1), (2)
- 14A・B 発掘区出土土器(1), (2)
- 15A 第7号ピット出土土器(1/1)
B 石狩町生振O25遺跡出土土器
- 16 遺跡付近の泥炭層出土の花粉(1)
- 17 遺跡付近の泥炭層出土の花粉(2)

表 目 次

- 第1表 第1号堅穴住居跡状遺構ピット一覧表
- 第2表 第2号堅穴住居跡状遺構ピット一覧表
- 第3表 第3号堅穴住居跡状遺構ピット一覧表
- 第4表 ピット群のタイプと時代の関係一覧表
- 第5表 石狩海岸の砂丘上の縄文中期遺跡一覧表
- 第6表 新砂丘列の形成時期一覧表
- 第7表 N293遺跡ピット一覧表
- 第8表 N293遺跡遺構出土土器一覧表
- 第9表 N293遺跡発掘区出土土器一覧表

第1章 発掘までの経過

ここ数年来の札幌市街の郊外への発展は、まさに驚愕に値するものがある。数年前までは、のどかな田園風景を十分に楽しむ事の出来た所も、今日すでにそのすべてが宅地化されてしまったと言っても決して過言ではない。現在のすべての地方中心都市が、陸続と移り住み来たる住民を前に如何に計画的な都市開発を行なうかが、大きな課題となっている様である。

従来は単に機能的な面ばかりが強調されてきた都市開発も、今日その内に発生する幾多の公害・障害の前に、全く無防備であることを痛感させられるに至っている。近頃の種々の報道の中にも、将来への都市開発への未来像を描いたものが少なくない。それらは、きまって従来の都市開発の機能中心主義を排し、人間生活中心への都市作りは如何にあるべきかを追求する姿勢が強く感じとられる。

この様な状況の中であって、文化財保護の進め方についても、再考されねばならぬ時にいたっていることは言うまでもあるまい。即ち、従来の如く、ただ単に遺跡を保存するのみでなく、それが日常生活の中に潤いと学習の場を提供する状態に整備されたものとならなければなるまい。それには、その地域の歴史について正しい理解を得るように努力しなければならないであろう。残念ながら現在の弱体な体制のもとでは、我々が、その努力への最善の力を注ぐことは、誠に困難な状態にあると言わざるをえない。しかし、そのような状態にあっても、我々は決してその努力を放棄しているのではなく、何時の日か多くの市民が郷土の歴史を通して埋蔵文化財への正しい理解をよせてくれることを願い、亀にも似た遅い歩みながら、種々の方面からの努力を重ねている。

ここに報告する N293 遺跡の事前調査も好意ある一市民の知らせにより、破壊の危機にさらされている事実を知ることが出来たのである。

このように芽生えた小さな理解を、より一層大きなものに育ててゆくよう多くの人々と共に学びながら今後の文化財保護行政にあたってゆきたい。

(加藤 邦雄)

第2章 遺跡の位置と環境 (第1, 2図)

石狩海岸には、ほぼ三つの砂丘列があり、この内、最も内陸側にあるものが「紅葉山砂丘」といわれるものである。

本遺跡は、この紅葉山砂丘の南西端に立地している。紅葉山砂丘は、現在の石狩湾に併行し、直距離にして約5.8kmある。コンタ4~5mラインで示され、南西端が札幌市西区手稲前田で、石狩郡石狩町花畔紅葉山を経て、同町上花畔で、一旦石狩川で切られ、旧石狩川に囲まれた同町生振そして美登位まで連なっている。花畔付近では幅が広く800m、高さ18.5mに達するが、札幌市に入って、南西側は、幅150m、高さ5~6mを数えるにすぎない。この紅葉山砂丘の内陸側に沿って、軽川、旧発寒川が流れている。この紅葉山砂丘及び中間列砂丘には第6章で詳述するように数多くの先史時代の遺跡がある。

石狩海岸にある三つの砂丘列の内、中間列砂丘は、「花畔砂堤列」(上杉・遠藤1973)と呼ばれるもので、いま一つの外列砂丘は、現在石狩海岸に形成されている「石狩砂丘」である。一般に砂丘といわれるものは、洪積世に出来たか、或は沖積世に出来たかによって、形状・構造・砂粒などに特色があり「古砂丘」と「新砂丘」に二分される。その内、新砂丘について、更に分けると下記の如くである。

内部構造からは、

- (1) 下末吉相当相からなる過去の砂州を骨格として、一部沖積砂州ないし離水浜が発達するもの。
- (2) 洪積世末の海進堆積物を骨格として、この上に沖積世砂州が薄くのるもの。
- (3) 沖積世海進に溺れ谷を埋積しながら砂州の形成が行なわれたものなどがある(三位1966)。

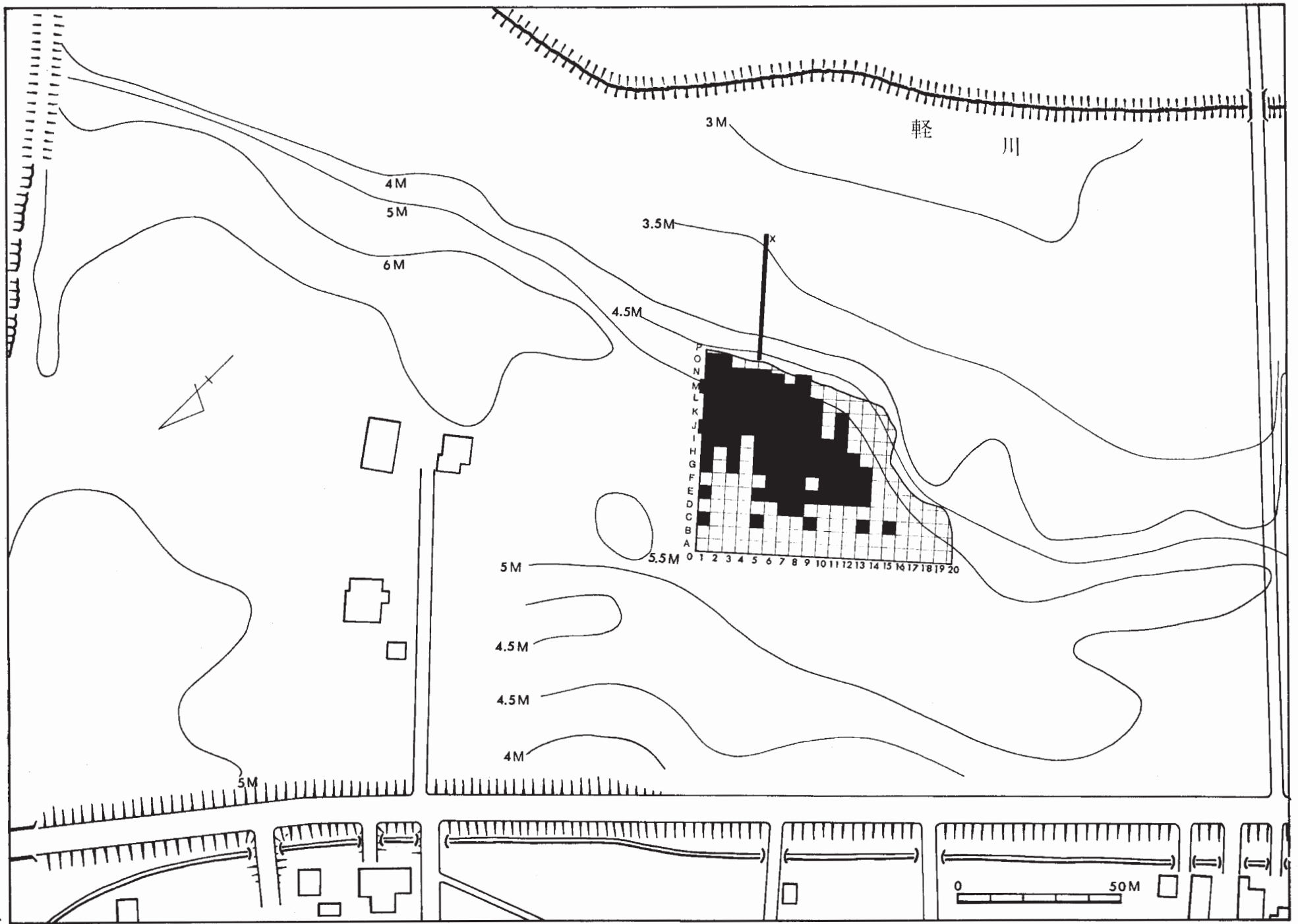
平面形からは、海岸線にはほぼ平行な列をなし、古い砂丘ほど内陸側に、新しい砂丘ほど海岸側に規則的に並んでいるタイプ(平列砂丘)と古い新砂丘層の上に新しい新砂丘砂層がのり、黒色腐植層をはさんで二分される例(累積砂丘)とがある(新潟古砂丘グループ1967, 藤1971)。

本遺跡をのせる石狩海岸の砂丘は、少なくともその上部構造は、平面形状だけから推しても、沖積世に出来た新砂丘であり、海岸線に平行して、二つの列状砂丘の間に列状を呈さない砂堤列という配列で三列の砂丘がある、平列砂丘の例である。藤 則雄(藤1971)によれば、この平列砂丘は、遠浅の海域に多いといい、その理由として遠浅の海域では、海水準の垂直方向の僅かな変化に対しても、汀線の水平的変化は大きいと述べている。そして、これら三列を最大とする複数列の砂丘は、第6章で詳述するが国内のみならず、国外においても、ほぼ似かよった時期に形成或は固定されている(三位1966, 藤1971)。この事は、沖積世の比較的限られた時期に、特殊な形態をもって、新砂丘を堆積し、固定させた自然条件が、ある程度汎世界的な規模であった可能性を示すものである。

沖積世のこの種例証は、一般に気候の温暖化と所謂「縄文海進」の存在として取り扱われて来て



第1図 N293遺跡と周辺の遺跡の位置 (1:50,000) 註: ●印は『石狩の先史時代』による
 (本書に掲載した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を縮図複製したものである。(承認番号) 昭49道複, 第52号)



第2図 遺跡付近地形図

いるが、後者に関しては、近年、氷河性海面上昇を特に強調して、斯現象を捉えるという立場に対して批判が多くある。最近加藤晋平（加藤 1968）は、Jelgersma の論文を紹介し、後氷期の海面変化に関する諸説は、以下の三つに要約される事を教えている。

- (1) oscillating sea-level concept
- (2) steady sea-level concept
- (3) rising sea-level concept

この中で、(3)の現海面よりも高水位期はないという Jelgersma らの唱える立場が、国内の地質学者の中にも多くなって来ているようであるが、しかし湊 正雄（湊・井尻 1966）、藤井昭二（藤井 1967）、遠藤邦彦（遠藤 1967）、三位秀夫（三位 1966）の各氏は、(1)の立場であって、日本の沖積層地域においては、地盤変動より氷河性海面変動の方が優勢で、局地的地盤変動を差引いても、現海面上 6m 位まで海面が達し、C¹⁴年代測定資料に基づくと、その汀線の垂直変化は、一部の例外を除き、世界の安定大陸と驚くほど一致するとしている。もっとも、このような問題は、(1)地盤運動と大陸氷河消長に基づく海面変化との二つの要因によって生じた海面の相対変化（垂直・水平変化）と(2)海岸浸食及び堆積による汀線の前進後退（水平変化）の両面を十分考慮しておかねばならない（三位 1966）のであって、今後より多くの資料を集積し比較検討する必要がある。

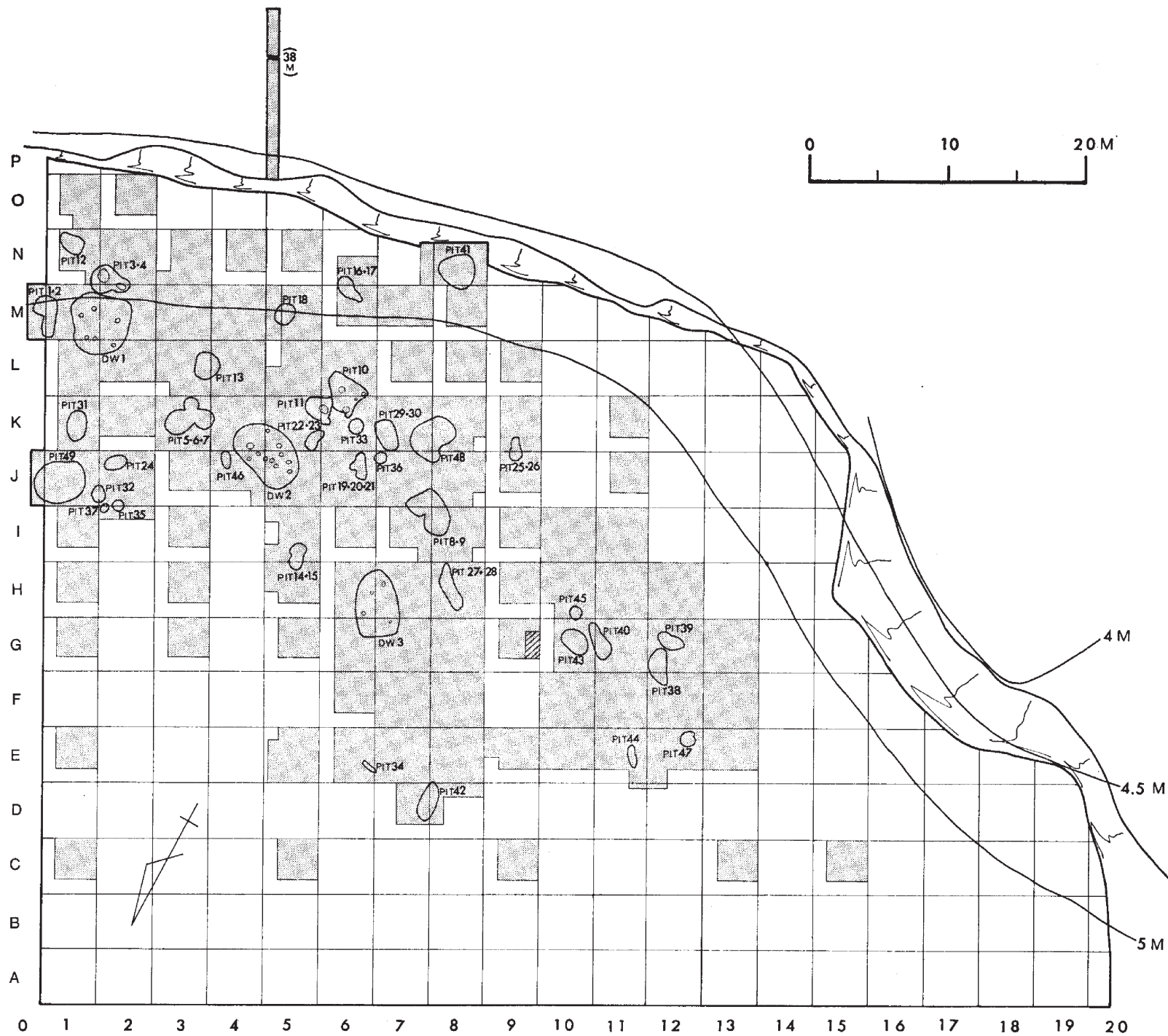
北海道で、この問題に言及された物としては、釧路海岸の砂丘群（岡崎 1962）、苫小牧海岸の砂堤列（松下・近堂ほか 1967）などがあるが、石狩平野に関しては、中野尊正ら（中野・小林 1959）は、以下のように述べる。即ち、5・6000年前の海進期に、汀線は現標高 10 m 位の所にあり、「古石狩湾」の状態、この汀線に沿って江別付近には砂丘が形成され、海退期に入ってその幾度かの停止期には、石狩湾に近い部分に、入江の口を塞ぐような形で、砂州や浜堤或はその上に発達する砂丘が形成されたという。しかし、これは具体的な資料によらず、一般論の援用の観がよく、その中で特に「古石狩湾」の存在に関しては、石狩平野の地質学的調査例が乏しかったその時点では、この是非を決定する論拠もまた乏しい状況であったのではあるまいか。

紅葉山砂丘の形成に関して地質学的資料をもとに述べられているものに、大島和雄（大島 1969、竹田・大島 1970）のがある。氏は、石狩高岡の低位段丘崖下の海拔 6.0~6.8m の所から堅穴および静内中野式の尖底土器を発見した事を基に、沖積海成層は、海拔 6m 以下に分布するとし、紅葉山砂丘は、洪積世末葉には陸域であった可能性が強く、縄文海進時にも、砂丘を全面的に越える海水準上昇は考えられないという。

最近、北川芳男を中心としたグループ（北川芳男ほか 1973）と上杉 陽ら（上杉・遠藤 1973）が、この紅葉山砂丘の研究を行なっている。前者は、層位・古生物学的な考察から、紅葉山砂丘の海成層は、縄文海進の高頂期に形成されたが、その後、海退をはさんで再び海進があり、花畔砂堤列が形成された。この時の海岸線は、同砂堤列の最も内側にあり、その後の海退で砂堤は次々と陸化したという考えである。後者は、紅葉山海成層を堆積させた縄文海進の高頂後、穏やかな海面低下があり、紅葉山風成層の堆積と花畔砂堤列の形成・陸化が行なわれたと述べている。この二つの意見に共通しているのは、紅葉山砂丘は、縄文海進の高頂期ないしそれ以後に形成されたもので、沖積

世の所産であるという事である。

なお、紅葉山砂丘、花畔砂堤列の考古学的資料からの形成時期ないし固定時期の問題は第6章で詳述する。また、古気候の問題に関しては、第7章で述べる。 (上野 秀一)



第3図 遺跡発掘区配置図および遺構関連図

(註) DWとは、竪穴住居跡状遺構をさす。

第3章 発掘調査の方法と層序

第1節 発掘調査の方法

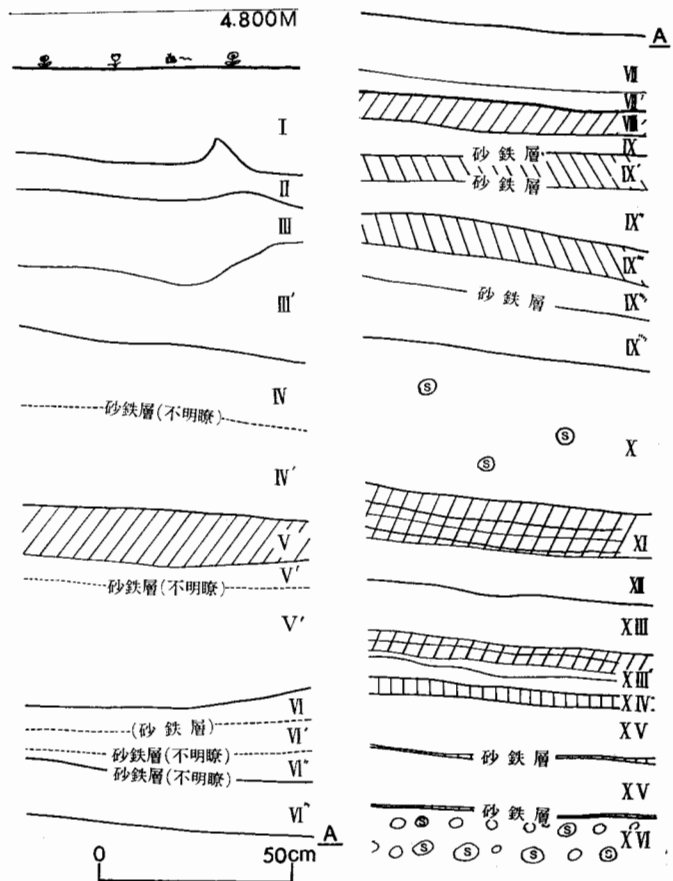
今回の調査は、北海道住宅商工協同組合の宅地造成工事に伴う事前調査で、予備調査の結果、遺跡の範囲が、敷地の南東部に限られている事が確認されたため、調査対象面積は、約3,450m²であった。

発掘区設定は、遺跡が砂丘地である事を考慮して、4×4mのグリッドを組み、北側と東側に1mずつのブリッジを残して、発掘を進めた。その結果、砂丘の内陸側に沿った部分に、遺構と遺物がある事が判り、最終的には1,279m²を調査している(第3図)。

第2節 層 準

本遺跡は、かつて畑地であったため、包含層は、耕作による攪乱が入っている。G-9区西壁は、4.28m掘っているので、以下に説明する(第4図、図版2A)。

- 第Ⅰ層：耕作土
- 第Ⅱ層：暗茶褐色砂層
- 第Ⅲ層：茶褐色砂層
- 第Ⅲ'層：灰褐色砂層
- 第Ⅳ、Ⅳ'層：灰黄褐色砂層で、縞状に砂鉄層が入る。Ⅳ層は不明瞭であるが、Ⅳ'層はやや明瞭に認められる。
- 第Ⅴ、Ⅴ'層：灰色砂層。Ⅴ層には、砂鉄層がかなり明瞭に、幅広く入るが、Ⅴ'層は、不明瞭に薄い砂鉄の層が若干あるのみで、Ⅴ'層の下に行くに従い、薄い酸化鉄の層がレンズ状に入るだけになる。



第4図 遺跡の地層断面図(G-9区)

第Ⅵ, Ⅵ', Ⅵ'', Ⅵ'''層：黄灰褐色砂層。全体に酸化鉄を含み, 黄色味が強い。Ⅵ→Ⅵ'→Ⅵ''に行くに従い, 砂鉄(層)が多くなり, Ⅵ''層は層の上下に層状にある。Ⅵ'''層は, 砂鉄は, Ⅵ, Ⅵ'層と同様に少なく, 一部灰色の砂層がある。

第Ⅶ, Ⅶ'層：黄褐色砂層と黄灰色砂層との互層。全体に酸化鉄を含み, 黄色味が強い。薄い砂鉄層が, 層状に数本入っている。ただ, Ⅶ'層には, 砂鉄層が殆どない。両層共に, Ⅵ'''層に類似し, 灰色の強い黄灰色の砂層が一部入る。

第Ⅷ層：黒色砂層と褐色砂層との互層。砂鉄分が, 非常に多く, この間に薄い褐色の砂層が入る。

第Ⅸ, Ⅸ', Ⅸ'', Ⅸ''', Ⅸ''''層：褐色砂層。全体に褐色味が強いが, 局部的に濃い所と薄い所がある。Ⅸ'層とⅨ'''層には, 全体に砂鉄を含んでいる。

第Ⅹ層：黒色砂鉄層, 褐色砂層, 灰黄褐色砂層そして灰黄色砂層との互層である。かなり明瞭な砂鉄層が入っている。この層には円礫が9個認められた。

第Ⅺ層：明瞭な黒色砂鉄層の間に細く褐色砂層が入る。

第Ⅻ層：不明瞭な砂鉄層と灰褐色砂層との互層。

第Ⅼ, Ⅼ'層：褐色砂層。Ⅼ層には, ごく不明瞭な砂鉄(層)が入る。Ⅼ'層には, 上部に二本, やや明瞭な砂鉄層が入っている。なお, Ⅼ層の下面とⅬ'層の上面付近に2~3個の円礫が認められた。

第Ⅽ層：砂鉄層。

第Ⅾ層：明(赤)褐色砂層で, 砂鉄は含まれていない。

第Ⅿ層：砂礫層である。拳大の頁岩の円礫を数多く含んでいる。

第ⅰ層~第Ⅶ, Ⅶ'層までは, 砂の粒子は全体に角がある感じであるが, それ以下の層は共に砂の粒子は丸い。なお, 勝井義雄教授の現場での教示によると, Ⅷ層以下の砂層で全体に褐色を帯びているのは, 火山灰を含んでいる可能性もあるらしい。なお, 遺構を掘り込んでいる層は, 第ⅱ層から第ⅲ'層迄である。

また, 砂丘とその後背地の泥炭層との関連を知るため, 5列東壁に沿って, 砂丘の南東部の後背地を長さ38mに亘って掘った(第5図)。それを説明すると以下の通りである。

第ⅰ層：腐植土層。土壤サンプル番号の「1」に相当する。ここには樽前aの火山灰(1739年降下)を含んでいる。

第ⅱ層：泥炭層(Ⅰ)。この層は, 南側では, 土壤サンプル番号「2」~「5」の4つに細分される。

第ⅲ層：泥炭層(Ⅱ)。

第ⅳ層：粘土層(Ⅰ)。黄褐色を帯びた粘土層である。土壤サンプル番号「6」。

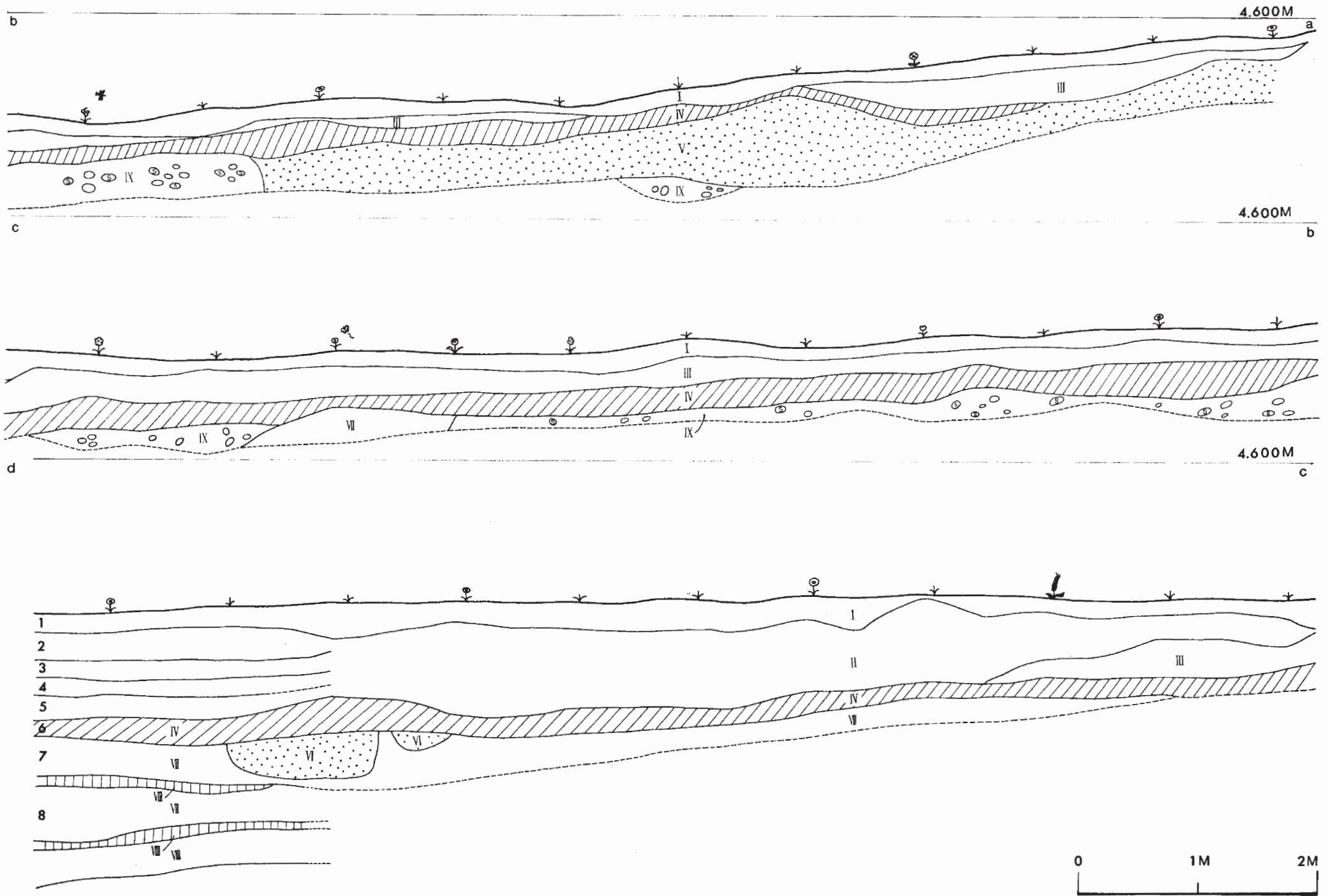
第ⅳ層：暗黄褐色砂層。

第ⅳ層：黄色砂層。南側部分にレンズ状に認められる。

第ⅳ層：青色粘質砂層。土壤サンプル番号「7」, 「8」。

第ⅳ層：砂鉄層。

第ⅳ層：砂礫層。所謂「栗石」層である。



第5図 遺跡付近の泥炭層の地層断面図

第Ⅱ層の泥炭層〔I〕は、渇水期であったため細かな分類と観察をする事が不可能であった。この「1」～「8」から採取した泥炭層などの花粉分析の結果は、第7章で詳述する。また、この中に含まれていた木材の¹⁴C年代測定の結果、「3」層が、2410±95年B.P. (Gak-5030)、「4」層が、2560±105年B.P. (Gak-5032) という結果を得ている。

また、第4図のセクションにみられた第Ⅵ層と第5図のセクションにみられた「砂礫層」は、北川芳男の調査によると、水平分布は、ほぼ砂丘の延長方向と同じであり、わかった範囲では、礫層の分布の幅は50m～100mで、厚さはおよそ2m+程度であろうという。また上部層の砂丘砂は、風成堆積物で、下部層の砂礫層は確実に水の影響をうけて成層したもので、そして砂丘の構成砂は、細粒でしかも等粒である事が特徴であり、砂粒は円磨されている。そして一般に等粒であるが下部の砂粒ほど肉眼で区別出来る程度に粗くなっているという(小山内・杉本・北川1956)。

なお、遺構の上部に、まま認められた火山灰層は、勝井教授の教示によれば、二次堆積したものである。この火山灰の由来と年代は不明である。(上野 秀一)

第4章 遺構及び出土遺物

本遺跡からは、48個のピットと3軒の竪穴住居跡状遺構がみつまっている(第3図、図版1B)。

第1節 ピ ッ ト

第1, 2号ピット(第6図、図版2B)

第1, 2号ピットは、お互いに重複しており、ピットの新旧関係は、セクション図を見ると、第1号ピットの方が古い。

第1号ピットは、北西部が、第2号ピットで切られているため、全体形は窺えない。底面は、ほぼ平らで、ピットの開口は、160×(95)cmである。深さ30cmで、立ち上がりはかなり急傾斜である。長軸は、北東-南西方向である。層は、一層しかなく、第Ⅳ層で、暗茶褐色砂層である。

第2号ピットは、不整楕円形で二段に掘り込まれている。各々の開口は、225×140cm, 155×100cmである。底面は、ほぼ平らである。立ち上がりは、緩やかで、深さ40cmである。長軸は、北西-南東の方向である。層準は、第Ⅰ層が二次堆積した火山灰層。第Ⅱ層も火山灰層であるが、若干の砂を含んでいる。第Ⅲ層は、黒茶褐色砂層で、所々にブロック状に火山灰が含まれている。第Ⅳ層は、暗茶褐色砂層で、第Ⅴ層は、地山である。

又、ピットの中央に60×48cmの浅い小ピットが1個存在した。(長谷川克浩)

遺 物(第11図1~8、図版9A, 12B)

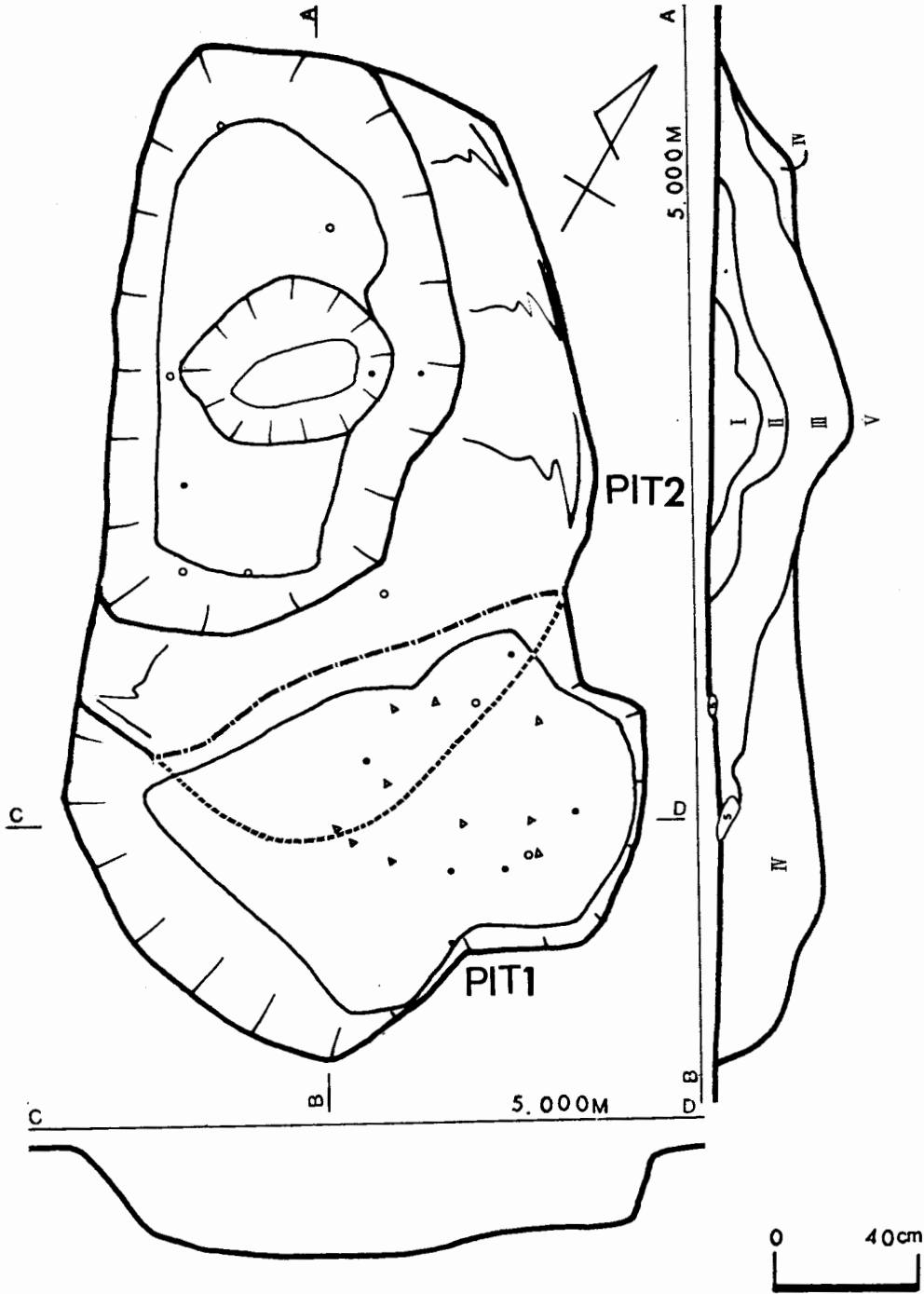
第1号ピットでは、覆土から土器片4点、石片3点、木炭7点が、あるまとまりをもって出土している。

第11図1, 2, 8に示したのがそれで、1は、口縁部破片で、波状縁である。突起の下には、縄文と沈線文があるが、全体のモチーフは、小片のため窺えない。2は、胴部片で、地文はなく、狭い沈線文が、縦横にある。炭化物が付着している。色調は、共に暗茶褐色である。8は、黒耀石の縦長剝片のバルブ部分の破片である。破損後、過度に焼けている。

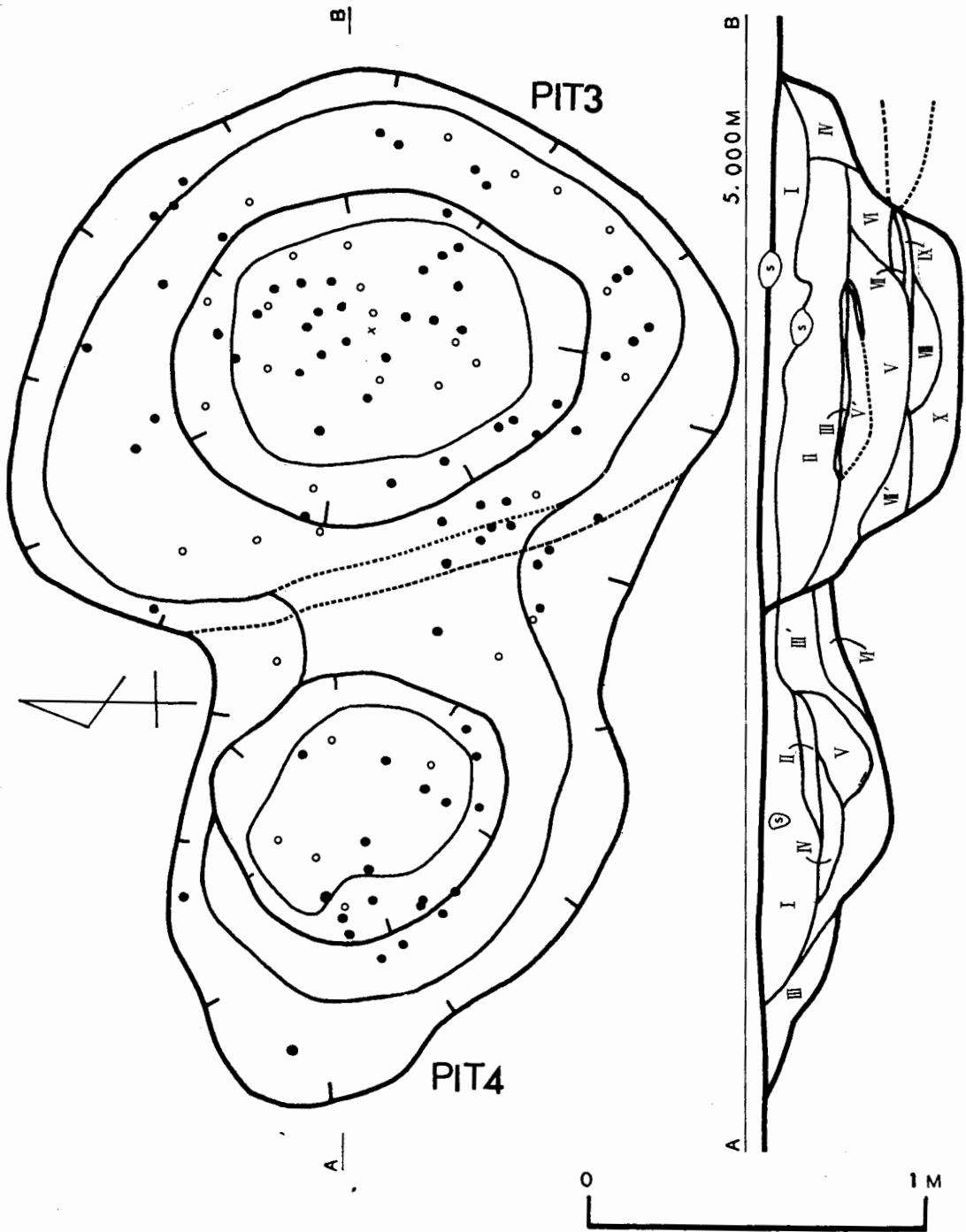
第2号ピットからは、第Ⅰ層では、土器片2点、第Ⅱ層では、土器片・石片各1点、第Ⅲ層では、土器片2点、石片4点、木炭3点が出土している。

第11図3~7に示したもので、3~6は、胴部片である。3, 4, 6は、RLの単節縄文、5は、風化していて、地文ははっきりしないが、羽状に縄文が施されている。7は、底部片である。推定底径9.5cmで、張り出しはない。心持ち揚げ底気味である。色調は、3~5は黒褐色、6, 7は各々茶褐色、灰褐色である。

なお、第1・2号ピット共に、底面からは、何ら遺物は検出されなかった。(上野 秀一)



第6図 第1号, 第2号ピット実測図



第7図 第3号, 第4号ピット実測図

第3号ピット (第7図, 図版3A)

壙口 220×155 cm の不整楕円形を呈する。長軸方向は、南—北方向である。深さは、掘り込み面より 30 cm 程である。

壁の状態は、直立しており壙底面は平坦であるが、中央部に長径 125 cm, 短径 100 cm, 深さ、壙底面より 30 cm 程の楕円形を呈するピットが確認された。このピットの壁は直立しており壙底面は平坦である。明らかに2個のピットは新旧関係をもってとらえられる。両ピットの壁、壙底面は、非常に硬くしまっており、しっかりしている。

埋没状況は、第Ⅰ層、腐植土を多く含む暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰黒色砂層。第Ⅲ層、暗茶褐色砂層。第Ⅳ層、灰黄褐色砂層。第Ⅴ層、暗黒褐色砂層。第Ⅴ'層、Ⅴ層とはほぼ同じ。第Ⅵ層、灰褐色砂層。第Ⅶ層、暗茶褐色砂層。第Ⅶ'層、暗灰褐色砂層。第Ⅷ層、黒色砂層。第Ⅸ層、鉄分が沈着して非常に硬い赤褐色砂層。第Ⅹ層、若干の炭化物を含む暗灰黒色砂層である。いずれの層中にも鉄分が沈着した砂の小塊がみられる。

下部に構築されたピットは、第Ⅸ層を剝土する事によってその存在が確認された。

上部に構築されたピットの壙底面は、第Ⅸ層の上面と考えられる。

両ピットの新旧関係を層序によって見るとまず、下部のピットが明らかに古く、これが埋没した段階で、上部のピットが真上に掘られたと考えられる。

(羽賀 憲二)

遺物 (第8図, 第9図1, 3~8, 21, 22, 図版10A, B, 12B)

遺物は、上部に構築されたピット中覆土より非常に多く出土している。土器片は、総数で 48 点出土し、その内、第Ⅰ層 25 点、第Ⅱ層 15 点、第Ⅲ・Ⅳ層各 3 点、第Ⅴ層 2 点である。即ち、上層にいくに従って多い。

石器、石片は、総数で 34 点出土し、第Ⅰ層 11 点、第Ⅱ層 10 点、第Ⅲ層 8 点、第Ⅳ・Ⅷ層各 2 点、第Ⅸ層各 1 点である。

木炭も、第Ⅰ、Ⅲ層から各 1 点出土している。

第8図、第9図4に示したのは、口縁部破片で、1, 2は口唇部に肥厚帯と小突起を有し、その上に幅 5 mm 程の貼付文が、突起下では楕円形に、その他では縦に施されている。地文は、RLの単節斜行縄文である。貼付文上にも、縄文が施されている。内面は、きれいに研磨されている。3は、平縁と思われ、口唇部で心もち外湾する程度で、特に文様はない。地文として、LRの単節縄文が斜めと横方向に施されている。4は、口唇部を欠くが、横環する貼付文があり、その上に捺糸圧痕が1条ないし2条横に施されている。地文はなく、右下りの整形痕が観察される。5は、口唇部が折返され、肥厚帯を形造っている。地文は、肥厚帯上にも施され、それはLRの単節縄文である。

6~9は、円形刺突文を有する土器で、トコロ第6類に対比されるものである。6は、肥厚帯があり、その上に二段の平篋による連続刺突文がある。9は、ゆるい波状を呈し、軽い肥厚帯があ

り、この上と口唇部上に、平篋による連続刺突文がある。7, 8には、顕著な肥厚帯はない。

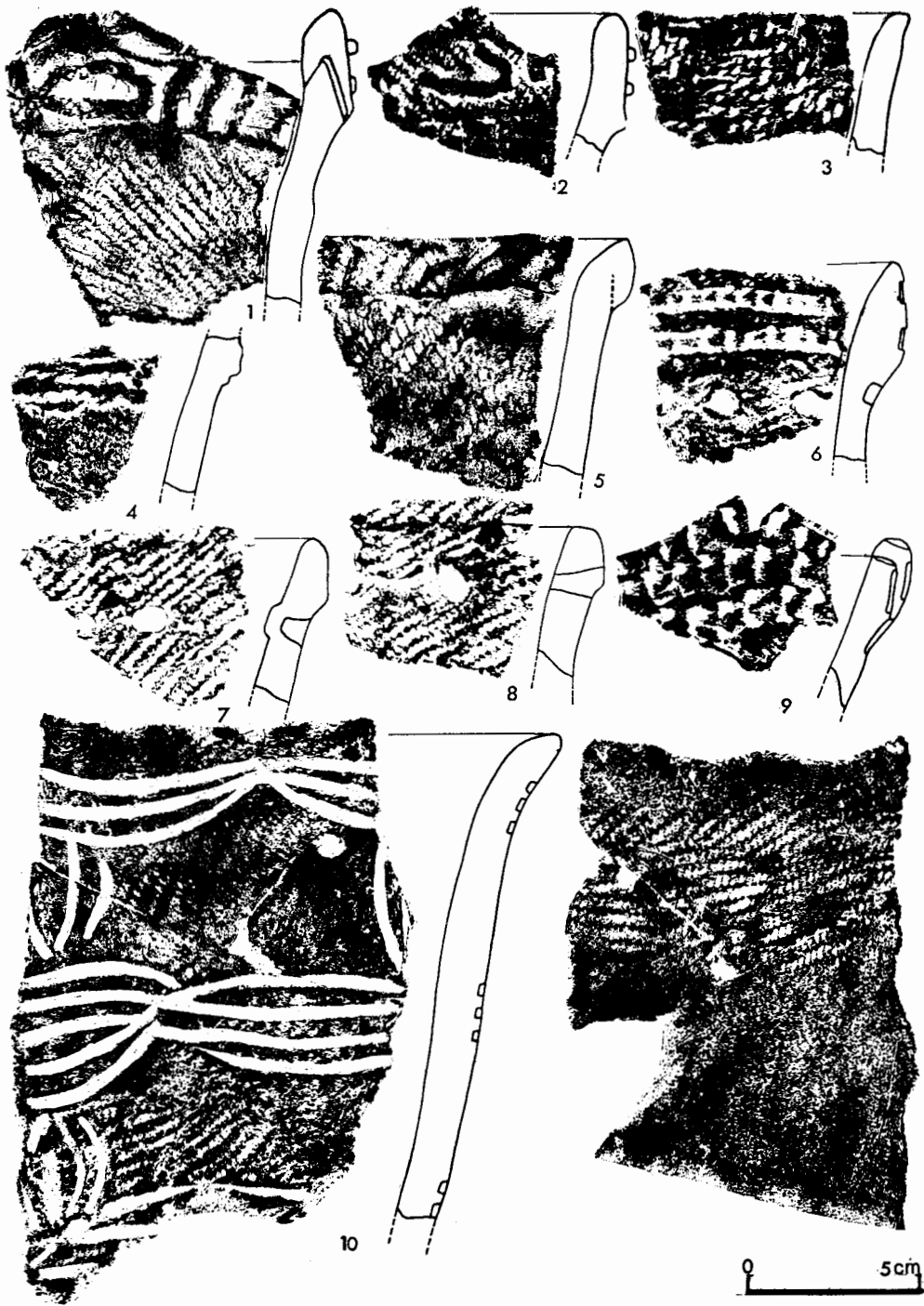
10は、小波状縁で、軽い胴張りがあり、心持ち外湾する。LRの単節斜行縄文の地文の上に、幅広の沈線文が肋骨状に幾単位か施され、その間を同様の沈線文でつないでいる。内面、口唇部直下にも縄文がある。補修孔が1個ある。

色調は、1～6が灰茶褐色、7, 8は各々灰色、暗灰色、9が褐色、10が黒褐色である。

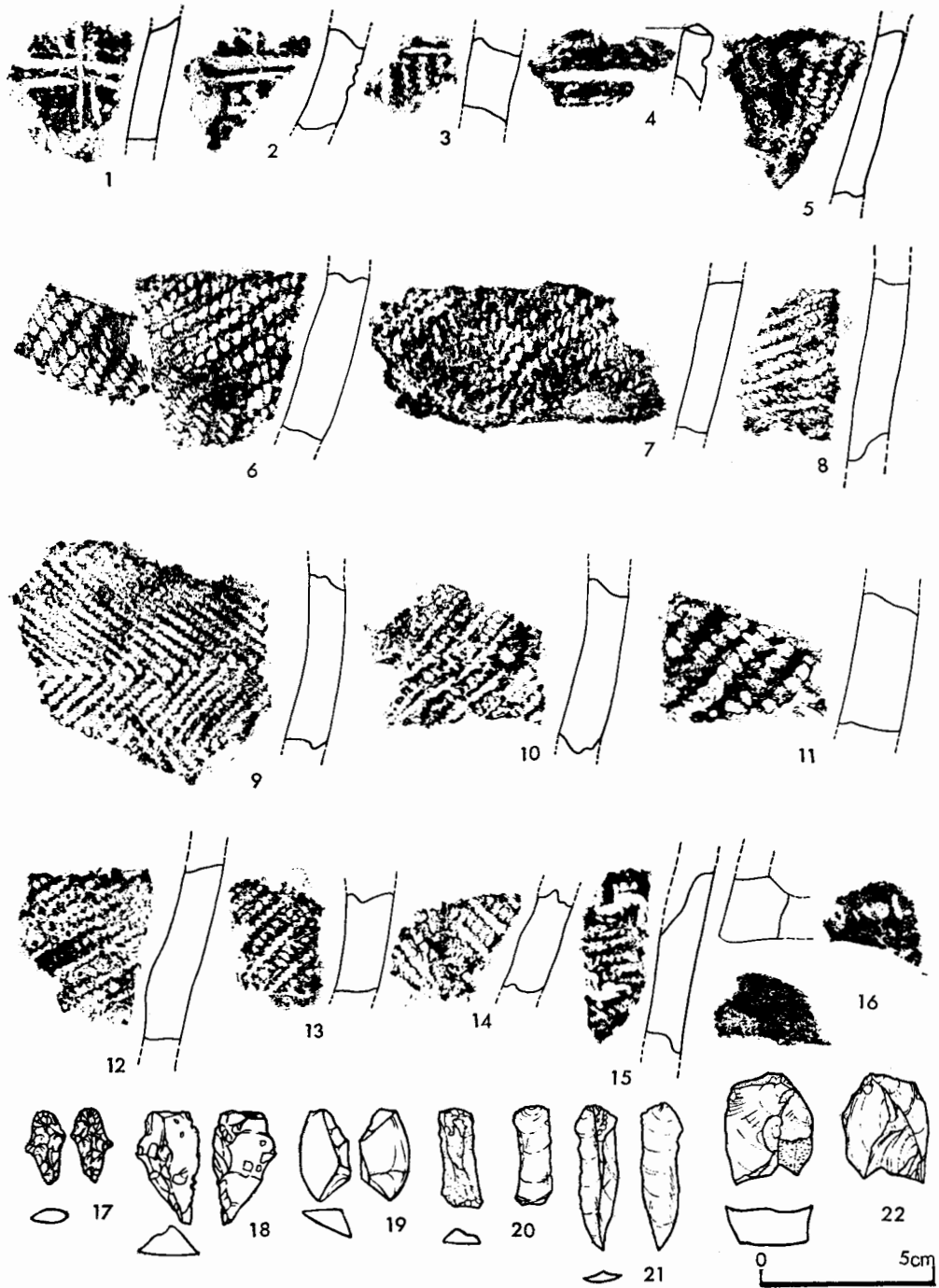
第9図1, 3は縄文地の上に縦、横の沈線文を施している。4は、口縁部小片であり、小波状縁で、横走る少し深い沈線文が観察される。5～15は、胴部片である。5には、破片上部に浅い平篋の連続刺突文が横に施されている。LRの単節斜行縄文が地文としてある例は、5～8, 10～15であり、9は結節のある羽状縄文である。15には、アヤクリ文がある。16は底部片で、少し張り出しがある。

色調は、1, 3, 4, 6, 11が黒褐色、5, 9, 12が暗茶褐色、7は暗褐色、8, 10が暗灰褐色、11は黒灰色、13～16が暗灰色である。

17は、黒耀石製の有茎の石鏃で、先端は平坦に整形されている。欠損後、再加工したのであろうか。18は、流紋岩製で、どのような素材を使ったか不明であるが、左図左側は厚くなり、背の高い加工を表、裏から入れている。右図左側にも加工を入れ、尖頭部を作出している。用途は不明である。21は、縦長剝片である。22は、黒耀石の小ブロックで、扁平石核であろうか。（上野 秀一）



第8図 第3号ピット出土遺物



第9図 第3号 (1, 3~18, 21, 22), 第4号 (2, 19, 20) ビット出土遺物

第4号ピット (第7図, 図版3A)

第4号ピットは、第3号ピット構築の際、壁の一部が削り取られている。規模は現存部壙口150×132cmである。形は若干ゆがんで楕円形を呈する。長軸は、東—西方向を向く。深さは、掘り込み面より最大深で40cm程である。

壁は緩やかに傾斜して壙底部へと至る。壙底部中央に長径87cm、短径80cmのほぼ円形を呈するくぼみがある。

壁、壙底部は、非常に硬くしまっており、しっかりしている。

埋没の状況は、第Ⅰ層、暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰色砂層。第Ⅲ層、灰褐色砂層。第Ⅲ'層、Ⅲ層と同様だが、若干暗い色調となる。第Ⅳ層、灰黒色砂層。第Ⅴ層、暗灰黒褐色砂層。第Ⅵ層、Ⅲ'層と同様だが、若干、灰色が強い層である。

いずれの層にも、鉄分の沈着した砂の小塊が入り込んでいる。第Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ層には、特に多く含まれている。(羽賀 憲二)

遺物 (第9図2, 19, 20, 図版10B, 12B)

土器片は、21点出土し、それらは、第Ⅰ層16点、第Ⅱ層2点、第Ⅲ層3点である。石片は、第Ⅱ層より3点、第Ⅲ層より4点の計7点が出土している。木炭は、第Ⅱ、Ⅲ層より各1点得ている。

2は単節の縄文地の上に、横走する幅広の沈線文を施したもので、色調は暗茶色である。19は、砂岩製の砥石の小片で、左図の幅広い面が使用面である。20は、黒耀石の縦長剥片である。

(上野 秀一)

第5, 6, 7号ピット (第10図, 図版3B)

第5, 6, 7号ピットは、三連ピットで、新旧関係は、セクション図から、古い順に第5, 6, 7号ピットである。

第5号ピットは、北側が切られているが、不整円形のピットと推定される。底面は、ほぼ平らである。ピットの壙口は、115×(83)cmで、深さは20cmである。立上りは、ほぼ45度である。長軸は、東—西の方向である。層準は、第Ⅰ層が、黒褐色砂層。第Ⅱ層は、暗褐色砂層。第Ⅲ層は、暗黄褐色砂層であり、各層共、若干の褐鉄を含む。第Ⅳ層は、地山である。出土遺物は何ら検出されていない。

第6号ピットは、不整四角形のピットである。底面は、ほぼ平らである。ピットの壙口は、210×170cmで、深さは、42cmである。立ち上がりは、かなりの急傾斜である。長軸は、北東—南西の方向である。層準は、第Ⅰ層が、灰色火山灰層で、若干の黄色鉄を含む。第Ⅱ層は、暗茶褐色砂層で、極く少量の褐鉄を含む。第Ⅲ層は、暗黄褐色砂層で、極く少量の褐鉄を含む。第Ⅳ層は、暗茶褐色砂層で、第Ⅱ層より全体に黄色がかっていて、極く少量の褐鉄を含む。第Ⅴ、Ⅴ'層は、暗

褐色砂層で、前者はかなりの褐鉄を含み、後者は若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅵ層は、黄褐色砂層で、かなりの褐鉄を含む。第Ⅶ層は、黒褐色砂層で、極く少量の褐鉄を含む。第Ⅷ、Ⅷ'、Ⅷ''層は、暗黄褐色砂層で、Ⅷ層が、全体に暗く、第Ⅷ、Ⅷ'層に若干の褐鉄を含み、第Ⅷ''層は、ほとんど褐鉄を含まないが、全体に砂鉄を含んでいる。

第7号ピットは、不整楕円形のピットである。底面は、皿状である。ピットの壙口は、162×110 cmで、深さは、35 cmである。立上りは、かなり急傾斜である。長軸は、ほぼ南—北の方向である。層準は、第Ⅰ層が、灰黒褐色砂で、若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅱ、Ⅱ'層は、黒褐色砂層で、両者とも極く少量の褐鉄を含み、第Ⅱ'層は、第Ⅱ層より、少し黄褐色を帯びている。第Ⅲ層は、暗灰褐色砂層で、若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層は、灰褐色砂層で、若干の褐鉄を含んでいる。

(長谷川克浩)

遺 物 (第11図9～13, 図版9A, 12B, 15A)

第6号ピット(9, 10)は、上層から土器、石器片各1点、下層から石器2点、石片2点、木炭3点が出土している。底面にはなかった。

9, 10がその一部で、共に黒耀石である。9は、両面体石器の基部破片で、断面D字状である。10は、一部欠損しているが、左図左上側辺に加工が観察できる。全面にわたって焼けている。

第7号ピット(11～13)からは、土器片2点と石器1点が、北側壁付近からみつかっている。

11は、砥石である。4面を利用しているが、表、裏がとりわけ顕著である(図版15A)。

12, 13は胴部片で単節の縄文地に、幅1 cm前後の貼付帯を横還している。13例の貼付帯の下は、無文部である。共に暗灰色を呈する。伊達山式土器であろう。

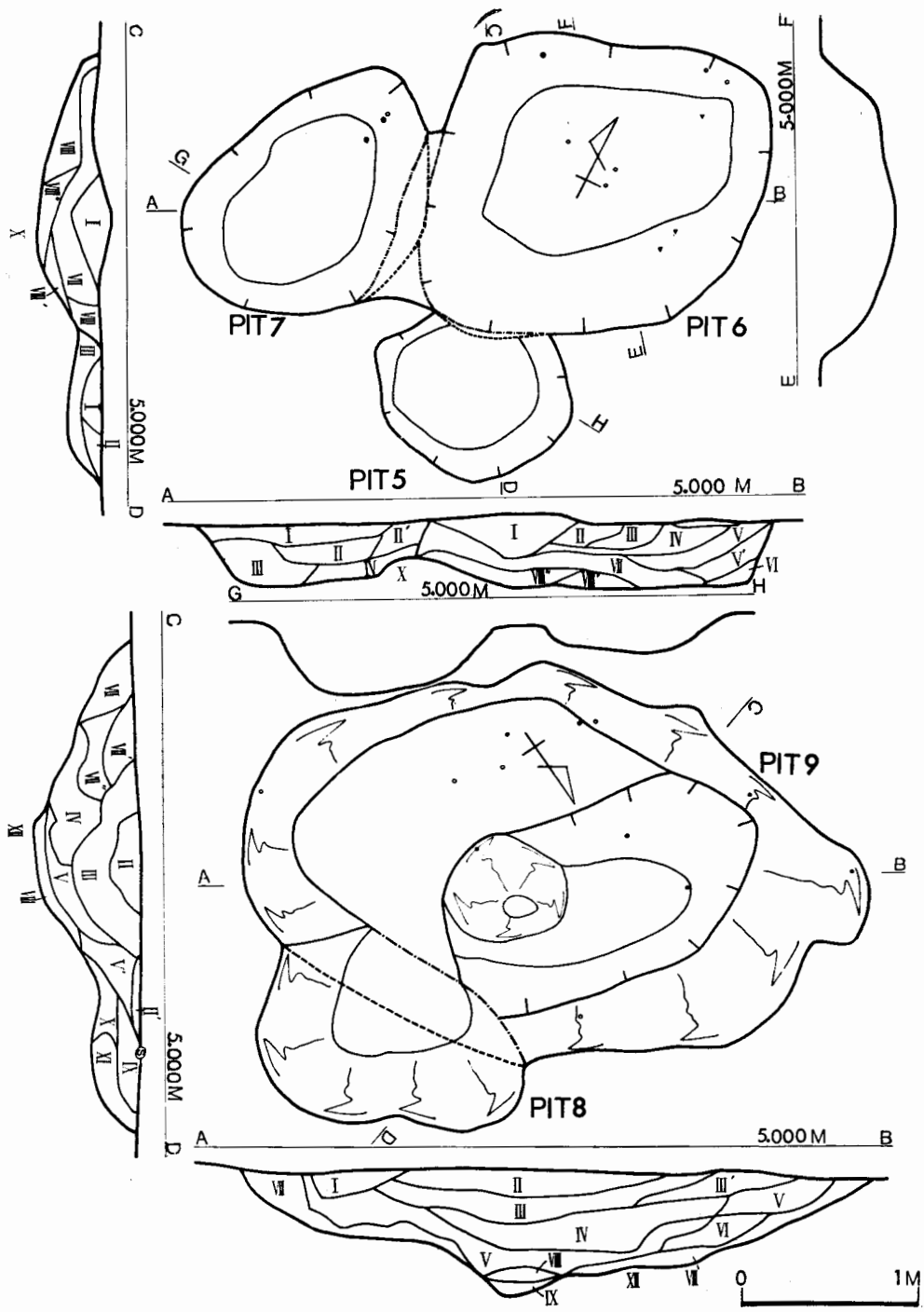
(上野 秀一)

第8, 9号ピット (第10図, 図版4A)

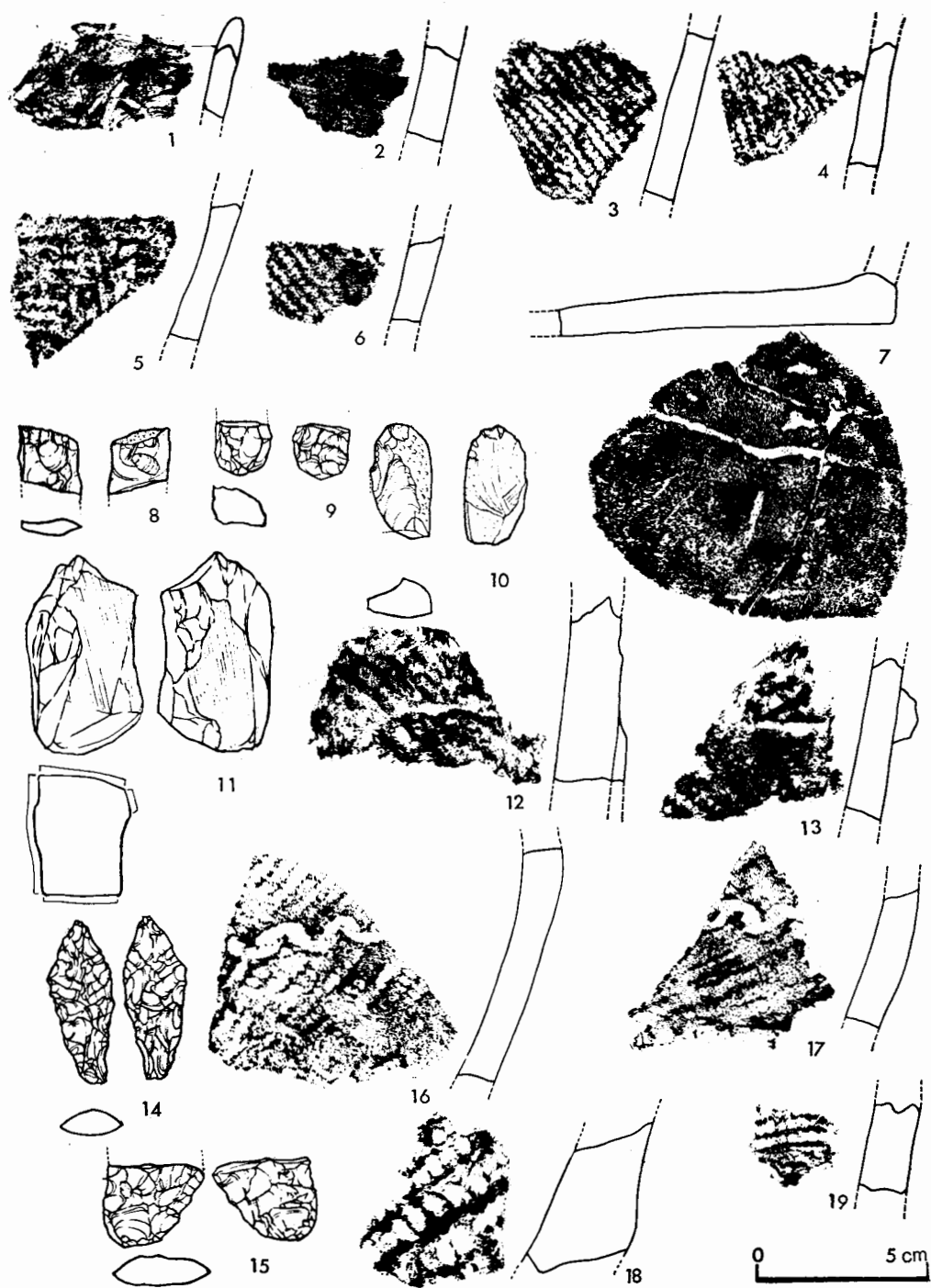
第8, 9号ピットは、二連ピットで、新旧関係は、セクション図から第8号ピットの方が古いと推定される。

第8号ピットは、南西部が第9号ピットで切られているため、全体形は窺えない。底面は、ほぼ平らである。ピットの壙口は、155×(105)cmで、深さは、27cmである。壁の立ち上がりはほぼ45度である。層準は、第Ⅸ層が、黒褐色砂層である。第Ⅹ層は、灰黄褐色砂層で、第Ⅺ層は、暗灰黄褐色砂層であり、後二者には、共に極く少量の褐鉄を含んでいる。出土遺物は、何ら検出されていない。

第9号ピットは、平面形がほぼ不整楕円形と推定される。北西部は更に深く掘り込まれており、ピットの壙口は、各々352×224 cm, 260×178 cmである。上の段は、平坦であるが、下の掘り込みの底面は皿状である。深さは、72 cmで、壁の立ち上がりは緩やかである。更にこの中、南東より67×60 cmの浅い円形の小ピットがある。長軸は、ほぼ北西—南東の方向である。層準は、第Ⅰ層が、黒褐色砂層で、一面に褐鉄を含んでいる。第Ⅱ層は、暗灰黄褐色砂質火山灰層で黄褐色の鉄分を多量に含んでいる。第Ⅱ'層は、暗灰色火山灰層である。第Ⅲ、Ⅲ'層は、暗茶褐色砂層で、



第10図 第5号, 第6号, 第7号, 第8号, 第9号ピット実測図



第11図 第1号 (1, 2, 8), 第2号 (3~7), 第6号 (9, 10), 第7号 (11~13),
 第9号 (14~19) ビット出土遺物

第Ⅲ'層は、第Ⅲよりも全体に暗く、若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層は、灰黒色砂層で、若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅲ、Ⅳ層の間に黄褐色の鉄分の小ブロックをかんでいる。第Ⅴ、Ⅴ'層は、暗灰褐色砂層で、第Ⅴ層は、褐鉄をほとんど含まないが、第Ⅴ'層は、褐鉄を若干含んでいる。第Ⅵ層は、灰黒褐色砂層で、褐鉄はほとんど含まれていない。第Ⅶ層は、灰黄褐色砂層で、壁よりに褐鉄が一面に含まれている。第Ⅶ'、Ⅶ''層は、暗灰黄褐色砂層で、第Ⅶ''層は、第Ⅶ'層より全体に暗く、共に褐鉄を含んでいる。第Ⅷ層は、暗灰褐色砂層で、黄鉄は含まれていない。第Ⅸ層は、地山である。
(長谷川克浩)

遺物 (第11図14~19, 第19図4, 図版9A, 12B)

第9号ピットでは、上層から、土器片2点、石器1点、石片4点、下層から、土器片2点、石器1点が検出されている。

14は、所謂「石銛」と称せられる大形有柄石鏃である。尖頭部が正三角形を呈し、茎部は長い。両面加工である。15は、扁平な大形両面体石器の基部破片である。右図面は平坦である。第19図4は、縦長剥片である。共に黒耀石。

16~19は、胴部片で、16、17は、LRの単節斜行縄文とアヤクリ文がある。18は、大粒の節がある。LRの単節斜行縄文があり、非常に厚い。19も、7と似た小片である。色調は、暗灰褐色を基調しており、伊達山式かと思われる。
(上野 秀一)

第10、11号ピット (第12図, 図版4B)

第10号ピットは、輪郭が不明瞭で、底面は、ほぼ平らである。ピットの壙口は、269×232cm、深さ33cmで、立上りは緩やかである。長軸は、西北西—東南東の方向である。層準は、第Ⅰ層が黒褐色砂層。第Ⅰ'層は、黒灰色砂層。第Ⅰ''層は、暗褐色砂層。第Ⅱ層は、暗茶褐色砂層である。第Ⅲ層は、灰黄褐色砂層。第Ⅳ層は、暗黄褐色砂層。第Ⅴ層は、地山である。ピットの内部には、6個の小ピットがあり、壁寄りに4個、中央に2個認められる。

第11号ピットは、不整形をしており、底面は、凹形をしている。ピットは、二段になっており、各々の壙は、215×172cm、115×90cmである。深さ77cmで立ち上がりは、急傾斜である。長軸は、北西—南東の方向である。層は確認できなかった。ピットの北西壁の外側に1個の小ピットが付属している。

この2つのピットは、互いに重複しているが、新旧関係は明らかにはできなかった。(長谷川克浩)

遺物 (第13図, 第14図, 第15図, 図版11A, B, 12B)

第10号は、浅いピットであるが、遺物は多かった(第13図2~8, 第14図, 第15図)。上層より、土器片29点、石器2点、石片9点、木炭1点、下層から、土器片3点、石片2点が出土している。これらは、ピットの中央部分に集中し、その半数を数え、あとは西に寄った所に点在する。

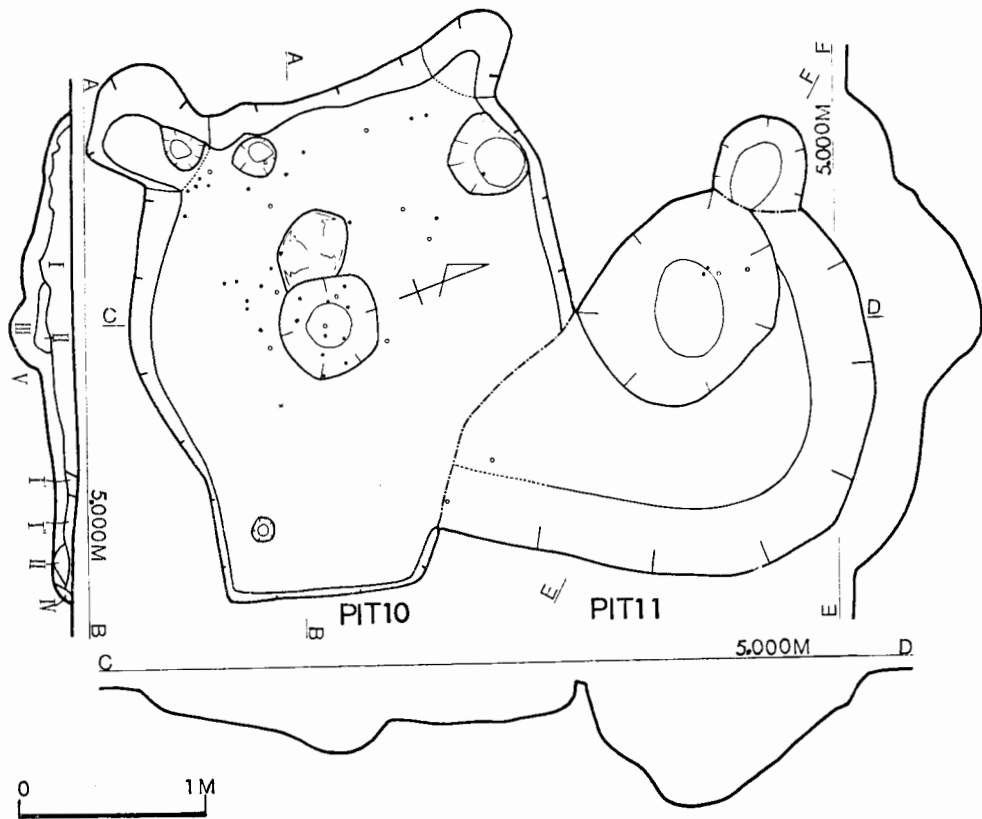
第14図1, 2, 第13図6~8は、トコロ第6類土器である。第14図1は、口縁部片で、軽い肥

厚帯を有し、この上に2段、平篋の連続刺突文がある。この下には、円形刺突文が一行巡る。地文として、表裏に第一種結節のある羽状縄文が施されるが、表側は、横に、裏側は縦に施されている。2は、口縁部を欠くが、平篋による連続刺突文が、横に二列、縦に一行観察される。表裏の地文は、1と同様である。第13図6～8も、2と同様の破片である。これらの色調は、灰褐色を呈する。

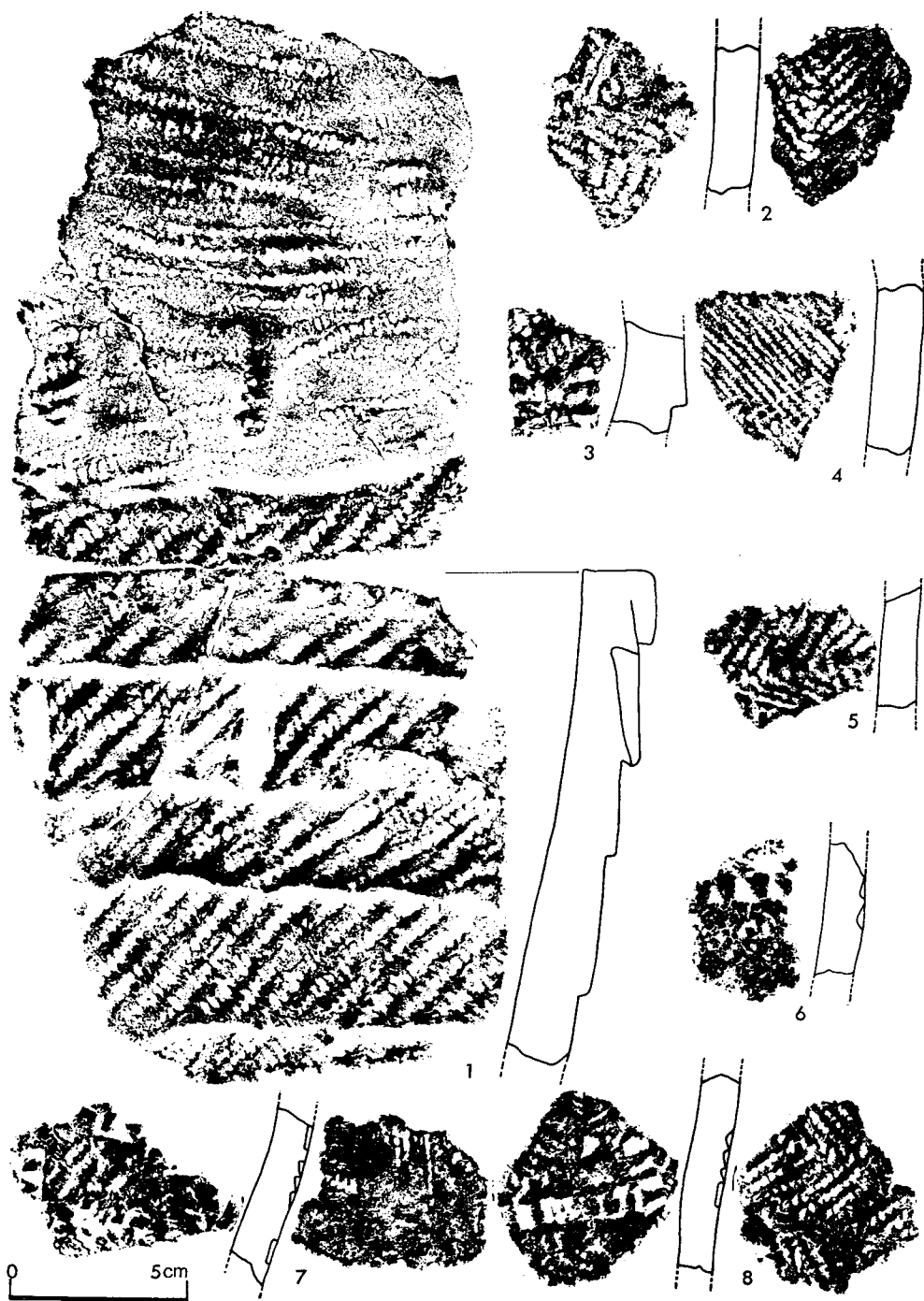
第13図2, 4, 5, 第15図1～9も、前述のトコロ第6類土器に伴う胴部片である。小片で、全体の様子を窺えない例を除いて、すべて第一種結節を有する羽状縄文である。第13図2には、裏面にも縄文がある。色調はおおむね灰褐色である。

第13図3は、器は厚く、縄文の節は大きく、幅広の貼付がある伊達山式土器の小片である。色は暗灰褐色。

第15図10～13は、黒耀石の石器と石片である。10は、縦長剥片を素材にして、右図両側辺に二次加工を施し、尖頭部を作出している。左図面には、幅広く原石面を残す。11は、幅広の剥片で、下部は欠損する。加工は、特でない。12も、剥片のバルブ部分の破片で切損後に入れた、雑な剥離が不規則に認められる。13は、横剥ぎ剥片の表裏の側辺に二次加工を粗く入れた石鏃である。



第12図 第10号, 第11号ピット実測図

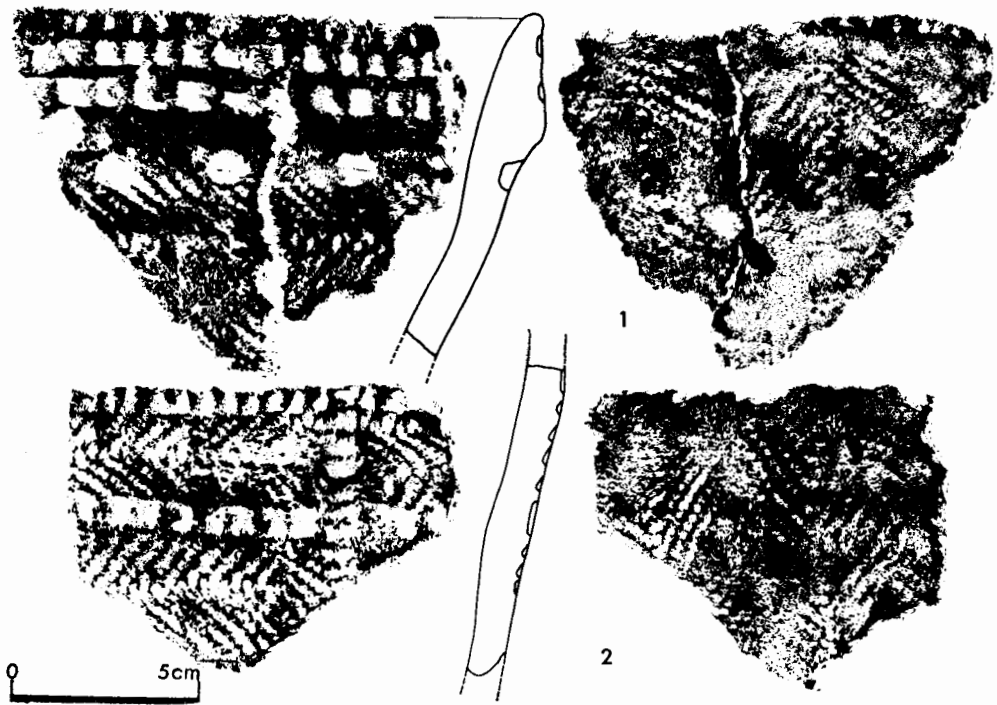


第13図 第10号(2~8), 第11号(1) ビット出土遺物

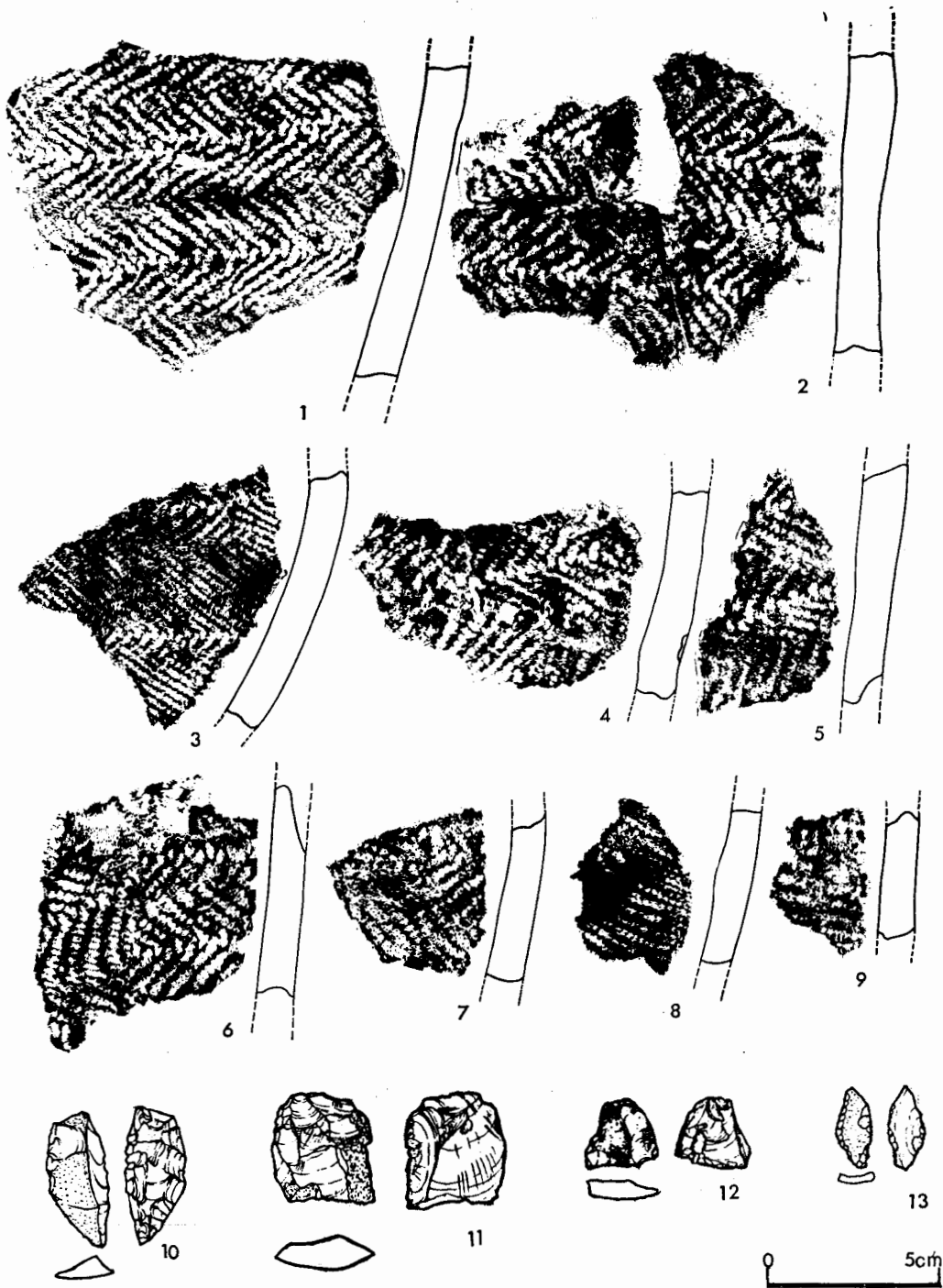
未成品かもしれない。

第11号ピット(第13図1)からは、下層から、土器片2点(接合)、石片2点が出土している。

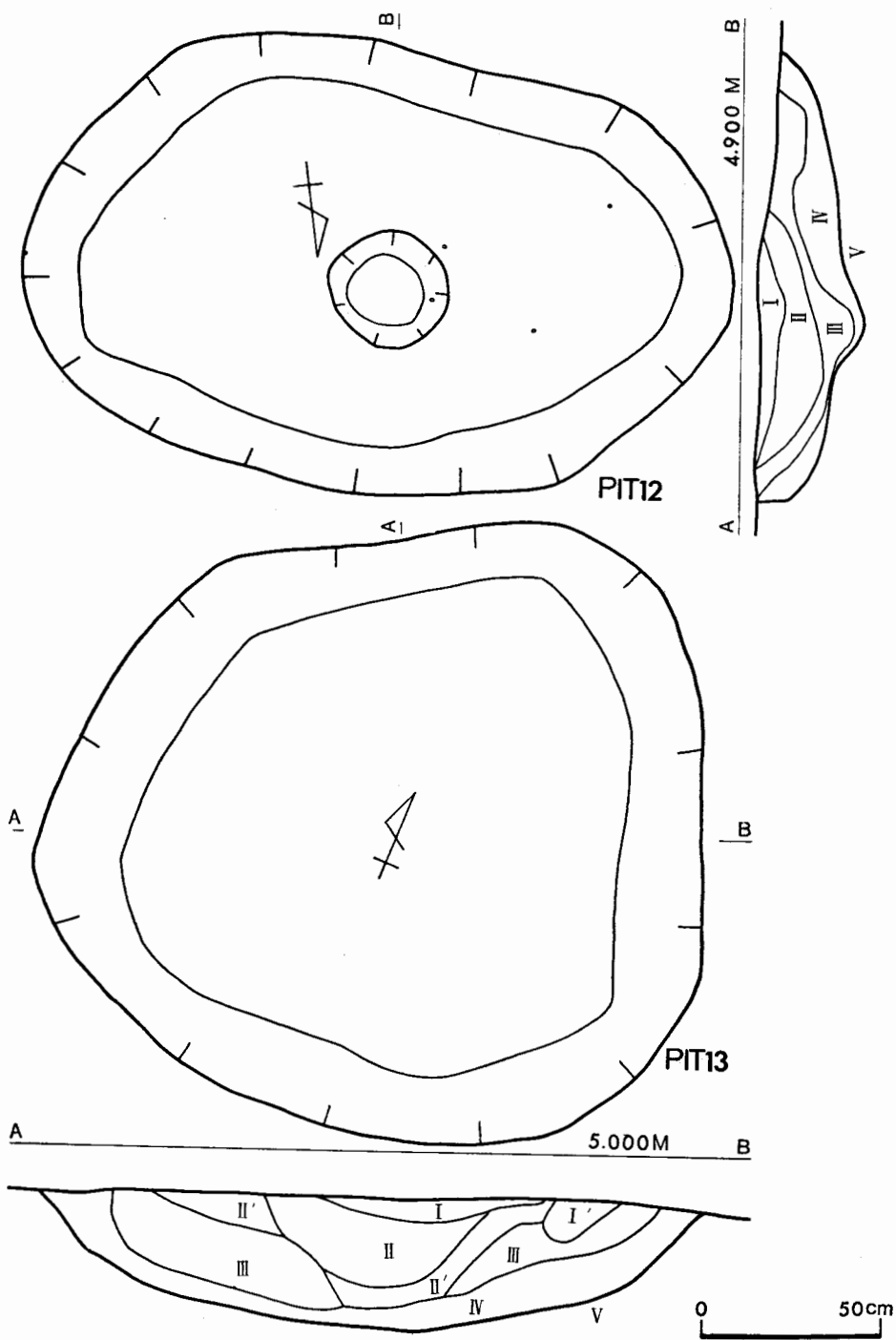
第13図1は、伊達山式土器の大形破片である。4つの段が認められ、二つ目の段に、棒状工具を、器面に斜めに刺し、下に引いた刺突文がある。地文は、節の大きい、LRの単節斜行縄文である。裏面にも、同じ原体を回転せずに押捺している。その後、指頭で、整形した跡がある。口唇部の上にも、斜行縄文がある。色調は灰褐色である。(上野 秀一)



第14図 第10号ピット出土遺物



第15図 第10号ピット出土遺物



第16図 第12号, 第13号ピット実測図

第 12 号ピット (第 16 図, 図版 5 A)

壙口 197×128 cm, 深さ 30 cm の不整楕円形ピットである。底面は、ほぼ平らであるが、中央に小ピットが 1 個確認されている。長軸は、東一西の方向にあり、壁はやや緩やかな立上りを見せているが、北壁だけは、ほぼ垂直に立上っている。覆土は、皿状にきわめて整然と堆積しており、4 つの層に分けられる。上層より第Ⅰ層、暗茶色砂層。第Ⅱ層、暗茶褐色砂層。第Ⅲ層、暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、褐色砂層となっている。第Ⅴ層は、地山である。

遺物は、上層部より、土器片 1 点と石片 4 点が検出された。石片の内、1 点は白メノウ、3 点は黒耀石である。
(伊藤加代子)

第 13 号ピット (第 16 図, 図版 5 B)

壙口 190×184 cm, 深さ 37 cm の不整円形のピットである。断面形は皿状であり、壁はやや緩やかに立上っている。長軸は、南一北の方向である。覆土は、ブロック状に堆積しており、6 層に分けられた。第Ⅰ層は、若干の褐鉄の小ブロックが見られる灰色火山灰層で、第Ⅰ'層が、暗灰色火山灰層である。第Ⅱ層は、かなりの褐鉄と、若干の砂を含む灰黄色火山灰層である。第Ⅱ'層は、暗灰褐色砂層で、火山灰とかなりの褐鉄を含む。第Ⅲ層は、黒褐色砂層。第Ⅳ層は、暗灰褐色砂層で、共にかかなりの褐鉄を含んでいる。第Ⅴ層は地山である。遺物は、何ら検出されなかった。

(伊藤加代子)

第 14, 15 号ピット (第 17 図)

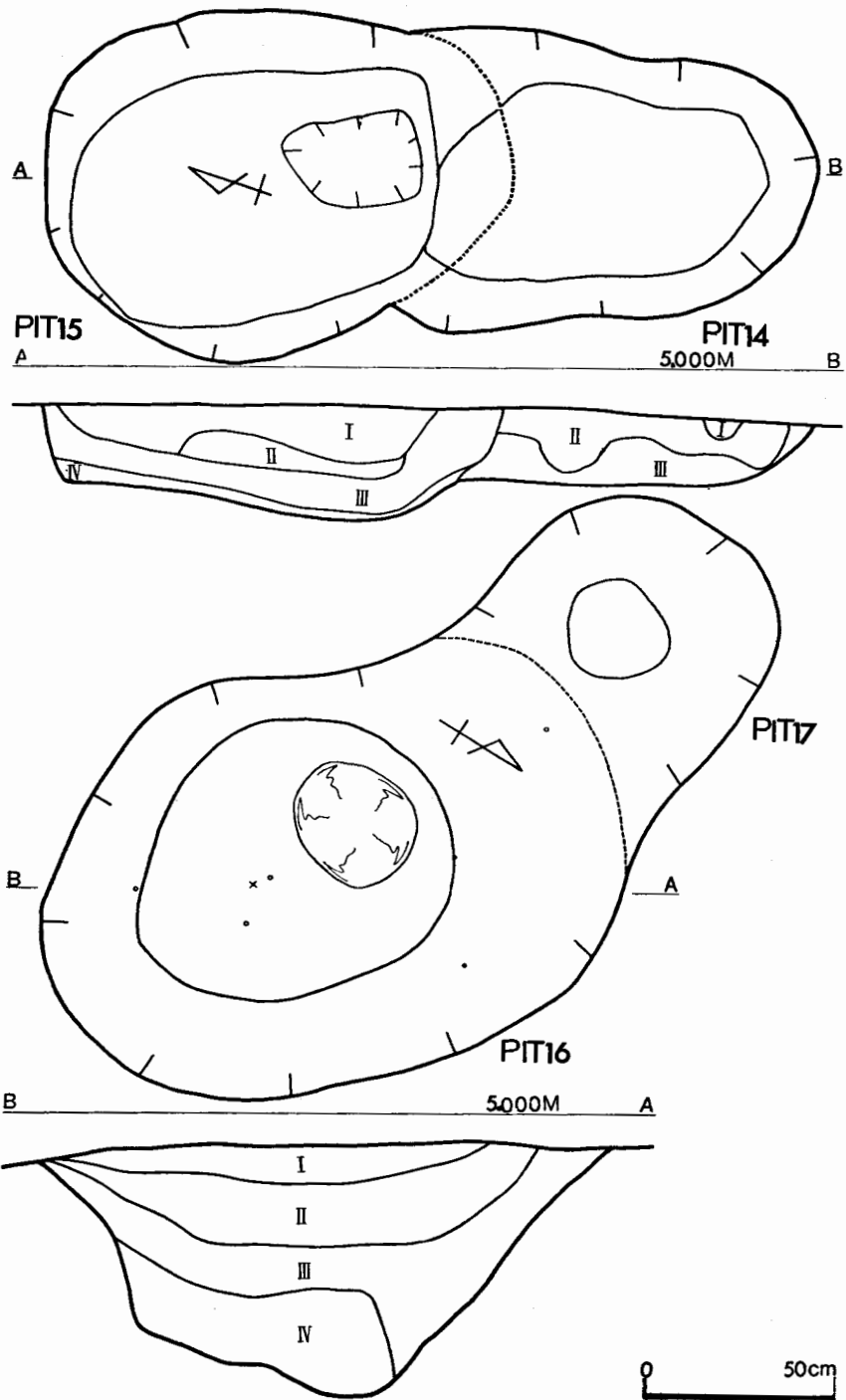
第 14, 15 号は二連ピットで、新旧関係は、セクション図によると、第 15 号が新しい。

第 14 号ピットは、壙口 122×(93) cm, 深さ 30 cm の不整楕円形プランを呈すると推定される。壁は、垂直に近く、底面は平坦で、長軸は、ほぼ南一北を指す。南東よりに、浅い掘り込みが確認された。

層の堆積は、第Ⅰ層、灰褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層で、第Ⅰ層より、やや暗い。第Ⅲ層、暗褐色砂層で、各層共少量の褐鉄を含んでいる。地山は、暗黄褐色砂層である。遺物は何ら検出されていない。

第 15 号ピットは、壙口 (122)×73 cm, 深さ 20 cm の不整楕円形プランを呈すると推定される。断面形は皿状である。長軸は、ほぼ南一北を指す。

層の堆積は、第Ⅰ層、黒褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、暗灰黄褐色砂層。第Ⅳ層、暗灰黄褐色砂層で、各層共少量の褐鉄を含む。遺物は、何ら検出されていない。(内山 真澄)



第17図 第14号, 第15号, 第16号, 第17号ピット実測図

第 16, 17 号ピット (第 17 図)

第 16 号ピットは、第 17 号ピットと切り合い関係にあるが、重複しているのか、第 16 号ピットに付属するものかは不明である。

第 16 号ピットは、西側が切られているため、全体形は窺えないが、ほぼ不整形円形と思われる。壙口は(157)×124cm と推定される。深さ 67cm、壁はほぼ 45° に立ち上がっており底面中央には、小ピットがある。長軸方向は、北北西—南南東である。覆土は、第Ⅰ層が、若干の褐鉄と火山灰を含む暗灰褐色砂層。第Ⅱ層は、炭化物を含む暗灰褐色砂層。第Ⅲ層は、灰黄褐色砂層。第Ⅳ層は、灰茶褐色砂層で、共に若干の炭化物を含んでいる。

第 17 号ピットは、壙口(58)×73 cm の不整形円形ピットと推定される。立ち上がりは、なだらかで、底面は皿状を呈する。覆土の堆積状態は不明である。(伊藤加代子)

遺 物 (第 19 図 11~14, 図版 12A, B)

第 16 号ピットからは、土器片 2 点、石片 4 点、木炭 3 点、骨粉 2 点が出土している。

11, 12 は、黒耀石の幅広の矩形剝片で、12 はバルブ部分を欠損する。13, 14 は胴部片で 13 の地文は、RL の単節斜行縄文である。14 は、縦に施された羽状縄文の上を半截竹管で、縦、横に連続刺突している。所謂「内面突引文」といわれるものである。従って「天神山式」、「智東 B 式」といわれる土器の仲間であろう。色調は、各々灰褐色、黒灰色である。(上野 秀一)

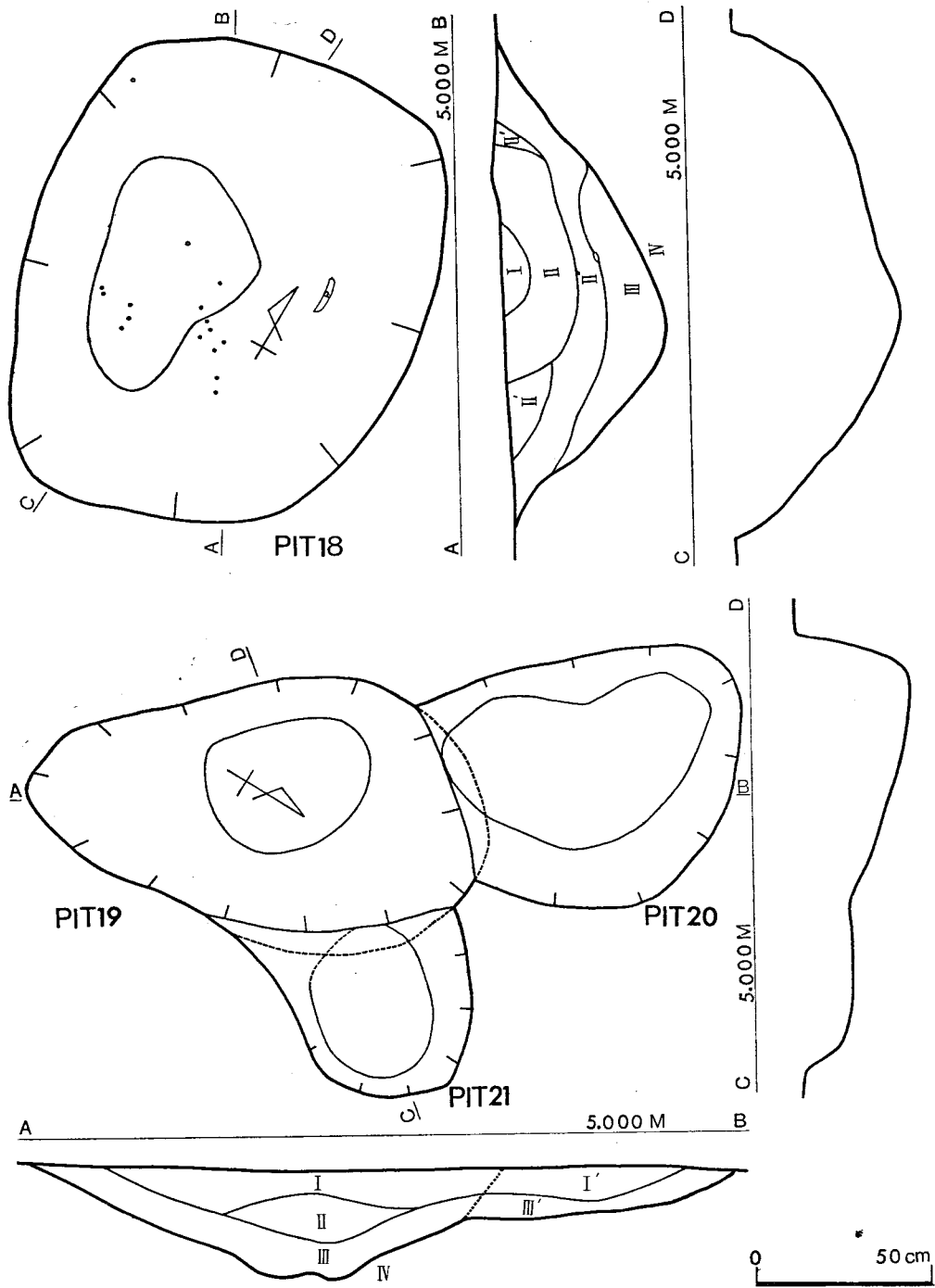
第 18 号ピット (第 18 図)

壙口 155×117 cm、深さ 47 cm の不整形四角形のピットである。壁は緩やかに立ち上がっており、底面はやわらかいが、西壁は硬くしまっている。覆土は、第Ⅰ層が若干の褐鉄を含んだ暗灰褐色砂層で、第Ⅱ、Ⅱ'、Ⅱ'' 層は、若干の褐鉄を含んだ灰褐色砂層である。第Ⅱ' 層は全体に暗い。第Ⅱ'' 層は、鉄分が少なく、第Ⅱ層より暗く、漸移的に変化している。第Ⅲ層は、褐鉄を全体に含む灰色砂層で、第Ⅱ層、第Ⅱ' 層よりは暗い。長軸は南—北方向である。(伊藤加代子)

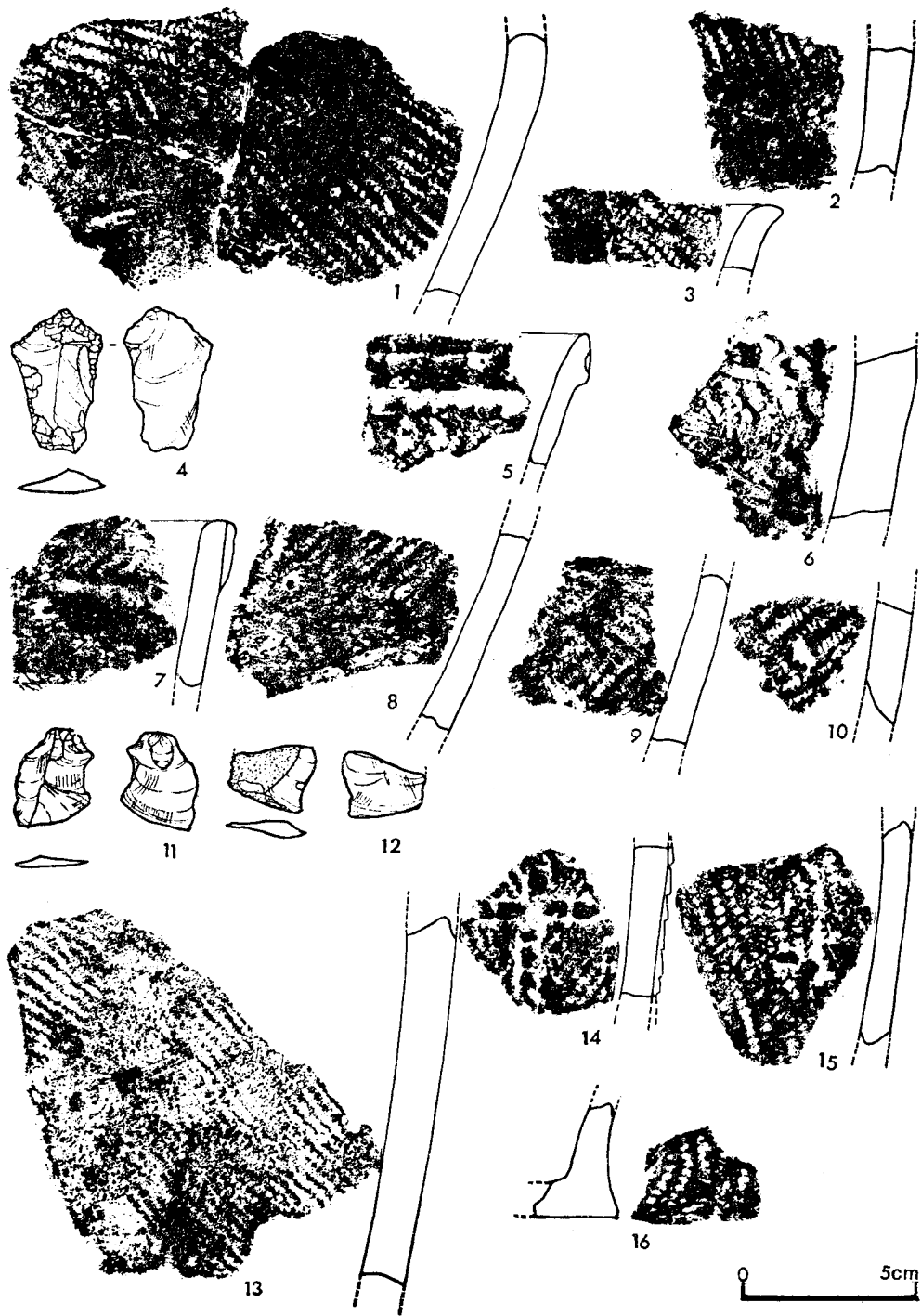
遺 物 (第 19 図 1~3, 図版 9 B)

遺物は、土器片 15 点が、上層 3 点、中層 8 点、下層 4 点出土している。石片は、上層 1 点、壁寄りから 1 点出土している。

1, 2 は、胴部土器片で、RL の単節斜行縄文がある。3 は、口縁部片で、少し外湾する。地文は、RL である。色調は、すべて暗灰色。(上野 秀一)



第18図 第18号, 第19号, 第20号, 第21号ピット実測図

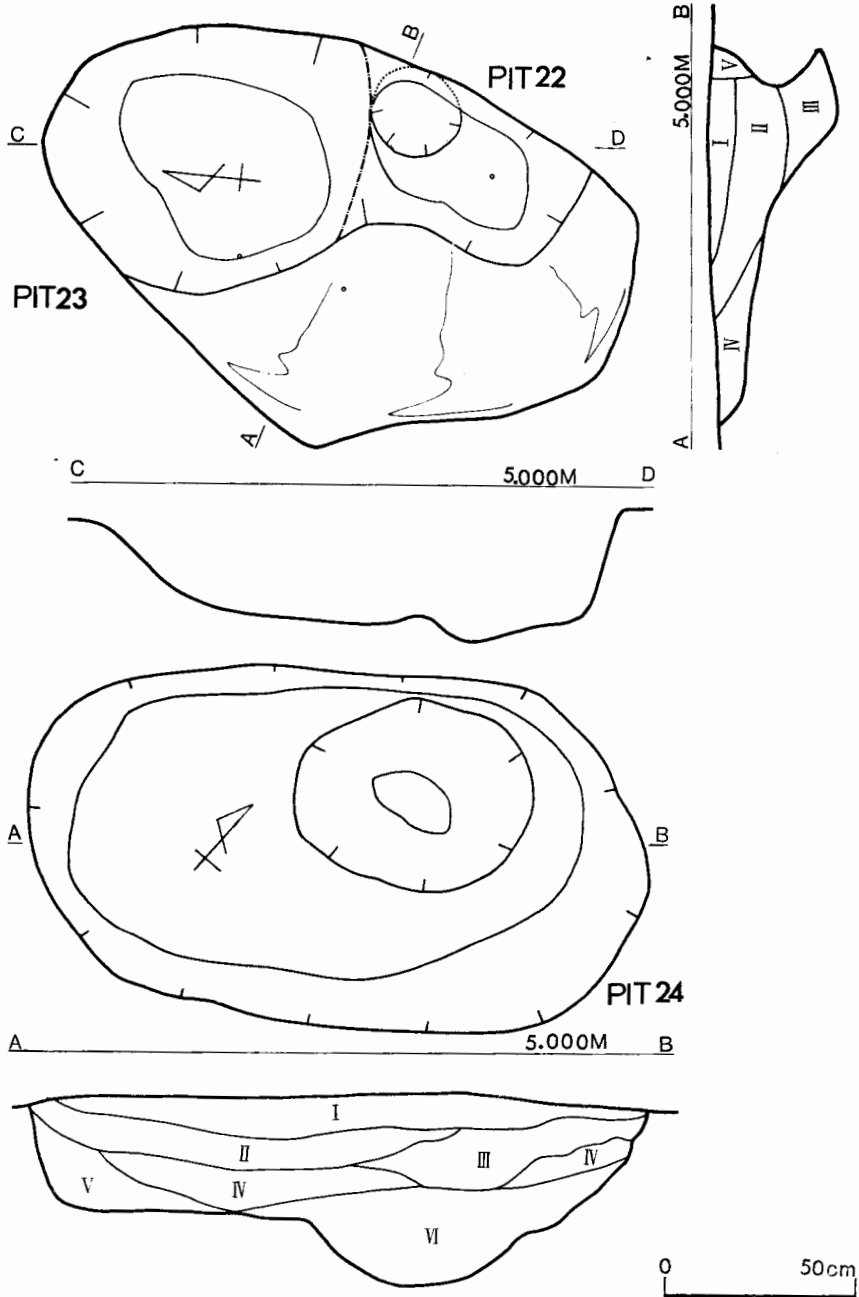


第19図 第9号(4), 第16号(11~14), 第18号(1~3), 第30号(6), 第38号(10),
 第39号(15, 16), 第46号(5), 第48号(7~9) ピット出土遺物

第 19, 20, 21 号ピット (第 18 図)

第 19, 20, 21 号ピットは三連ピットで、新旧関係は、セクションからは必ずしも明瞭とはいえないが第 19 号が新しく、第 20, 21 号が古いものと思われる。第 20, 21 号の新旧関係は不明である。

第 19 号ピットは、北西と北東側を各ピットで切られているが、壙口 130×79 cm, 深さ 31 cm の



第 20 図 第 22 号, 第 23 号, 第 24 号ピット実測図

不整卵形プランを呈している。断面形は皿状であり、長軸は北西—南東を指す。

第20号ピットは、壙口(86)×73 cm、深さ15 cmの不整楕円形プランを呈すると推定される。断面形は皿状で、長軸は北東—南西を指す。第19、20号ピットにおける層の堆積は、第Ⅰ、Ⅰ'層、砂を少し含む灰褐色火山灰層。第Ⅱ層、灰褐色砂層。第Ⅲ、Ⅲ'層、暗灰色砂層。第Ⅳ層は地山である。

第21号ピットは、壙口(50)×53 cm、深さ15 cmで不整楕円形を呈すると思われる。壁は垂直に近く、底面はほぼ平坦で、層の堆積状態は、不明である。これらの三つのピットから、遺物は何ら検出されていない。

(内山 真澄)

第22、23号ピット (第20図)

第22、23号は、二連ピットである。新旧関係は不明である。

第22号ピットは、壙口(57)×37 cm、深さ34 cmの不整長方形プランを呈する。壁は垂直に近く、底面は北側に向かって傾斜している。長軸は、北東—南東の方向である。底面には、24×19 cmの小ピットがある。

第23号ピットは、壙口(88×73) cm、深さ26 cmの不整円形プランを呈し、断面は皿状であり、長軸は、南—北を指す。

層の堆積は、第Ⅰ層、暗灰色火山灰層。第Ⅱ層、灰色火山灰層。第Ⅲ層、若干の火山灰を含む暗灰褐色砂層。第Ⅳ層、暗灰褐色砂層。第Ⅴ層、暗褐色砂層である。

出土遺物は、第22号ピットより、黒耀石の剝片1点、第23号ピットより、黒耀石の剝片1点、第22号ピットと第23号ピットにまたがって、石片1点が検出されている。

(内山 真澄)

第24号ピット (第20図, 図版6A)

第24号ピットは、壙口162×94 cmで不整楕円形を呈する。長軸方向は、北東—南西方向である。深さは、掘り込み面より30 cmを数える。

壁の状態は、直立に近く、壙底面と接する部分にて若干丸味を帯びる。壙底面は、ほぼ平坦である。壁面、壙底面ともに非常に軟弱である。壙底面東北部に、長径63 cm、矩径51 cm、深さ、壙底面より20 cm程の楕円形を呈するくぼみがある。このくぼみの壁は、ゆるやかに傾斜して、壙底部は丸底となる。遺物は、覆土中、壙底部にも一切みとめられなかった。

埋没の状況は、第Ⅰ層、灰黄褐色火山灰層。第Ⅱ層、火山灰を含んだ灰褐色砂層。第Ⅲ層、灰色砂層。第Ⅳ層、暗灰色砂層。第Ⅴ層、黄褐色砂層。第Ⅵ層、しまりがなく、やわらかい暗褐色砂層となっている。

第Ⅶ層以外の層には、鉄分の沈着した、砂の小塊が全体に含まれている。

(羽賀 憲二)

第25、26号ピット (第21図, 図版6B)

第25号ピットは、第26号ピットと重複し、北西部は切られており、第25号ピットの方が古い。ほぼ不整楕円形と推定される。ピットの底面は、皿状である。壙口は(76)×63 cm、深さは16 cmで、

立ち上がりは緩やかである。長軸方向は、北西—南東である。

層は、1層しかなく、第Ⅳ層で、暗灰褐色砂層で、若干の褐鉄を含む。出土遺物は何ら検出されていない。

第26号ピットは、不整円形であろうと推定される。ピットの底面は、凹形である。坑口は、(83)×73 cmで、深さは42 cmである。立ち上がりは垂直に近い。長軸は、南—北の方向である。

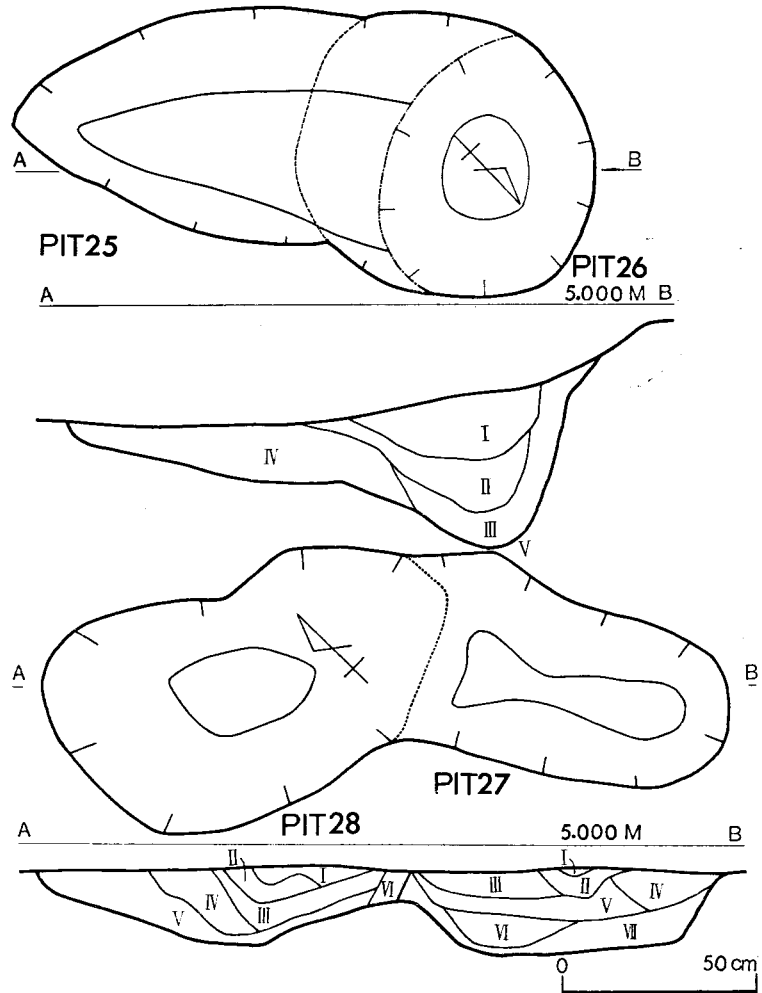
層準は、第Ⅰ層が、黒褐色砂層で若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅱ層は、灰黒褐色砂層で若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅲ層は、暗灰色砂層で、褐鉄を含んでいない。第Ⅳ層は、地山である。出土遺物は何ら検出されていない。
(長谷川克浩)

第27, 28号ピット (第21図)

第27, 28号は二連ピットである。新旧関係は、第28号が新しい。

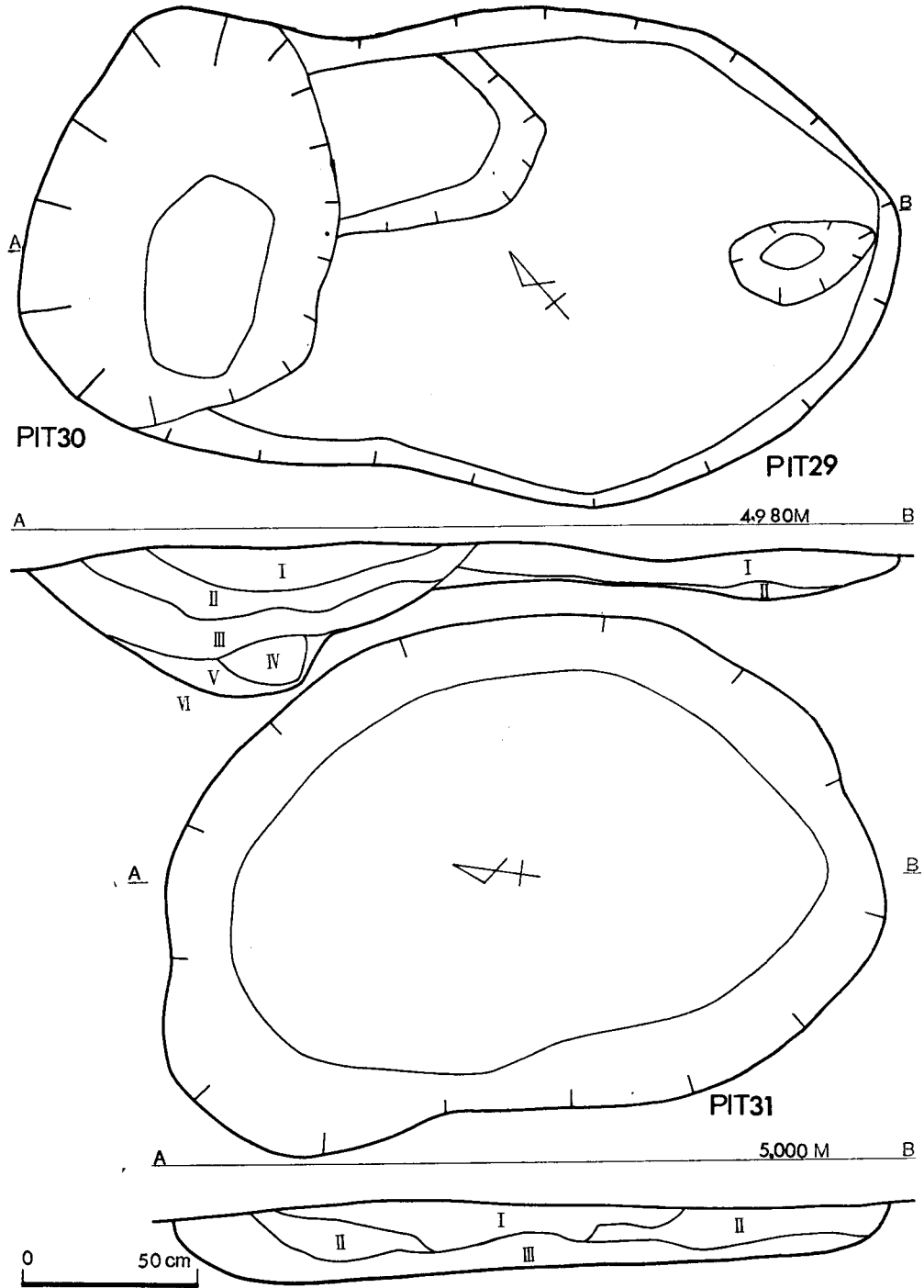
第27号ピットは、坑口(80)×46 cm、深さ23 cmの不整楕円形プランを呈すると推定される。長軸は、ほぼ南—北を指す。立上りは、ほぼ45度で、底面は平坦である。層の堆積は、第Ⅰ層、若干の黄褐鉄を含む灰茶褐色火山灰層。第Ⅱ層、若干の火山灰を含む茶褐色砂層。第Ⅲ層、火山灰を含む灰茶褐色砂層。第Ⅳ層、若干褐鉄を含む赤茶褐色砂層。第Ⅴ層、若干褐鉄を含む茶褐色砂層。第Ⅵ層、若干褐鉄を含む黄茶褐色砂層。第Ⅶ層、黄灰褐色砂層である。遺物は、何ら検出されていない。

第28号ピットは、坑口107×59 cm、深さ21 cmの不整楕円形プランを呈する。断面は皿状を示す。



第21図 第25号, 第26号, 第27号, 第28号ピット実測図

長軸方向は、東一北を指す。層の堆積は、第Ⅰ層、若干の黄褐鉄を含む灰黄褐色火山灰層。第Ⅱ層、若干の黄褐鉄を含む灰茶褐色火山灰層。第Ⅲ層、少量の褐鉄を含む黄茶褐色砂層。第Ⅳ層、黄褐色砂層。第Ⅴ層、黄灰褐色砂層。第Ⅵ層、暗黄褐色砂層である。遺物は、何ら検出されていない。(内山真澄)



第22図 第29号, 第30号, 第31号ピット実測図

第 29, 30 号ピット (第 22 図)

第 29, 30 号ピットは重複しており, 新旧関係は, セクション図から見ると, 第 30 号ピットの方が新しい。

第 29 号ピットは, 北西部を第 30 号ピットで切られており, 不整楕円形と推定される。底面は, 皿状をしている。ピットの壙口は, (162)×141 cm で, 深さは 13 cm である。立ち上がりは, 緩やかである。長軸は, 北西—南東の方向である。ピットの南東壁に小ピットが付属している。層準は, 第Ⅰ層が, 暗灰褐色砂層で, 火山灰と若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅱ層は, 灰黒褐色砂層で若干の褐鉄を含んでいる。

出土遺物は, 何ら検出されていない。

第 30 号ピットは, 不整四角形と推定される。底面は, 凹型をしている。ピットの壙口は, 122×86 cm で, 深さは 43 cm である。立ち上がりは, 緩やかである。長軸は, 北東—南西の方向である。

層準は, 第Ⅰ層, 暗灰褐色砂層で火山灰を含んでいる。第Ⅱ層, 灰黒褐色砂層。第Ⅲ層, 灰褐色砂層で幅広く褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層, 黒褐色砂層。第Ⅴ層, 灰黄褐色砂層で, Ⅲ層を除いて各層に若干の褐鉄を含む。第Ⅵ層は, 地山である。壁に約 60×50 cm の皿状ピットが付属している。

(長谷川克浩)

遺 物 (第 19 図 6, 図版 9 B)

第 30 号ピットの上層から土器片 1 点が得られたのみである。

第 19 図 6 は, 胴部片で器は厚く, 灰褐色を呈し, 大粒の単節縄文が施されている。伊達山式土器に相当しよう。

(上野 秀一)

第 31 号ピット (第 22 図)

壙口 204×141 cm の不整楕円形を呈する。長軸方向は, 南—北である。深さは, 15 cm である。壁の状態は, 直立に近く壙底面と接する部分にて, やや丸味を帯びる。壙底面は, 平坦である。壁, 壙底面ともに非常に軟弱である。

埋没状況は, 第Ⅰ層, 暗灰褐色火山灰層。第Ⅱ層, 褐色砂層。第Ⅲ層, 暗黄褐色砂層。いずれの層にも, 鉄分の沈着した砂の小塊が含まれる。

遺物は, 覆土中, 壙底部にも一切みられなかった。

(羽賀 憲二)

第 32 号ピット (第 23 図, 図版 7 A)

壙口 124×105 cm の不整楕円形を呈する。長軸方向は, 北西—南東方向である。深さは, 24 cm 程である。

壁の状態は, 直立に近く, 壙底面は平坦である。壁, 壙底面ともに非常に軟弱である。

埋没状況は, 第Ⅰ層, 火山灰混入の暗灰色砂層。第Ⅱ層, 暗褐色砂層。第Ⅲ層, 暗黄褐色砂層。

第Ⅳ層、暗赤褐色砂層となっている。いずれの層中にも、鉄分の沈着した砂の小塊が含まれている。

遺物は、覆土中、壙底面にも一切みられなかった。(羽賀 憲二)

第 33 号ピット (第 23 図)

壙口 113×87 cm、深さ 15 cm の不整楕円形のピットである。床面は、ほぼ平らで、壁は西壁が垂直に近く、あとは緩やかに立ち上がっている。長軸は、南東—北西である。覆土は、皿状で、2 層に分かれている。第Ⅰ層は、暗灰褐色火山灰層で、褐鉄小ブロックを多く含む。第Ⅱ層は、褐鉄小ブロックを若干含む暗灰褐色砂層である。

遺物は、何ら出土していない。(伊藤加代子)

第 34 号ピット (第 23 図)

長楕円形のピットで、底面はほぼ平らである。壙口は、72×23 cm で、深さは、13 cm である。立ち上がりは、やや急傾斜で、長軸は、西北西—東南東の方向である。

層準は、第Ⅰ層が、暗灰褐色火山灰混砂層である。第Ⅱ層は、灰茶褐色砂層で、各々若干の火山灰と褐鉄を含んでいる。第Ⅲ層は、茶褐色砂層である。第Ⅳ層は、暗黄褐色砂層である。両層とも若干の褐鉄を含む。第Ⅴ層は地山である。

遺物は、何ら検出されていない。(長谷川克浩)

第 35 号ピット (第 23 図, 図版 7 A)

壙口 84×77 cm の不整楕円形を呈する。長軸方向は、北西—南東方向。深さは、21 cm 程である。

壁の状態は、かなりの傾斜をもっており、壙底面は、ほぼ平坦である。壁、壙底面ともに、非常に軟弱である。

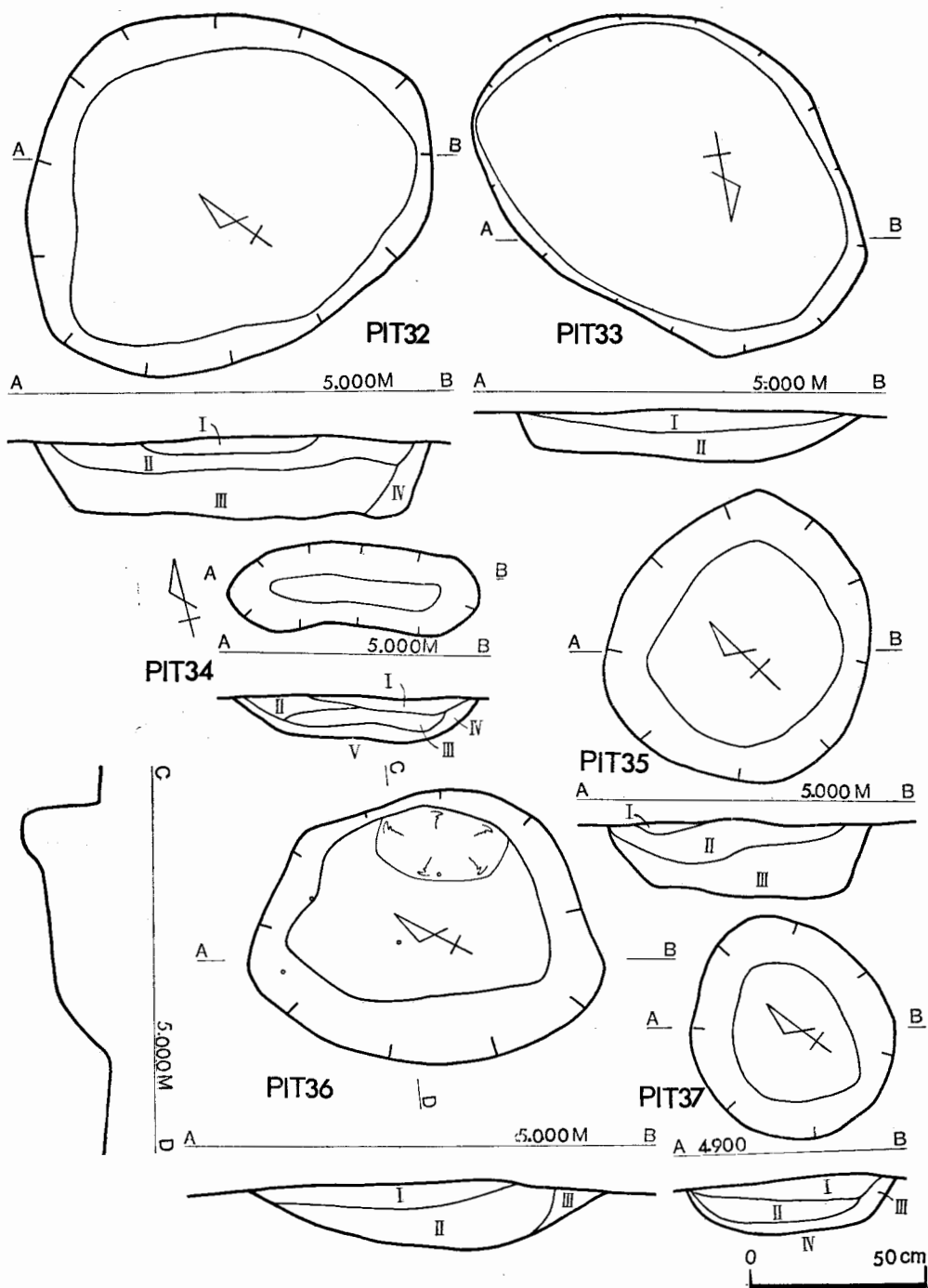
埋没状況は、第Ⅰ層、火山灰混入の暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、暗黄褐色砂層である。いずれの層にも鉄分が沈着した、砂の小塊が含まれており、第Ⅰ層が比較的少ない様である。(羽賀 憲二)

遺物は、覆土中、壙底面ともに一切みられなかった。

第 36 号ピット (第 23 図)

壙口 97×80 cm、深さ 20 cm の不整多角形ピットである。壁の立ち上がりは緩やかであるが、西壁際に小ピットがあるため、そこだけは垂直に近い立ち上がりを見せている。長軸は、南—北方向である。覆土は、第Ⅰ層が若干の火山灰を含む暗灰褐色砂層。第Ⅱ層は、黒褐色砂層。第Ⅲ層は、暗褐色砂層で、3 層とも若干の褐鉄小ブロックを含んでいる。

遺物は、石片(上層 1, 下層 3)が 4 点検出されている。(伊藤加代子)



第23図 第32号, 第33号, 第34号, 第35号, 第36号, 第37号ピット実測図

第 37 号ピット (第 23 図, 図版 7 A)

不整円形のピットで、底面は皿状である。壙口は、65×57 cm で、深さは 16 cm である。立ち上がりは、かなり急傾斜である。長軸は、ほぼ北東—南西の方向である。

層準は、第Ⅰ層が、灰褐色火山灰層で、若干の砂と褐鉄を含んでいる。第Ⅱ層は、暗褐色火山灰質砂層で、若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅲ層は、黄褐色砂層で、かなりの褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層は、地山である。

遺物は、何ら検出されていない。

(長谷川克浩)

第 38 号ピット (第 24 図)

壙口 190×150 cm、深さ 98 cm の不整多角形のピットである。底面はほぼ平らで、壁は急傾斜な立ち上がりを見せている。ピットの南と北西に浅い張り出し部が確認されている。

覆土は、8 層に分けられる。第Ⅰ層は、若干の褐鉄を含む灰褐色火山灰層。第Ⅱ層は、暗黄褐色砂層。第Ⅲ層は、灰黄褐色火山灰層に砂と若干の褐鉄が混じっている。第Ⅳ層は、若干の火山灰を含んだ灰茶褐色砂層。第Ⅴ層は、暗灰茶褐色砂層で縞状に黄色の鉄分を若干含んでいる。第Ⅵ層、第Ⅶ層は、共に暗灰茶褐色砂層であるが、第Ⅶ層の方には、黄色の鉄分が縞状にかなり見られた。第Ⅷ層は、暗黄茶褐色砂層である。

(伊藤加代子)

遺物 (第 19 図 10, 図版 9 B)

遺物は、ピット下層より土器片が 4 点、石片が 2 点検出されている。

10 は、胴部片で、地文は LR である。色調は灰褐色で、焼成は堅い。

(上野 秀一)

第 39 号ピット (第 24 図)

不整卵形のプランを呈し、底面は凹型をしている。壙口は、200×105 cm で、深さ 68 cm である。立ち上がりは 45° に近い。長軸は、ほぼ東—西の方向である。層準は、第Ⅰ層が、灰褐色砂層。第Ⅱ層は、灰黄褐色砂層。第Ⅲ層は、灰褐色砂層で、以上の各層には若干の火山灰と褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層は、灰茶褐色砂層で、少量の火山灰を含んでいる。第Ⅴ層は、茶褐色砂層で、若干の褐鉄を含み、縞状に火山灰が入っている。第Ⅵ層は、暗黄褐色砂層である。第Ⅶ層は、地山である。

ピットの中央部に小ピットが 1 個ある。

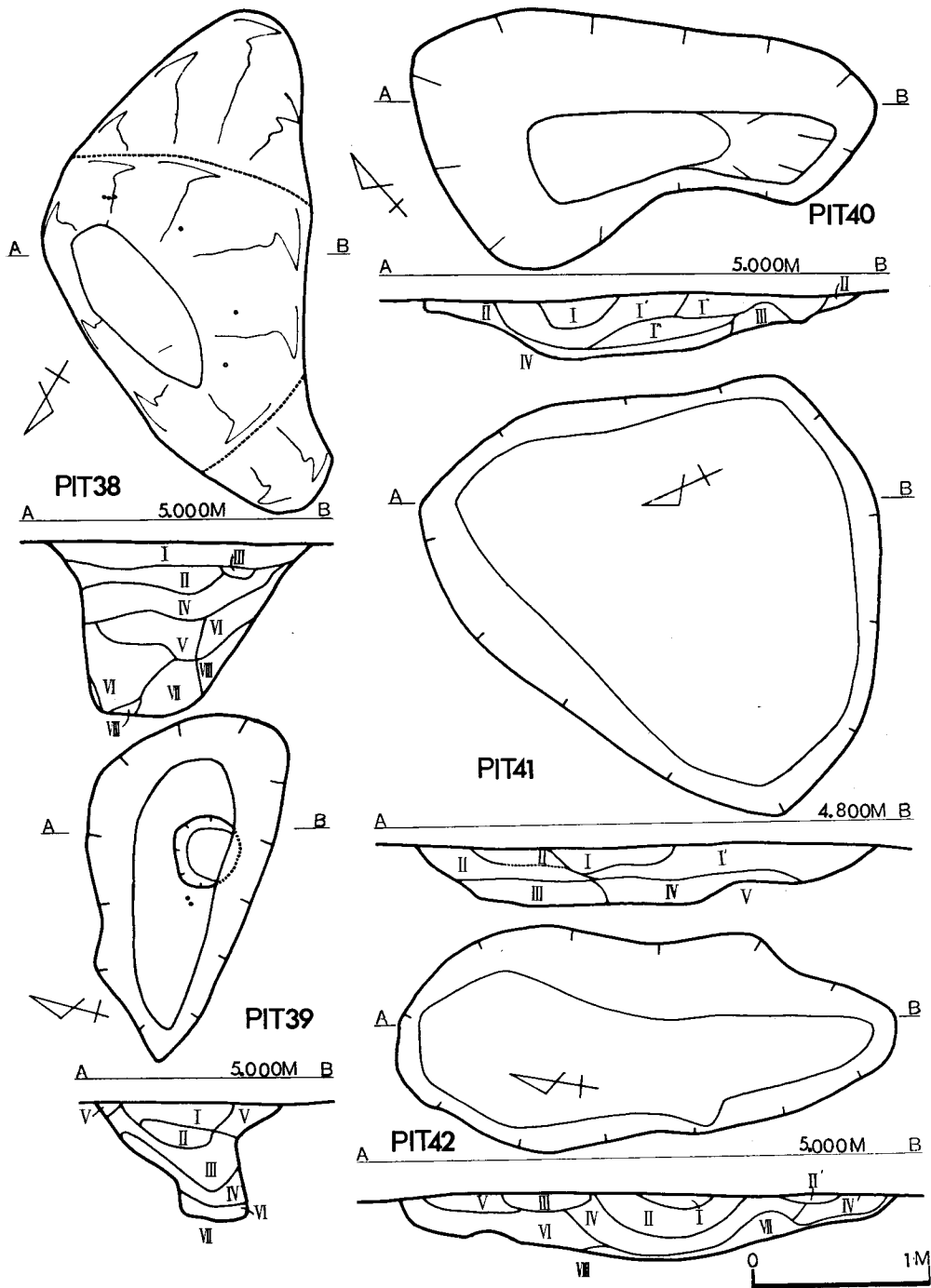
(長谷川克浩)

遺物 (第 19 図 15, 16, 図版 9 B)

土器片 2 点が出土した。

15 は、胴部片で、地文は RL である。16 は、底部片で、強い張り出しがある。LR の地文がある。平底。色調は、共に褐色である。

(上野 秀一)



第24図 第38号, 第39号, 第40号, 第41号, 第42号ピット実測図

第40号ピット (第24図)

坑口 250 cm × 148 cm の不整楕円形のピットである。深さ 40 cm, 底面中央がやや高くなっており、壁の立ち上がりは緩やかである。長軸は北西—南東方向である。覆土の堆積状態は次のようになっている。第Ⅰ, Ⅰ', Ⅰ'', Ⅰ'''は、共に砂と若干の黄褐鉄を含む灰褐色火山灰層であるが、その違いは第Ⅰ'層が明るく、第Ⅰ''層が暗茶色がかっており、第Ⅰ'''層は全体に茶色が強くなっている点である。第Ⅱ層は、灰黄褐色砂層。第Ⅲ層は、灰茶褐色砂層で共に若干の火山灰を含み、第Ⅳ層は暗黄褐色砂層で地山である。

遺物は何ら検出されていない。

(伊藤加代子)

第41号ピット (第24図)

坑口 268 × 237 cm, 深さ 32 cm の不整三角形のピットである。立ち上がりは緩やかな傾斜を呈し、底面はほぼ平らである。

層準は、第Ⅰ層、灰黄褐色砂層で火山灰と若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅰ'層、第Ⅰ層と同じく灰黄褐色砂層に火山灰を含むが、褐鉄を多く含んでいる。第Ⅱ層、灰黄褐色砂層ではあるが、第Ⅰ層と並ぶ、上部においては、暗灰褐色砂層となっている。第Ⅲ層、セクションの北東にあり、灰黒褐色砂層に若干の褐鉄を含んでいる。第Ⅳ層、第Ⅰ'層の下にあって、暗褐色砂層に褐鉄を多く含んでいる。

遺物は、一片も出土しなかった。

(中津 欣也)

第42号ピット (第24図)

坑口 281 × 128 cm, 深さ 38 cm の不整楕円形のピットである。立ち上がりは、緩やかな傾斜を呈し、底面は皿状である。

層準は、第Ⅰ層、灰黒褐色砂層で火山灰と黄褐鉄を含んでいる。第Ⅱ, Ⅱ'層は灰褐色砂層で共に火山灰を含むが、Ⅱ'層の方が多量。第Ⅲ層、暗灰色砂層で火山灰を含んでいる。第Ⅳ層、暗灰黒褐色砂層。第Ⅳ'層、暗黄褐色砂層。第Ⅴ層、暗茶褐色砂層で若干の火山灰を含んでいる。第Ⅵ層、暗黄褐色砂層で、多くの褐鉄を含んでいる。第Ⅶ層、暗灰黄褐色砂層。Ⅰ, Ⅱ, Ⅱ', Ⅳ, Ⅶ層は、全体に若干の鉄分を含み、Ⅱ', Ⅳ'層は特に多くの褐鉄を含んでいる。

遺物は、一切出土しなかった。

(中津 欣也)

第 43 号ピット

(第 25 図)

壙口 220×170cm,
深さ 18 cm の不整楕
円形プランを呈す
る。立ち上がりはほ
ぼ 45° で底面はほぼ
平坦である。

層の堆積は、第 I
層、火山灰を含む灰
茶褐色砂層。第 II 層、
茶褐色砂層。第 III 層、
固くしまっている灰
褐色砂層。第 IV 層は
地山である。

遺物は 1 点も検出
されていない。

(内山 真澄)

第 44 号ピット

(第 26 図)

不整楕円形のピットで、底面は平らである。壙口は、161×76 cm で、深さ 27 cm である。立ち
上がりは、かなり急傾斜である。長軸は、ほぼ北西—南東の方向である。

層準は、第 I 層が、暗灰黄褐色砂層で若干の火山灰を含んでいる。第 II 層は、灰茶褐色砂層であ
る。第 III 層は、茶褐色砂層。第 IV 層は、暗黄茶褐色砂層。第 V 層は、地山である。なお、これら
の層には、鉄分が含まれていない。

遺物は、何ら検出されていない。

(長谷川克浩)

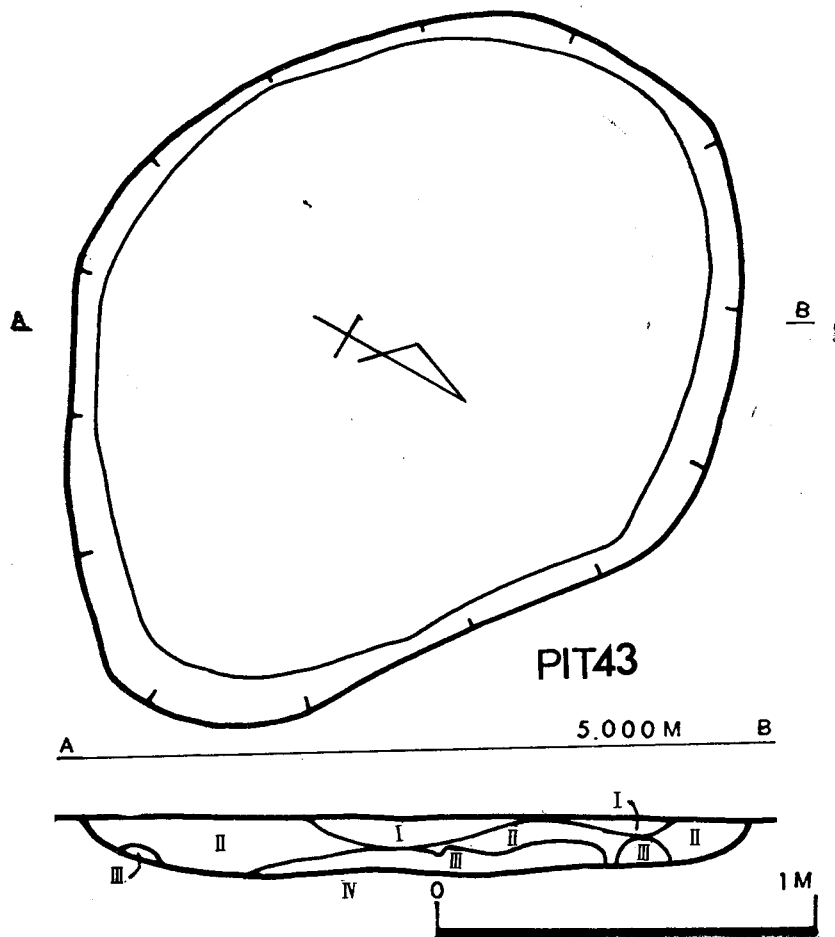
第 45 号ピット (第 26 図)

不整楕円形のピットで、底面は皿状である。壙口は、118×74 cm で、深さは 28 cm である。立
ち上がりは、かなり急である。長軸は、北北西—南南東の方向である。

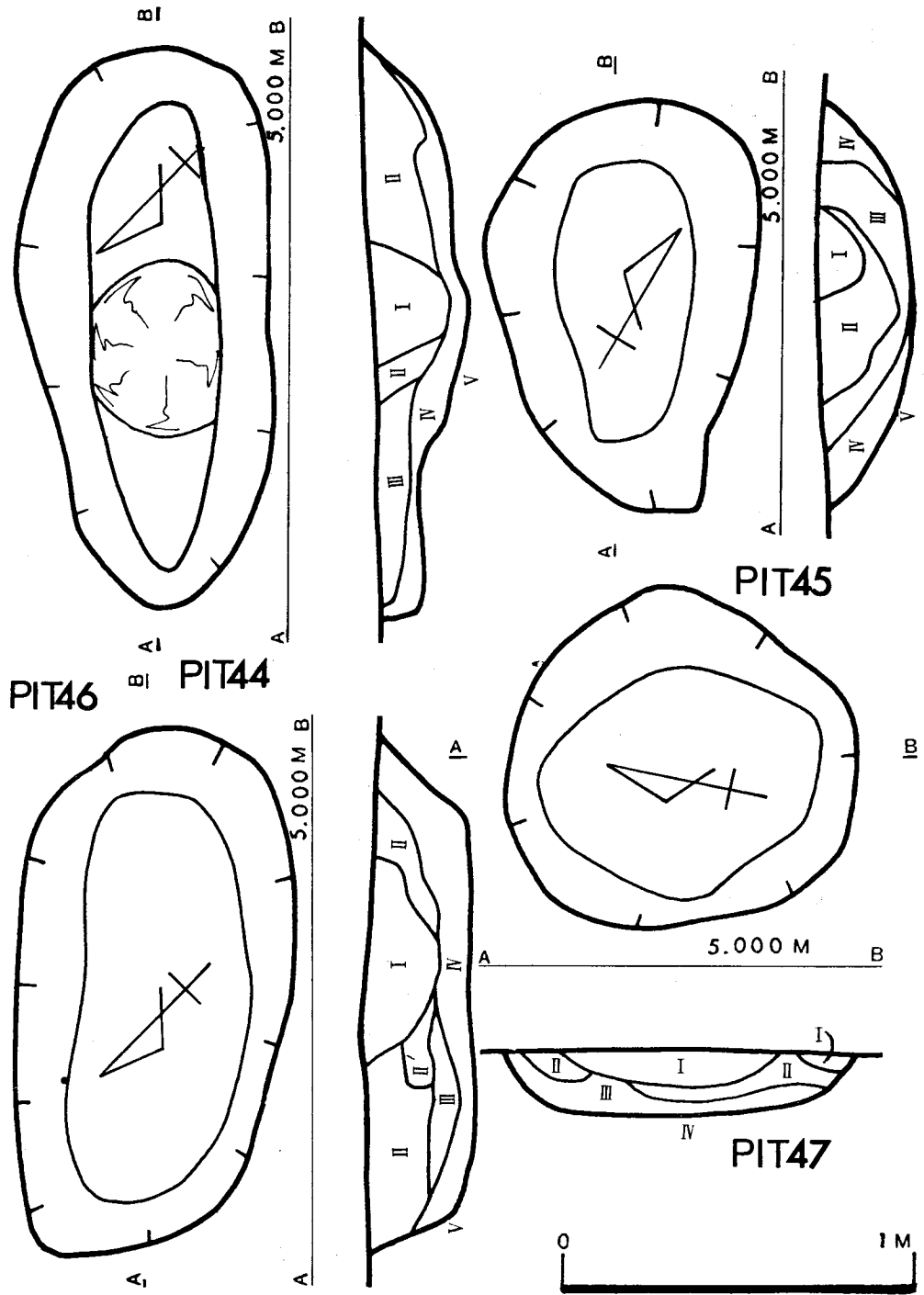
層準は、第 I 層が、灰褐色火山灰層で砂を含んでいる。第 II 層は、暗灰褐色火山灰層で、かなり
の砂を含んでいる。第 III 層は、暗灰茶褐色砂層。第 IV 層は、暗黄褐色砂層。第 V 層は、地山である。

出土遺物は、何ら検出されていない。

(長谷川克浩)



第 25 図 第 43 号ピット実測図



第26図 第44号, 第45号, 第46号, 第47号ピット実測図

第46号ピット (第26図)

坑口 155×80 cm の楕円形を呈する。長軸方向は、北西—南東方向を向く。深さは 30 cm である。壁の状態は、緩やかに傾斜して坑底面と接する部分にて丸味を帯びる。坑底面は平坦である。壁、坑底面ともに非常に軟弱である。

埋没状況は、第Ⅰ層、暗灰褐色砂層。第Ⅱ層、Ⅰ層と同様の層。第Ⅱ'層、暗灰黄褐色砂層。第Ⅲ層、暗灰黒褐色砂層。第Ⅳ層、暗黄褐色砂層である。いずれの層中にも、鉄分の沈着した砂の小塊が含まれている。
(羽賀 憲二)

遺物 (第19図5, 図版9B)

第Ⅱ層中から1点の土器片を得たのみである。

5は、口縁部片で、肥厚帯があり、この上と肥厚帯の直下に、平竈による連続刺突文がある。地文はLRの縄文が認められる。色調は、褐色である。小片のため、明確ではないが、トコロ第6類に相当するものであろうか。
(上野 秀一)

第47号ピット (第26図)

不整形形のピットで、底面は、ほぼ平らである。坑口は、99×97 cm で、深さは 19 cm である。立ち上がりは、かなり急である。

層準は、第Ⅰ層が灰褐色火山灰層で、砂と若干の黄褐鉄を含んでいる。第Ⅱ層は、暗黄茶褐色砂層である。第Ⅲ層は、暗黄褐色砂層である。第Ⅳ層は、地山である。

出土遺物は、何ら検出されていない。
(長谷川克浩)

第48, 49号ピット (第27図)

両ピットともに、内傾するせまい溝が馬蹄形に巡っている。

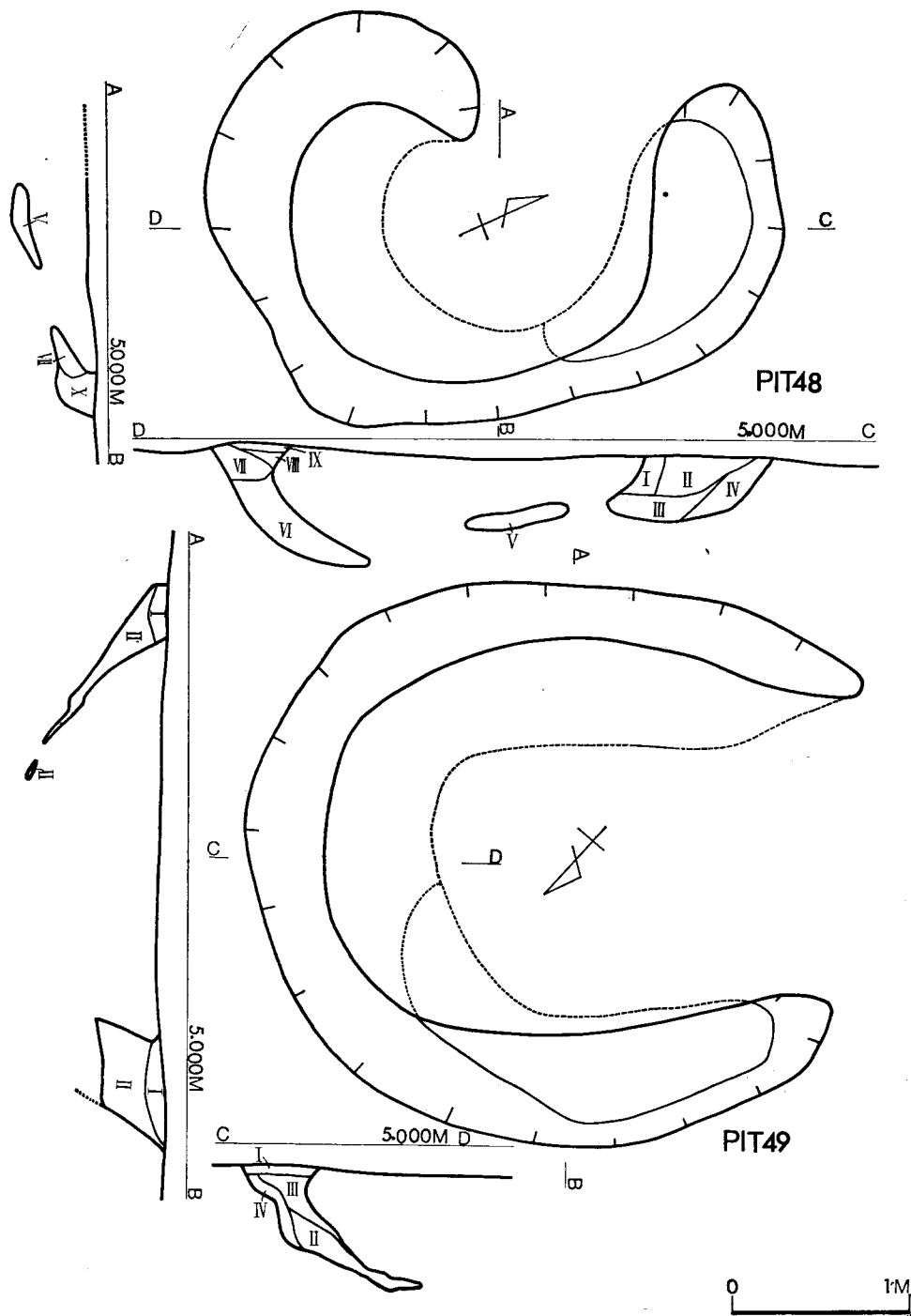
覆土は、内に傾き、くさび状に入り込み途中で切れる。

馬蹄形の中央部は、何ら攪乱を受けた痕跡のない地山である。壁の状態は、非常に軟弱である。

第48号ピットは、規模が長径 323 cm, 短径 234 cm, 最大深で掘り込み面より 72 cm を数える。馬蹄形の口を広げた部分は、北西方向を向く。層準は、第Ⅰ層、灰黒褐色砂層。第Ⅱ層、灰褐色火山灰層。第Ⅲ層、暗茶褐色砂層。第Ⅳ層、暗褐色砂層。第Ⅴ層、暗灰色砂層。第Ⅵ層、黒色砂層。第Ⅶ層、暗灰褐色砂層。第Ⅷ層、火山灰含灰褐色砂層。第Ⅸ層、暗灰色火山灰層。第Ⅹ層、暗褐色砂層となっている。鉄分の沈着した砂の小塊が含まれる層が多く、第Ⅰ, Ⅱ層には多量に、第Ⅳ層、第Ⅶ～第Ⅹ層には若干含まれている。

第49号ピットは、規模が長径 339 cm, 短径 317 cm, 最大深で掘り込み面より 67 cm を数える。馬蹄形の口を広げた部分は、南東方向を向いている。層準は、第Ⅰ層、砂を含む灰褐色火山灰層。第Ⅱ層、暗灰褐色砂層。第Ⅲ層、灰黄褐色砂層。第Ⅳ層、灰黄色砂層となっている。鉄分の沈着

した砂の小塊が全体的にみられ、第Ⅰ層、第Ⅱ層、第Ⅲ層は一面にみられ、第Ⅳ層は、うすく見られる。これらのピットは、層準の堆積状況等からみると人為的に掘られたとは考えられず、自然現象の可能性が強いと思われる。(羽賀 憲二)



第27図 第48号、第49号ピット実測図

遺物 (第19図7~9, 図版9B)

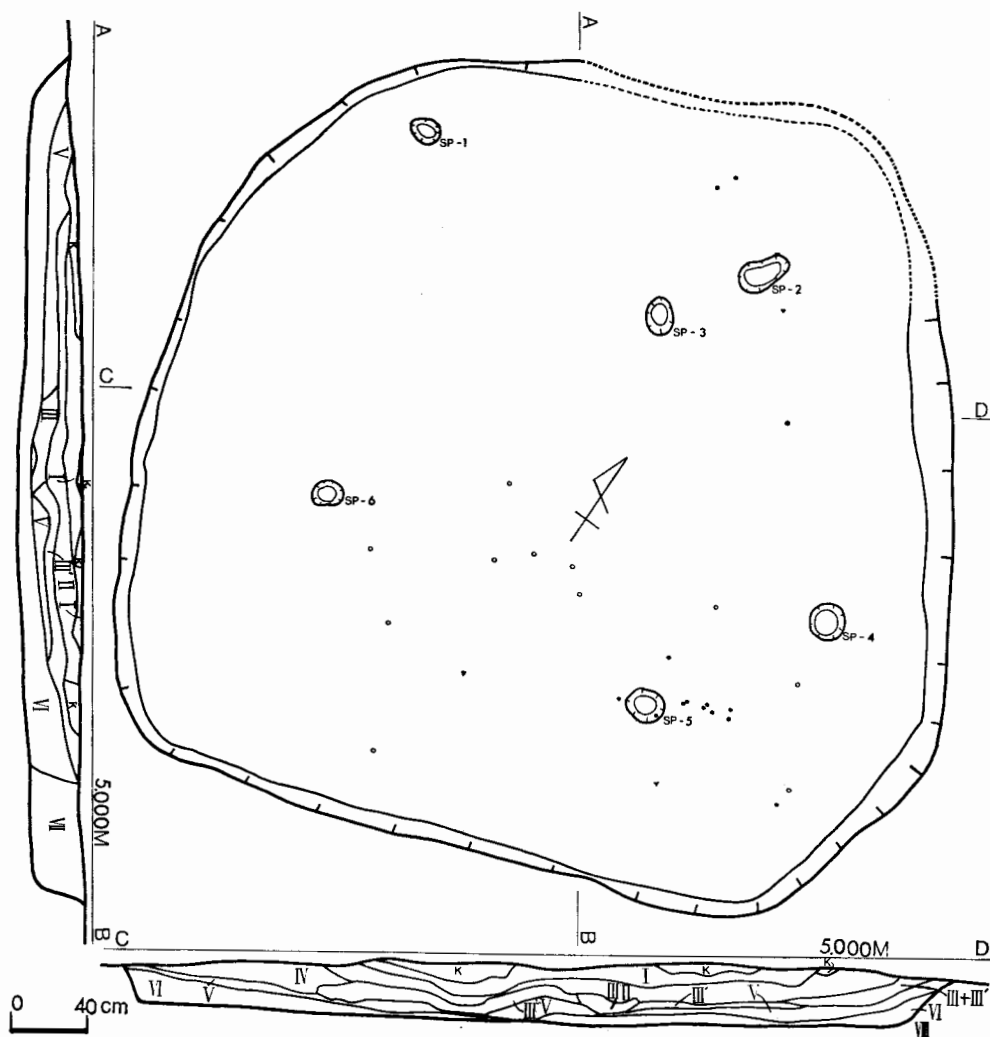
第49号ピットからは、遺物は一切出土しなかった。

第48号ピットからは、第Ⅲ層から土器片3点が出土している。

7は、口縁部片で、肥厚帯がある。断面形は四角形である。地文は、風化して判然としないが、LRの縄文であろうか。8, 9は、共に胴部片で、地文として羽状縄文がある。色調は、7が褐色、8, 9が灰褐色である。 (上野 秀一)

第2節 竪穴住居跡状遺構

第1号竪穴住居跡状遺構 (第28図, 図版7B)



第28図 第1号竪穴住居跡状遺構実測図 (註: Kは攪乱層)

規模は、435×418 cm でほぼ隅丸不整四角形のプランである。長軸は、東北東—西南西の方向である。深さ約 20~30 cm の耕作土を除去した段階で確認された。住居跡状遺構内覆土の状態は、上層より次の如くである。第Ⅰ層、暗灰色火山灰層で、若干の鉄分が小ブロック状に含む。第Ⅱ層、暗灰色火山灰層で、全体にⅠ層より暗く、全体に黄褐色の鉄分が小ブロック状に含まれる。第Ⅲ層、暗灰黒色砂層で、若干の火山灰を含み、全体に薄い鉄分を含む。第Ⅲ'層、暗灰色砂層で、Ⅲ層より全体に灰色が強く、火山灰を含む。第Ⅳ層、暗灰褐色砂層で、色調はⅡ層と似ているが、全体に少し褐色がかっている。第Ⅴ層、暗灰褐色砂層で、全体に黄褐色が強い。第Ⅵ層、暗黄褐色砂層である。第Ⅶ層、暗黒褐色砂層で、褐鉄の小ブロックが多量に含んでいる。第Ⅷ層は地山で、黄褐色砂層である。

壁の立ち上がりは、北東壁はほぼ 45° で、深さ 25cm。北西壁は、かなりの急傾斜で、深さ 20cm。南東壁も、かなりの急傾斜で、深さ 27cm。南西壁は、ほぼ 45° で、深さ 18cm である。なお、北東壁~北隅にかけての立ち上がりは不明瞭であり、底面も明確でない。

柱穴と考えられる小ピットが、6 個発見され、北西壁寄りに 1 個、北壁寄りに 2 個、東壁寄りに 1 個、南東壁寄りに 1 個、南西壁寄りに 1 個存在する（第 1 表）。（長谷川克浩）

第 1 表 第 1 号堅穴住居跡状遺構ピット一覧表

ピット番号	長径×短径 (cm) (cm)	深さ (cm)	ピット番号	長径×短径 (cm) (cm)	深さ (cm)
SP-1	17 × 13	14.4	SP-4	20 × 18	19.0
SP-2	20 × 14	不明	SP-5	20 × 17	不明
SP-3	28 × 15	8.0	SP-6	17 × 13	8.4

遺 物（第 29 図 1~7, 図版 12A, B）

上層から、土器 14 点、石器 1 点、石片 7 点、木炭 4 点、下層からは、石器 1 点、石片 2 点が出土している。底面からは、何ら検出されていない。

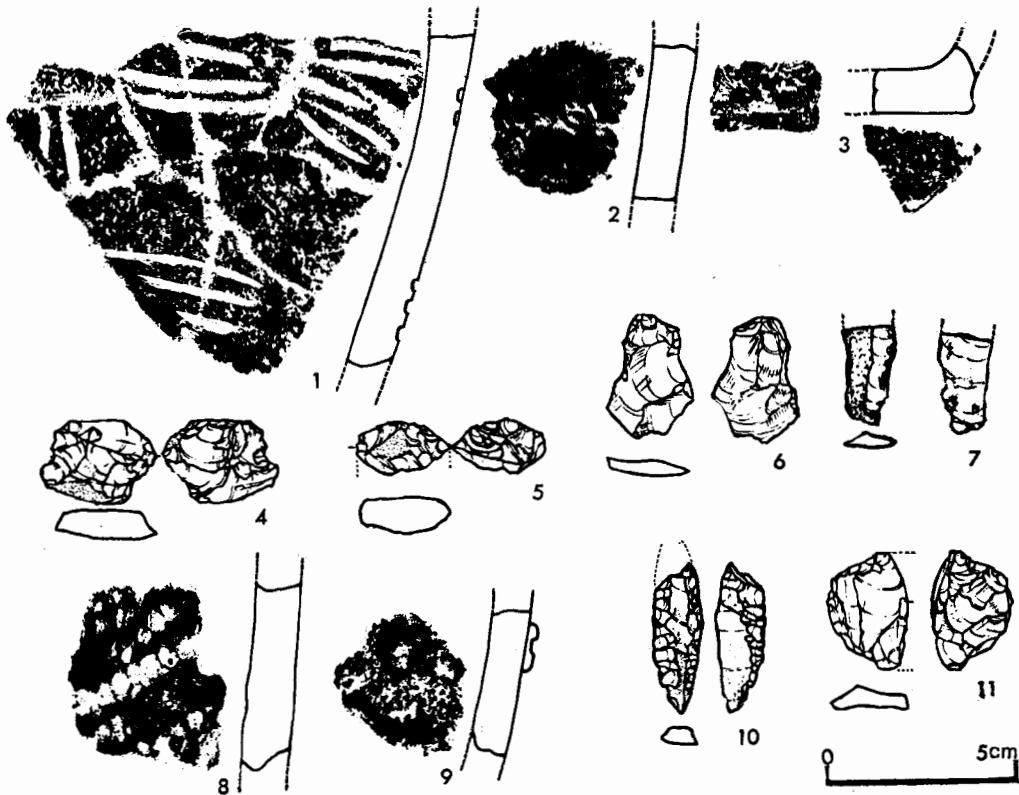
1, 2, は胴部片で、1 には LR の単節縄文地の上に、幅広の沈線文が肋骨状に施されている。2 は、r の無節の地文がある。3 は、底部片で、少し張り出しがある。色調は 1, 2 が茶褐色、3 が灰黒色である。

4, 5 は、共に半両面体石器である。5 は欠損している。6, 7 は、縦長剥片である。7 は、バルブ部分を欠損している。すべて黒燧石である。（上野 秀一）

第 2 号堅穴住居跡状遺構（第 30 図, 図版 8 A）

長径 657cm, 短径 352cm の不整楕円形を呈する。長軸方向は、東南東—西北西を向く。深さは 29cm である。壁の状態は、直立に近く、床面は、ほぼ平坦である。床面には、12 個の柱穴状小ピットがある。壁、床面の状態は非常に軟弱であり明確ではなかった。

埋没状況は、第Ⅰ層、炭化物、焼土が混入する砂層。第Ⅱ層、灰褐色火山灰層。第Ⅱ'層、第Ⅲ層



第29図 第1号(1~7), 第2号(8~10), 第3号(11) 堅穴住居跡状遺構出土遺物

と同様であるが火山灰の混入が少なく暗褐色を呈する砂層。第Ⅲ層, 暗黒褐色砂層。第Ⅳ層, 暗褐色砂層。第Ⅴ, Ⅴ'層は, 暗黄褐色砂層で, 第Ⅴ'層の方が, 若干暗い色調となる。第Ⅱ, Ⅲ, Ⅳ, Ⅴ層には鉄分の沈着した砂の小塊が含まれており, 第Ⅲ層は特に多く全体に入っている。

堅穴内にみられる柱穴状の小ピットは, ほぼ円形に近く, 平均直径 25cm, 深さは 10~20cm である(第2表)。

本堅穴が, はたして住居跡であるか否かは床面, 壁の状態が非常に軟弱であり, 炉跡もなく, なら生活の痕跡を残していない点, 遺物が非常に少なく, 覆土中の上部にしかみられない点等より, 堅穴住居跡とするには, 多くの疑問を残す。(羽賀 憲二)

第2表

第2号堅穴住居跡状遺構ピット一覧表

ピット番号	規模	深さ	備考	ピット番号	規模	深さ	備考
SP-1	35×30	10.0		SP-7	25×27	12.0	
2	30×28	27.0	西に向って傾斜する	8	32×31	12.0	
3	28×21			9	31×29	13.0	
4	28×25	8.0		10	16×14	10.0	
5	20×19			11	17×21	10.0	東に向って若干傾斜する
6	30×28	35.0	西に向って傾斜する	12	12×19		

遺物 (第29図8~10, 図版12A, B)

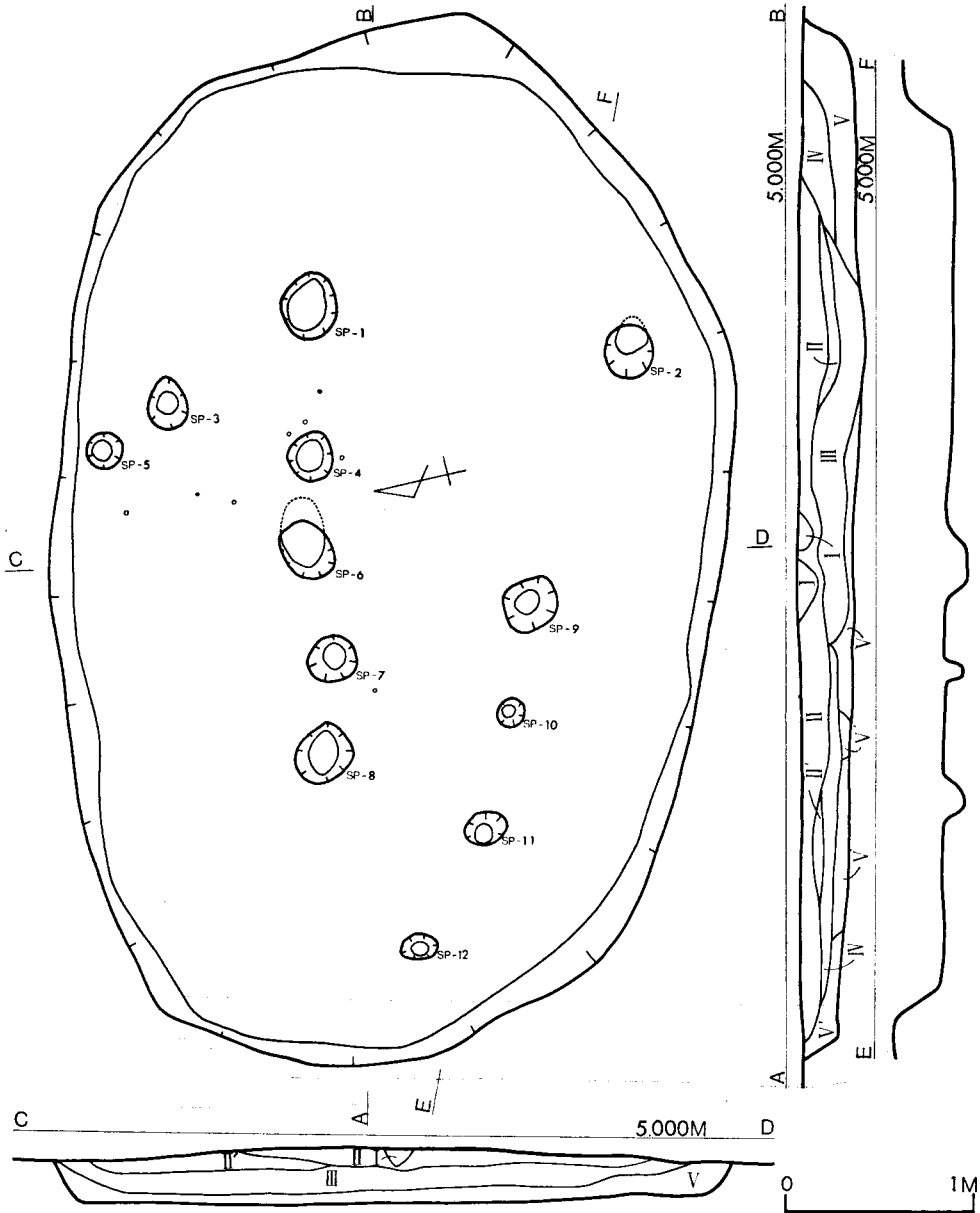
覆土中第Ⅱ層より, 土器片2点, 石片7点が出土したのみである。

8は, 胴部片で, 大粒のLRの縄文が施されている。伊達山式土器であろう。

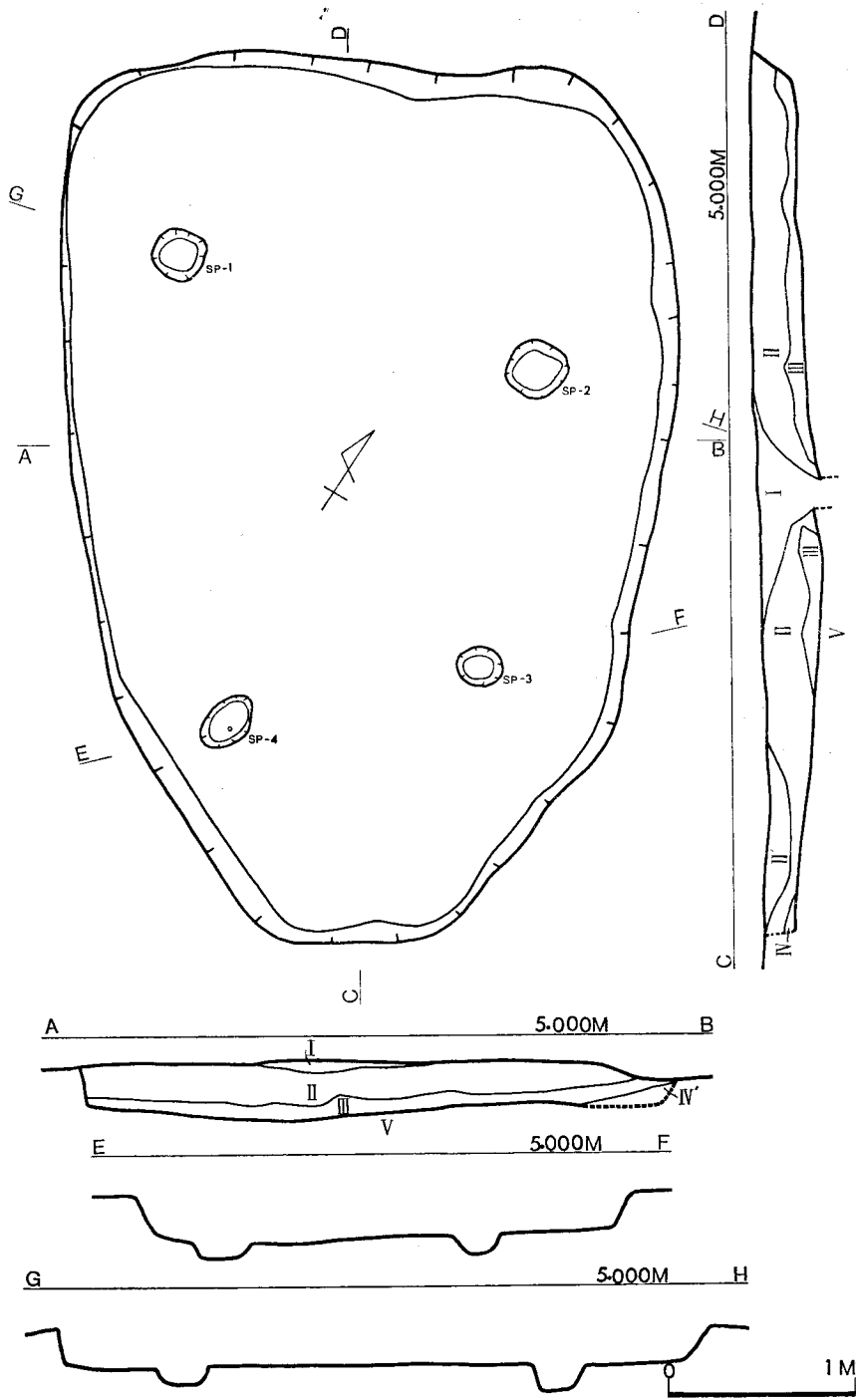
9は, 胴部片で, ボタン形の貼付文があるが, 風化が激しく判然としない。色は共に暗褐色。

10は, 縦長剝片を素材に左図両側と右図左側及びバルブ部分に加工を入れ, 尖頭部を作出している。黒燧石製。

(上野 秀一)



第30図 第2号竪穴住居跡状遺構実測図



第31图 第3号竖穴住居跡状遺構実測図

第3号住居跡状遺構 (第31図, 図版8B)

規模は、長軸472cm、短軸の最大幅326cm、北西壁265cmで、ほぼ不整五角形である。長軸は、略々北西—南東方向である。覆土の状態は、上層より次の如くである。第Ⅰ層、攪乱層で、遺構の中央にある。第Ⅱ、Ⅱ'層、灰黄褐色火山灰層で、砂を含み、Ⅱ'層は灰色が強い。第Ⅲ層、暗褐色砂層。第Ⅳ層、黄褐色砂層で、地山より全体に少し暗い。第Ⅳ'層は灰褐色砂層で、第Ⅴ層は地山で黄褐色砂層である。

壁の立ち上がりは、A-Bセクション図から、南西壁は深さが20cmで、立ち上がりは明瞭で垂直に近く、層が明確に区分される。北東壁は深さがほぼ15cmで立ち上がりは、かなり急であるが、付近の地山は灰褐色砂層で立ち上がりは不明瞭である。C-Dセクション図から、南東壁は深さが約17cmで立ち上がりは垂直に近く、付近の地山は黄褐色砂層で立ち上がりはあまり明瞭でない。北西壁は、深さが22cmで、立ち上がりは45度の傾斜を帯び、ほぼ明瞭である。

柱穴と考えられる小ピットが、4個発見され、SP-1, 3, 4がコーナーに偏っていて、深さは約10cm程で、SP-2がやや深い(第3表)。 (長谷川克浩)

第3表 第3号竪穴住居跡状遺構ピット一覧表

ピット番号	長径×短径 (cm) (cm)	深さ (cm)	ピット番号	長径×短径 (cm) (cm)	深さ (cm)
SP-1	27 × 27	12	SP-3	25 × 21	10.5
2	30 × 00	17.5	4	34 × 22	11.5

遺物 (第29図11)

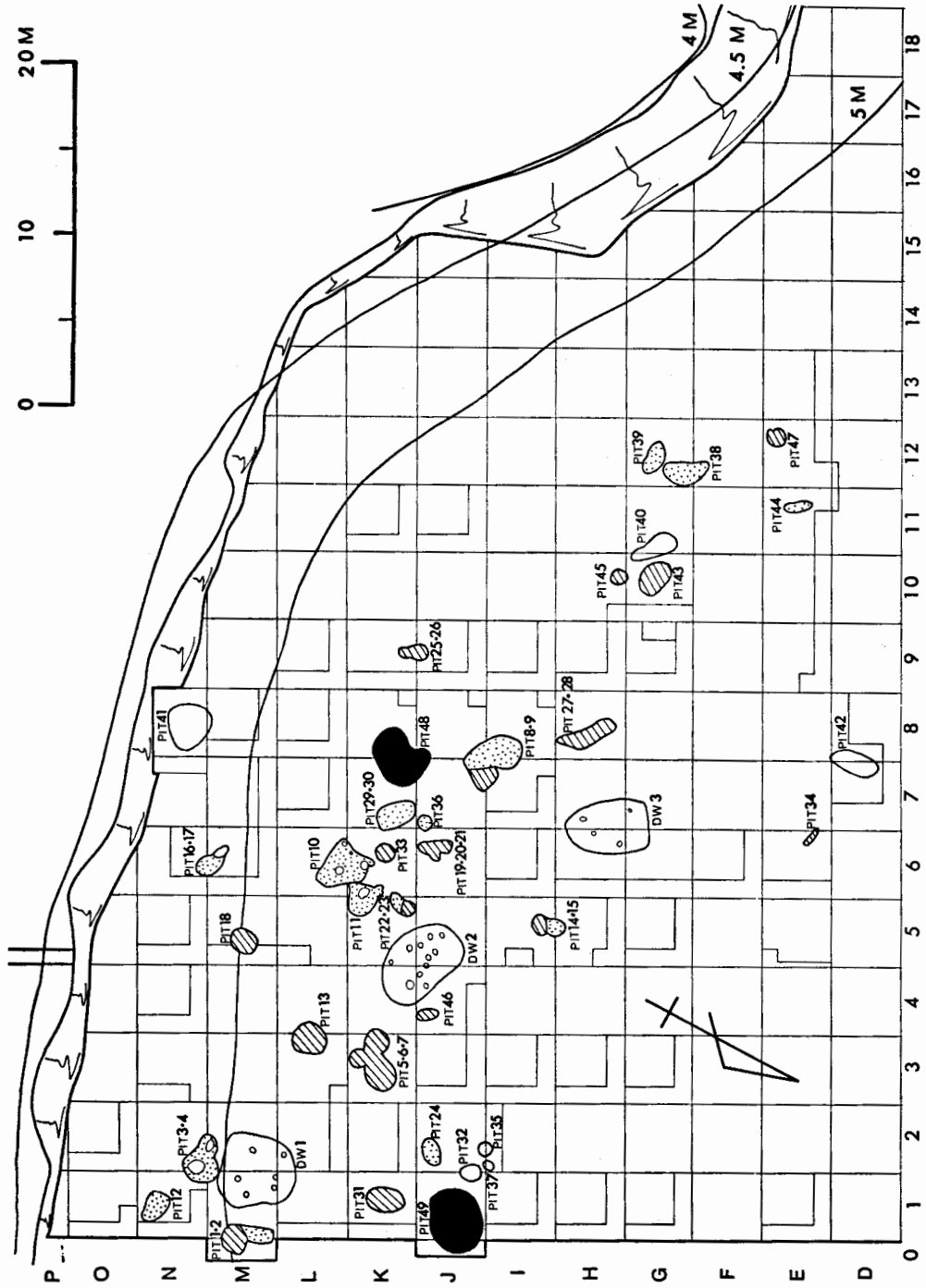
出土遺物は、上層から石器1点、木炭1点、下層から、石片1点が出土したのみである。

11は、剝片の周辺に二次加工を入れたもので、左図右側は欠損している。素材は、はっきりしない。黒曜石製。 (上野 秀一)

第4表 ビット群のタイプと時代の関係一覧表

時代	タイプ	A 型	B 型	C 型	その他
(1) 天神山式			16		
(2) トコロ6		18, 46	10		
(3) 伊達山		7	9, 11, 30		DW 2
(4) 第4類		1	2, 4		DW 1
時期不明		5, 6, 8, 13 14, 19, 20, 21 23, 25, 26, 27 28, 31, 32, 33 34, 35, 37, 43 45, 47	3, 12, 15, 22 24, 29, 36, 38 39, 44	48, 49	17, 40, 41, 42 DW 3

(註) 番号は、ピット番号である。DWとは、竪穴住居跡状遺構をさす。



(凡例 印：A型、印：B型、印：C型、印：不明)

第32図 ヒットのタイプ別分布図

第3節 ま と め

まず、ピット群について、(1)形態、(2)出土遺物の2点を中心に、まとめてみたいと思う。

1 ピットの形態について

49個のピットは、平面形、底面の状態、小ピットとか裾を有するか否かによって、大きく三つに分類可能である(第32図、第7表)。

A 型

平面形は、円形・卵形・楕円形・隅丸方形を呈し、底面は、ほぼ平らか浅い皿状の例で、断面形は、フライパン型である。ただ、幾つか例外もある。ピット内には、小ピットとか裾は認められない。更に、三つに細分される。

- (a)平面形が、ほぼ円形・卵形・隅丸方形・不整多角形を呈し、底面が平らか、浅い皿状の例……ピット1, 5, 6, 7, 8, 13, 19, 20, 21, 23, 32, 33, 35, 37, 43, 45, 47
- (b)平面形が、楕円形ないし不整楕円形を呈し、底面が平らか、浅い皿状の例……ピット14, 25, 27, 28, 31, 34, 46
- (c)平面形が、円形ないし隅丸方形を呈し、底面が、凹状になっている例……ピット18, 26

これらの規模をみると、重複関係にあって、全体形を窺いえないものを除くと、長軸×短軸の大きさは、ピット37の65×57cmを最少とし、最大はピット43の220×170cmであり、(a)~(c)を通じて特にまとまりはない。深さは、最小をピット13の13cmとし、最大はピット18の47cmで、15~40cmの間に集中している。

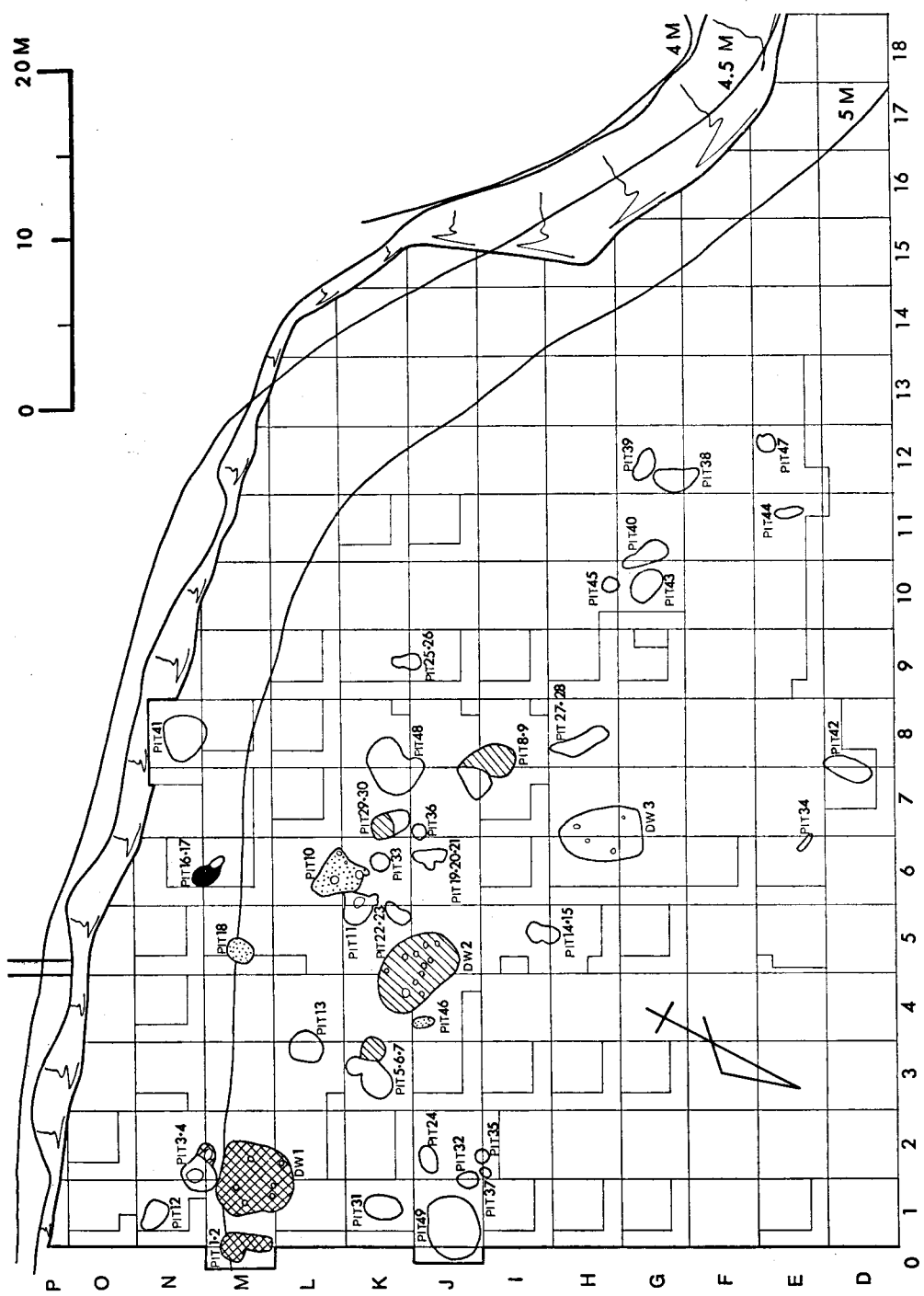
この仲間で、ピットの覆土中に遺物の認められる例は少なく、ピット1, 6, 7, 18で検出されたに過ぎない。

なお、ピット40, 41, 42もこのタイプの例であるが、立ち上がりが明確には確認しえず、不定形であり、ピットと断定するには、多くの疑問を残すので、一応除外した。

B 型

平面形は、楕円形・不整楕円形・卵形を呈し、ピットの底面に、更に小ピットを有するかないしはピット外縁に裾がある例である。五つに細分される。

- (a)平面形が、楕円形・不整楕円形・卵形を呈し、ピットの底面に小ピットがある例。中央にある例として、ピット12, 15, 16, 24があり、一方の壁に偏ってある例として、ピット11, 29, 36, 39をあげる事が出来る。また、ピット44も、この仲間である。なお、ピット10は平面形が隅丸方形を呈し、壁内外と中央に、合せて8個の小ピットがある特異な例である。
- (b)平面形が、楕円形ないし不整楕円形で、底面に小ピットとピット外縁部に裾を有する例……ピット2, 22。
- (c)平面形が、不整楕円形で、二段に亘って掘り込まれ、その中に小ピットがある例……ピット9。



凡例
 ● 印：(1)期
 ⊙ 印：(2)期
 ⊗ 印：(3)期
 ⊕ 印：(4)期
 (各期は第4表参照)

第33図 ピット、竪穴住居跡状遺構の時代別分布図

(d)平面形が、卵形で、二段に亘って掘り込まれた例……ピット3, 4。

(e)平面形が、不整楕円形ないし卵形で、ピット外縁部に裾を有する例……ピット30, 38。

規模は、ピット36の竈口97×80cmを最小とし、最大はピット9の352×224cmである。大略長軸150~220cm位の所に集中し、A型に比べ規模の大きい例が多い事が判る。深さは、最小がピット29の13cm、最大がピット38の94cmで、20~80cm迄幅があるが、全体に深いといえる。

遺物は、殆どのピットで検出されるが、特にピット3と4は多い。遺物のない例は、ピット15, 24, 29, 44の4つである。

C 型

平面形が、C字状ないしは馬蹄形を呈し、層が内部に楔形に流れ込み、途中で切れている例である。ピット48, 49がある。各々の口の開く方向は、北西、南西である。なお、ピット48からは、遺物が3点検出されている。

2 ピット内出土の遺物について

遺物は、すべて覆土から出土している。前述した通り、B型には殆どの例に遺物が認められた(第33図, 第4表)。

まず、土器については、ピット3例の如く、後述する第1類から第4類第2種までの各種の土器を出土するピットもあるが、多くは単独型式の土器を出土している。

(1)天神山式土器を出土した例……ピット16

(2)トコロ第6類を出土した例……ピット10, 18?, 46

(3)伊達山式土器を出土した例……ピット7, 9, 11, 30, (48?)

(4)沈線文のある第4類土器を出土した例……ピット1, 2, 4

なお、ピット10では、一片だけ伊達山式土器があった。

石器は、非常に少ないが、ピット3で石鏃と削器、ピット4と7で砥石、ピット9で石銛、ピット10で片面加工のナイフ状石器と石鏃(未成品)が出土している。なお、ピット1から出土した縦長剝片は過度に焼けていた。

木炭は、ピット1, 2, 3, 4, 6, 10, 16で認められ、特にピット1には多かった。この内、ピット16(第17図の平面図の×印)の底面から採取した、木炭の¹⁴C年代測定の結果、3850±260 B. P. (Gak-5031)という年代を得ている。

骨粉はピット16で2点認められた程度である。

A, B型のピットの長軸の方位の統計をとると下記の如くである。

W—E……………7例

WNW—ESE……4例

NW—SE……………14例

NNW—SSE……6例

N—S……………8例

NE—SW……………7例

これらから判断される事は、北を主軸にとると、西から北東まで長軸の振れがあるが、その中央の北西に最も多く、集中する傾向がある。

さて、これらのピット群の性格であるが、骨粉の出土をみたピット16は、墓壇の可能性もあるが、他例に関しては、特にその性格を決定する根拠に乏しい。

ピット内から、北筒式土器（トコロ第6類?）が出土したと報告された例としては、苫小牧市植苗タプロコ遺跡1号墳（苫小牧市教育委員会他1965）、同市美沢植村遺跡第1号墳（佐藤1971）、旭川市豊岡遺跡（斎藤1968）などがある。共に、円形ないし楕円形で、規模は植村と豊岡の例は、1m強の径を有し、深さは50~90cmである。植村遺跡では、人骨片がみつまっているというので、墓壇である事は確実である。なお、土器は出土していないが、層位的に、トコロ第6類期頃に比定出来る例として、礼文島神崎ウエンナイボ遺跡（松野・佐藤・兼重1970）の例がある。ここからは、成年男子の一個体分の人骨がみつまっている。また、遺構は確認されていないが、人骨がみつかった例として常呂郡朝日トコロ貝塚Bトレンチ出土の人骨（東大文学部編1963）がある。これは、トコロ第6類に伴なうものらしい。

余市式土器に伴なう例としては、山越郡長万部町静狩遺跡A地区、第二層下縁（大場・田川1955）で、成人男性の人骨がみつまっているが、ここでも遺構は確認されていない。以上の中で、遺構が確認されている例は、共に本遺跡のピット群でA型としたタイプに属するものである。B型のタイプは、該時期で管見の範囲では、類例はない。C型としたタイプは、所謂「風倒木」の跡と考えられ、人為的なものではなく、自然現象の所産である。

A型、B型の様な縄文時代中期のピットに関しては、貯蔵穴ないし墓壇と一般的に考えられているが、異説もある。即ち、山内清男（山内1942）は堅穴住居跡に付属した小ピットは、千島アイヌの堅穴の例から推して犬小屋であるとしている。また、最近横浜市霧ヶ丘遺跡（霧ヶ丘遺跡調査団1973）で数多くみつかったピットは、底面には深い小ピットを数多く有し、「落し穴」であろうと推定されている。それ以外に、粘土を採集した坑、住居という意見がある。この内、粘土採集の坑という意見は、砂丘地であるため可能性がない。住居という考えは、後述するように堅穴住居跡状遺構が、仮小屋的存在であると想定出来るなら、否定的要素である。犬小屋という意見も、恒久的な住居がなく、住居跡状遺構の数に比べ多すぎるので、考え難い。「落し穴」とするには、ピット群の分布が、砂丘の内陸側のみに片寄っており、霧ヶ丘遺跡の如く台地全面に亘ってあるわけではなく、また底面に数多くの狭い小孔がない事、そして一般には砂丘は動物の交通路として使われていないので、これも可能性が薄い。結局、貯蔵穴か墓壇という事になる。ただ、墓壇とした場合、前述した通り、本遺跡のピットからは、確実に副葬品と思われるものが出土した例はなく、また、今迄石狩海岸の砂丘で、墳墓遺跡とされている石狩郡石狩町花畔紅葉山第33号遺跡（藤本・木村1968）、同町上花遺跡（札幌西高郷土研究部1968）、同町生振（藤本1968）の諸遺跡は、時代的にはすべて、縄文後期末から続縄文期初頭にかけてである。一方、貯蔵穴とした場合、何を貯蔵したのであろうか。砂丘地という特殊性と恒久的な居住地でないとする、植物性のものは考え難い。海

産物という事も考えられるが、砂丘地というカルシウム分の保存されやすい環境にありながら、その片鱗すらもないのはどういう事であろうか。種々の疑問を残すが、本遺跡のピット群は一応墓墳ないしは貯蔵穴の可能性があると指摘に留めておこう。この問題は、砂丘遺跡の性格の究明という問題とあわせて、今後明らかにされねばならない。

住居跡状の遺構は3軒みつまっている。第1号は、不整四角形で、柱穴は6本である。第2号は楕円形で、柱穴は12本みつまっている。第3号は不整五角形で、4本柱穴がある。各例共、壁、床面は軟弱で特に第1号と第3号は、壁の立ち上りを明確には、確認しえない部分もあった。また、焼土、炉跡なども検出されなかった。

遺物も、覆土から若干みつまっているに過ぎない。第1号では、後述する第4類第1種の土器、第2号では、伊達山式土器が出土した。また、第2号からは、半両面加工のナイフ状石器が1点出土している。

以上の状況から、この3例を積極的に、堅穴住居跡と断定する事は難しい。同様な例として、札幌市白石区白石神社遺跡第1号堅穴住居跡状遺構（加藤・上野・羽賀1973）をあげる事が出来る。これは、不整楕円形を呈し、柱穴と焼土は認められず、床面直上の層から、トコロ第6類の完形土器が一個体みつかっただけである。また、札幌郡広島町中の沢B遺跡（峰山・高橋・倉谷1973）でみつかったピット群の内、長軸4～5mを数えるピット1, 4, 5, 6, 9, 10の各ピットも不整五角形、不整円形、楕円形を呈し、本遺跡例に極めて類似している。この内、柱穴のあったのはピット4のみで、炭化物ないし焼土があったのは、ピット4と5だけである。これらのピットの内年代の判明しているのは、ピット9で、床面から2個体分のトコロ第6類土器がみつまっている。

これらのピットないし堅穴住居跡状遺構は、トコロ第6類期頃に多く、その性格としては、恒久的な住居ではなく、キャンプサイトの仮小屋の存在とも考えられるが明確ではない。類例をまっして今後明らかにされねばならない。

遺構群の分布状態は、ピット群も、堅穴住居跡状遺構群も、砂丘の内陸側にあり、4.5mのコンタラインで示される、内陸側の外縁に沿って存在している。

ピット群は、分布の上でタイプによって、特にまとまりは認められない。

覆土の遺物からの、大まかな年代推定からは、遺跡の東部にあるピット1, 2, 3, 4, 第1号堅穴住居跡状遺構は、すべて後述する第4類土器が出土しており、遺跡の南側のピット10, 18, 46はトコロ第6類、同様に南側のピット7, 9, 30, 第2号堅穴住居跡状遺構においては、伊達山式土器を出土しており、資料的に問題があるにしても、各時代毎にあるまとまりがある可能性を指摘出来る。

（上野 秀一）

第5章 発掘区出土遺物

第1節 土 器 (第34, 35図, 図版13A・B)

以下において、発掘区出土の土器を6類に分けて説明する。

第1類 (第34図1)

平縁で、口唇部直下に肥厚帯があり、この上に幅4mm程の貼付文が斜めにある例である。貼付文上は、風化していて不明であるが、無文であったと思われる。地文は、RLの縄文で肥厚帯上にもある。肥厚帯直下は、無文部である。肥厚帯は、かなり高いが特に折返しとか貼付は行っていない。胎土には、砂粒を多量に含み、風化している。繊維の混入はない。色調は、暗茶色である。

同様の例が、第3号ピットから2点出土している(第8図1, 2)。なお、隣接したN309遺跡(第39~44図)からは、多量に表採されている。

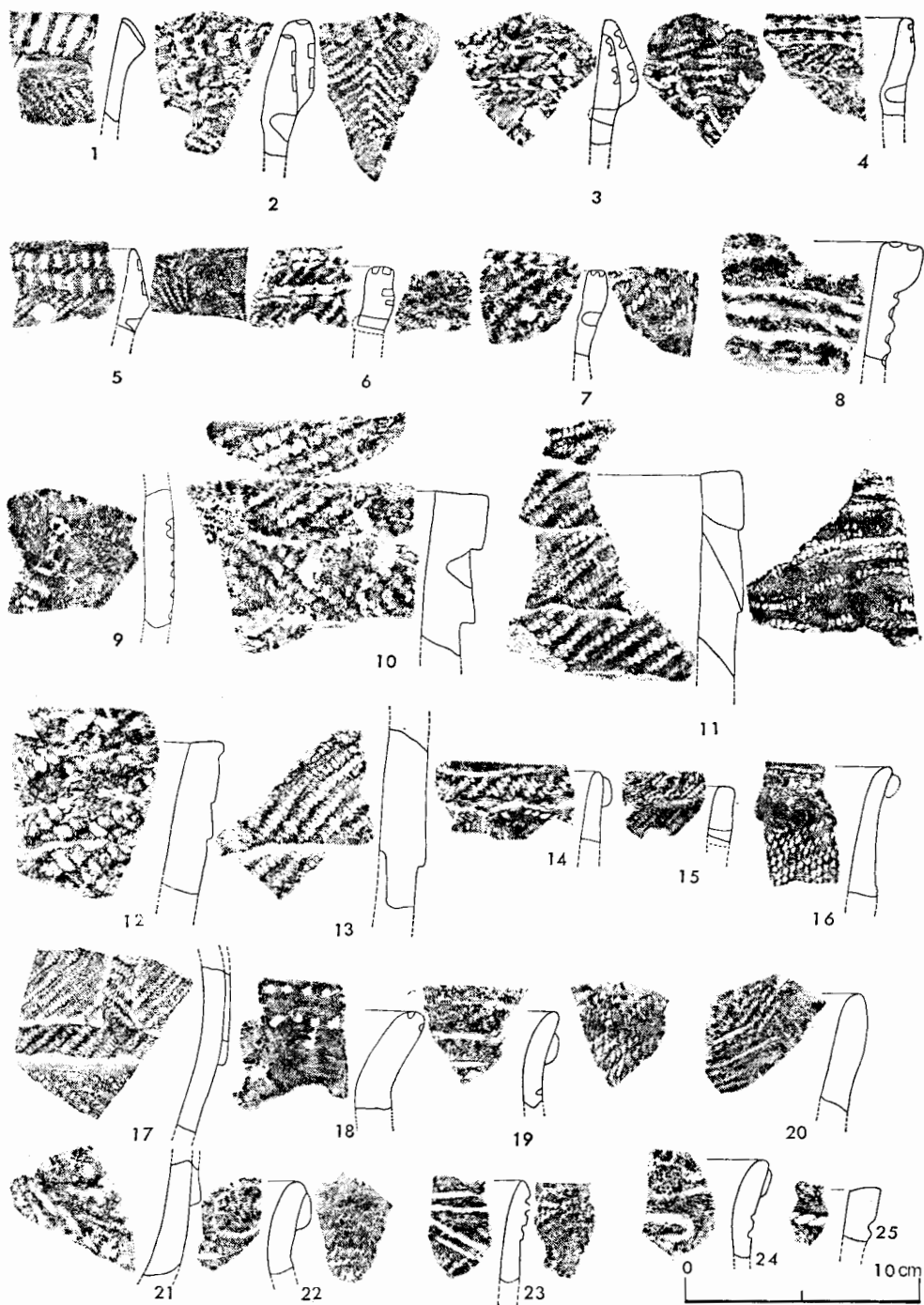
第2類 (第34図2~9)

肥厚帯を有し、その直下に直径8~9mm程の円形刺突文が施されているグループである。肥厚帯上および口唇部に平らな筥ないし半截竹管による連続刺突文がある例が多いのも一つの特徴である。胴部にある例も認められる。

2と3は、肥厚帯が発達した例で、2は小突起を有し、肥厚帯上には幅1cm程の幅広い平筥による連続刺突文が二段ある。口唇部上にも一列認められる。内面にも縄文があり、それは第一種結束のある羽状縄文を縦に施したものである。3も、小突起があり、半截竹管による連続刺突文が肥厚帯上に二段ある。内面にも縄文があり、それはアヤクリ文のあるLR縄文である。4は、肥厚帯は、顕著ではないが、この上に二段の平筥による連続刺突文がある。地文は、LR縄文で、口唇部にもある。内面にはない。5も、4と類似するが、肥厚帯の幅が広い。内面にも、LR縄文が縦に施されている。6は、肥厚帯が殆ど認められず、口唇部上とその直下に、二叉の、先の平坦な工具による連続刺突文がある。内外面にLR縄文がある。内面は縦に回転している。7は、口唇部直下を内湾させる事により、肥厚帯的なものを現わしている。半截竹管による連続刺突文が、口唇部上にある。内外面にある地文は、撚糸文であろうか。9は、口唇部を欠くが、羽状縄文地に、竹管状工具による円形刺突文と平筥による連続刺突文がある。なお、上述の土器の肥厚帯には、貼付とか折返しは認められない。

8は、特異な例である。貼付によって肥厚帯を作り、口唇部は部厚い。この上と、肥厚帯下に、丸棒状工具を引きずって付けた「突引文」とでも称すべき文様が、横に4本観察される。

色調は、8が暗赤褐色、その他は灰褐色である。胎土には、8には多量の砂粒と微量の繊維を含み、ほかは、若干の小石と砂粒を含むが、繊維は認められない。



第 34 图 尧棚区出土土器拓影 (1)

第3類 (第34図10~19, 21, 22, 24, 25)

この仲間は、更に3種類に分けられる。

a 第1種 (第34図10~13)

器厚は、厚く、口唇部断面が四角形で、口唇部直下に肥厚帯があり、その下にも更に幅の広い貼付帯を数段施している例である。これに、棒状工具で、最初器面に垂直に突き、その後、器面に沿って下に引いた刺突文が横に巡る。

10は、貼付による肥厚帯とその下に幅広の貼付帯が一段観察される。肥厚帯下には、上述の刺突文が一行巡る。地文は、羽状縄文で、口唇部上にもあるが、内面にはない。11は、肥厚帯とその下に二段の幅広の貼付帯が観察される。肥厚帯下には、上述の刺突文が一行巡る。地文は、LR縄文で、口唇部上、内面にもあるが、内面は縄文施文後、更に整形している。12は、肥厚帯とその下に二段の、肥厚帯と同じ幅の貼付帯がある。破片内では、刺突文はない。地文は、粒の大きいLR縄文で、口唇部上にもある。内面にはない。13は、口唇部を欠くが、幅広の貼付帯が一段観察される。内外面の地文は、11と同様である。共に、胎土には多量の小石と砂粒を含むが、繊維の混入はない。色調は、すべて灰褐色である。

b 第2種 (第34図14~17)

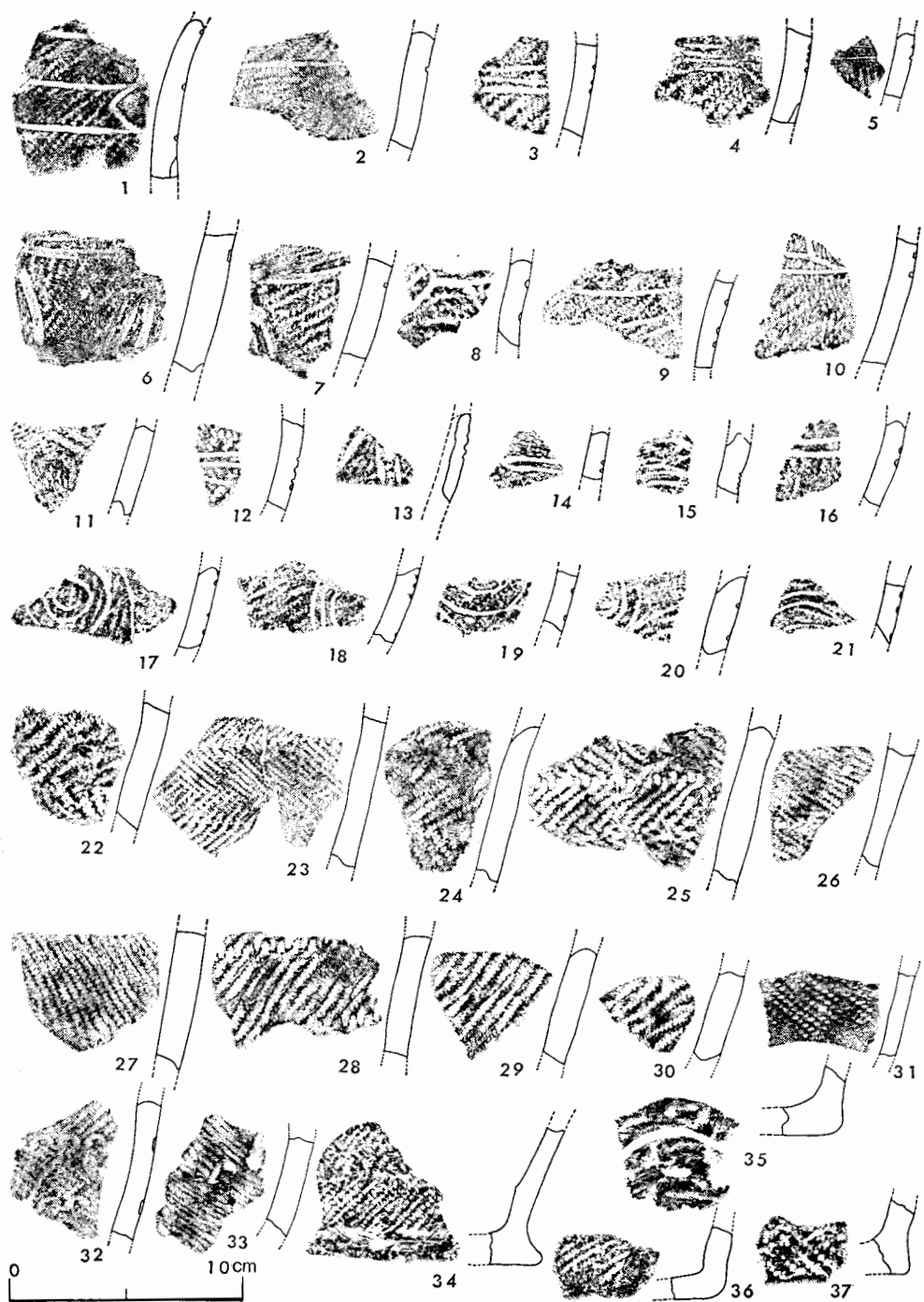
口唇部直下と胴部に、幅1cm程の貼付文を施した例である。14と16は、同一破片で接合する。口唇部直下に、貼付文が横環する。16例では、剥脱している。地文は、LR縄文である。15は、特に貼付文がないが、口唇部断面形が、隅丸四角形で、肥厚帯を思わせる。この下に円形刺突文がある。17は、胴部破片で、羽状縄文地に、貼付文が縦と横に施されている。横の貼付文下は磨消されている。胎土には、多くの小石、砂粒を含むが、繊維は認められない。色調は、灰色味がかった暗茶色である。

c 第3種 (第34図18, 19, 21, 22, 24, 25)

貼付文などの状況は、第2種と同様であるが、これに沈線文が施される例である。

19は、口唇部直下に幅1.2cm程の貼付文を横環させ、その下に横走する沈線文が窺える。地文は、燃りのゆるい縄文で外面は判然としないが、貼付文上と内面は、LR縄文である。口唇部上にもある。21は、口唇部を欠損するが、肥厚帯があり、この下に幅広の沈線文が斜めに3本認められる。地文は、RL縄文で横に走っている。22は、口唇部直下に幅1.7cm程の貼付文が横環し、この下に幅広の沈線文がある。地文は、燃りのゆるいLR縄文で、器内外と口唇部上に施される。24も、22と同様である。2本の横走する沈線文が、弧状に連結されている。これらの胎土には、多くの砂粒を含み、色調は暗茶褐色である。

18と25は、特異な例である。18は、頸部から、大きく外反し、地文はなく、滑らかに整形している。口唇部上と口唇部直下に、径3mm程の丸棒状工具による刺突文が、横に連続してある。色は、暗茶褐色で若干の砂粒を含む。25は、口唇部の小片で、口唇部断面は四角形であり、ここに貼付による肥厚帯があったと思われる。肥厚帯上には、燃糸圧痕文が横走する。色は灰色で若干の砂



第35图 発掘区出土土器拓影(2)

粒を含む。

第4類 (第34図20, 23, 第35図1~21)

この仲間は、貼付文が消失し沈線文のあるグループであるが、沈線文の施文工具とか幅と深さの違いから、大略三つに細分出来る。

a 第1種 (第34図20, 第35図6, 7)

幅が4mm程の広く、浅い沈線文が施されたものである。20例は、口縁部破片であり、波状縁で小突起を有する。突起から左右斜めに沈線文が走る。地文は、LR縄文で内面にもあるらしいが、風化していて判然としない。6, 7は、胴部片で、共に地文はLR縄文、この上に横と斜めに沈線文がある。胎土には、多くの砂粒を含み、色調は20と7が暗茶褐色、6が褐色である。同様の例が、本遺跡の第3号ピット(第8図10)、第1号堅穴住居跡状遺構(第29図1)で出土している。

b 第2種 (第34図23, 第35図1, 3, 8, 11, 13, 14, 16)

幅が、2~3mm程で、やや深い沈線文が施されたものである。第34図23は、口縁部破片で、2本単位の沈線文が、横と斜めに走る。この沈線文は、かなり深い。地文はLR縄文で、内面にもある。第35図3は、LRの縄文地に、3本の横走沈線文がある。8は、2本単位の沈線文が斜、横に施され、その間は弧状に結ばれている。縄文を施文後、整形している。11, 13, 16も、直線的な沈線文が、斜、横に走る。14は、二本の沈線文が弧状に連結している。

第35図1は、LRの縄文地に、横走る沈線文があり、この間をくの字状の沈線文で連結している。色調は、すべて暗茶褐色である。かなりの砂粒を含む。同様な例が、第1号ピット(第11図1)、第3号ピット(第9図1~4)などに認められる。

c 第3種 (第35図2, 4, 5, 9, 10, 12, 15, 17~21)

幅が、2mm程で比較的浅い沈線文を3本ないし数本単位で、弧状、円弧状に施した例である。一般的に、縄文を施文後、整形している。2と9は、横走ないしやや斜めの沈線文が観察される。地文は、LR縄文で整形している。4, 10と12は、LRの縄文地に、横走る沈線文を数本施している。5は、無節の縄文地に、極めて細く浅い横走沈線がある。15, 17~21は、数本の沈線文を弧状ないし円弧状に施したものである。色は2, 5, 9, 10, 15~21が暗茶色、4と12は褐色である。砂粒をかなり含む。

第5類 (第35図22~33)

胴部片である。

26~31迄は、単節斜行縄文である。RLの縄文例が26, 27で、あとはLRである。ただ、29と30は、節が狭長で「3 ϕ 」である可能性もある。31は、原体を縦にころがしている。33は、無節の斜行縄文である。

22~25, 32は、羽状縄文で23と25には、第一種結束、32にアヤクリ文(第二種結束)がある。

色調は、灰褐色を呈するもの(24~26, 28~32)、黒褐色を呈するもの(23, 27, 33)がある。

これらの胴部は、第2類ないし第3類2、第3種に伴なうものであろう。なお、22は焼成がよく、褐色を呈し、第1類に属するかもしれない。

第6類 (第35図34~37)

底部片である。すべて平底である。

34は、底部に張り出しがあり、地文としてLR縄文が施されている。35は、張り出しはなく、破片部分は無文である。36は地文としてLR縄文があり、張り出しはない。風化が激しい。37は、焼成はよく、軽い張り出しがあって、地文は羽状縄文である。内面は滑らかに整形している。色は、34、35が灰色、36が暗灰褐色、37が赤褐色である。

35と37は、第1類に伴なうと思われ、34は第2類に伴なうものであろう。36は、第3類に属するものであろうか。

さて、今迄述べてきた発掘区土出土の土器群について、若干考察を加えてみたいと思う。

まず、第1類として分類した資料は、1点しか出土していないが、円筒上層式の系統を引く土器である。肥厚帯を有し、その上に細い貼付文がある。そして破片内の観察では胴部には、地文以外の文様は稀薄である。村越 潔(村越1974)は、最近東北地方北部の円筒上層式土器の分類を行なっている。氏の分類に従えば、本類の土器は「円筒上層d式土器」に、文様要素の上で最も近い。道内での類例は、吉崎昌一(吉崎1965)によって「サイベ沢Ⅵ式」とされた、浜益郡浜益町川下地区出土の報告第6図、第7図1(大場・石川1961)、室蘭市ボンナイ遺跡第二地点第3層出土の報告第62図下段右の例(大場ほか1962)、恵庭市西島松南D遺跡第3地点出土の報告第57図(大場・石川1966)、茅部郡南茅部町精進川遺跡出土の貼付文のある例(森田1972)、浦河郡浦河町浜获伏遺跡(黒崎・橋本1965)などを、ざっと上げる事が出来る。

この口唇部に肥厚帯を有しこの上に貼付文が施される例は、種々あり、前述した村越編年の円筒上層c、d₁、d₂にわたって認められ、貼付文のモチーフとか、太さ、そして貼付上の文様の違いによって幾つかに細分されると思われる。なお、高橋正勝(高橋1972a、b)も、この時期の問題に触れているが、具体的な資料を一切明示していないので、筆者には理解出来ない。

第2類とした資料は、常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚(東大学部編1963)で、第6類として分類された資料である。釧路市東釧路貝塚の第Ⅵ群土器(河野・沢ほか1962)も同様である。河野広道・沢四郎の編年でいう「北筒Ⅱ式」に相当し(河野・沢1962)、桑原護の編年の北筒式土器の「第三群土器」(桑原1966)に相当しよう。

なお、第32図8は、特異な例で、類例として、浜益郡浜益町柏本B(砂崎)遺跡出土の報告第33図(大場・石川1961)、礼文島神崎ウエンナイボ遺跡第3類土器(松野・佐藤・兼重1970)などの資料がある。前者に関しては本文の説明では「口頸部には竹管様器具でつくった連続した押文が四条平行に施されている。その下部には連続した突瘤文がみられる」とある。この例は、円形刺突

文の存在から、トコロ第6類と近接した位置を占めるであろう。これ以外としては、昨年札幌市教育委員会で発掘調査した、札幌市白石区下野幌S 238遺跡で、好例が出土している。本遺跡例と極めてよく類似し、口唇部は肥厚する。ただ、円形刺突文は観察されず、共に検出された資料は「天神山式」(高橋 1972 a, b)と仮称されるグループの中で新しく位置付けられる資料である。即ち札幌市白石区白石神社遺跡の第1号竪穴住居跡出土土器(加藤・上野・羽賀1973)と類似している。これらの特異な資料は、トコロ第6類位の時期と併行関係にあるだろうと考えられる。なお、近い編年の位置を占める例とし、恵庭市柏木川遺跡第4号住居跡出土の土器(高橋編 1971)も上げられよう。

第3類は、3種に細分されたが、これらは所謂余市式土器に属するものである。この内第1種は吉崎昌一(吉崎 1965)により「伊達山式」と仮称されたものである。また、第2種の中でも、円形刺突文を有する第32図15例も、伊達山式土器として分類可能である。好例が、石狩郡当別町伊達山遺跡第1地点(岩崎・三室・室田 1970)と余市郡余市町大谷地貝塚の第1貝層、第1砂層(五十嵐 1934)などにある。

岩崎隆人(岩崎・三室・室田 1970)は、伊達山式土器を「1:幅広の貼付帯、円形刺突文……, 2:幅広と幅のせまい貼付帯が組合わさる、円形刺突文、磨消帯……」の二つに細分している。この細分を、大谷地貝塚に当てはめてみれば、2は第1貝層、1は第1砂層に相当すると私考する。即ち、層位的には2のタイプの方が古い事になる。そして、本遺跡で第1種としたものは、すべて1の例で、第2種のは、2の例と結論出来る。

さて、第2種の内第32図14と16(同一破片)は、円形刺突文を欠くらしい。そうであるなら、虻田郡虻田町入江貝塚のⅢ類Ⅰ型(名取・峰山 1958)、大谷地貝塚の第2貝層に類例を求められる資料である。第3種としたものは、円形刺突文を欠き、貼付帯と沈線文を有するグループで、類似はあまりないが、しいてあげるとすれば、札幌市西区手稲町砂山出土の報告第3図の7(石川 1967)などを上げられよう。即ち「手稲砂山」式と仮称されるものの内のB類に対比されよう。ただ、第32図25は、捺糸圧痕文があり、細片で不明であるが、円形刺突文がなく肥厚帯を有するなら、山越郡長万部町静狩遺跡第2層(大場・田川 1955)、入江貝塚Ⅲ類Ⅱ型aなどに類例が求められ、第1, 2種よりは新しく位置付けられるものであろう。

なお、第3類第3種として分類した第32図18例は、特異なもので、類例は、石狩町生振O25遺跡(第48図20, 21)の例などがあるが、この位の時期に位置付けうる可能性が強い。

第4類は、沈線文のみのグループで、第1種は、入江貝塚Ⅲ類Ⅱ型cなどに対比されるであろう。第2種は、入江貝塚の「入江B類」、「手稲砂山式」のC類の一部などに対比されよう。第3種は、沈線文が円弧を描く例で、虻田郡狩太町ニセコ(吉崎 1965)、上磯郡知内村涌元遺跡(千代ほか 1972)、有珠郡伊達町若生貝塚(名取・峰山 1957)、室蘭市鷲別遺跡(大場ほか 1962)、島牧郡島牧町栄磯岩陰のⅡ群1類の一部(峰山・金子ほか 1973)などを類例として上げる事が出来る。これは「涌元式」(吉崎 1965)と仮称されている。ただ、この第4類は、局視的には、すべて近接して、縄文中期末から後期初頭に位置するものであろう。

第1, 2類は別として、第3類から第4類への流れは、余市式土器の一連のつながりの中で理解

出来る。

なお、第16号ピット出土の第19図14は、発掘区では認められなかった資料で、札幌市豊平区平岸天神山遺跡（菊地1967）、名寄市智東遺跡A地点（島山1960、山崎・長谷川1968）、同B地点（山崎1967）、上川郡鷹栖村嵐山遺跡のC類（嵐山遺跡群調査会編1968）などに認められ、高橋正勝（高橋1972 a, b）により、「天神山式」、「智東B式」土器と仮称されるものである。

即ち、本遺跡では、円筒上層式土器の末期の資料が若干とトコロ第6類、伊達山式、入江Ⅲ類、そして後期初頭の涌元式土器の時期迄の資料がある事になる。

なお、ここでは、編年的問題には、深く立ち入らず、類例を上げるにとどめておく。この問題に関しては、機を改めて論ずる事があるろう。（上野 秀一）

第2節 石 器（第36、37図、図版14A・B）

本遺跡からは、約30点の石器が出土している。器種は、石鏃、石銛、ナイフ状石器、搔器、削器、両面体石器、石斧、砥石、礫器などである。発掘区出土の土器は、トコロ第6類、伊達山式土器が主体を占めるので、これらに伴うものであろう。石器の出土量が僅少のため、器種分類は、白石神社遺跡の発掘区出土の石器の分類に準拠する。従って、以下で、類として上げているのは、白石神社遺跡の報告で示したそれである（加藤・上野・羽賀1973）。

1 石 鏃（第36図1～4）

1と3は、粗雑な両面加工の石鏃で、不明瞭な逆刺が一方にのみある。3は、基部を一部欠損するが、断口部のパテナは他と同様である。2は、入念な両面加工の有茎鏃で、逆刺は明瞭ではない。先端と基部を欠損する。4は、大きい有茎鏃で、入念な両面加工をしてある。逆刺は発達していない。

1～3は、第1-1類a、4は第1-1類bに相当しよう。

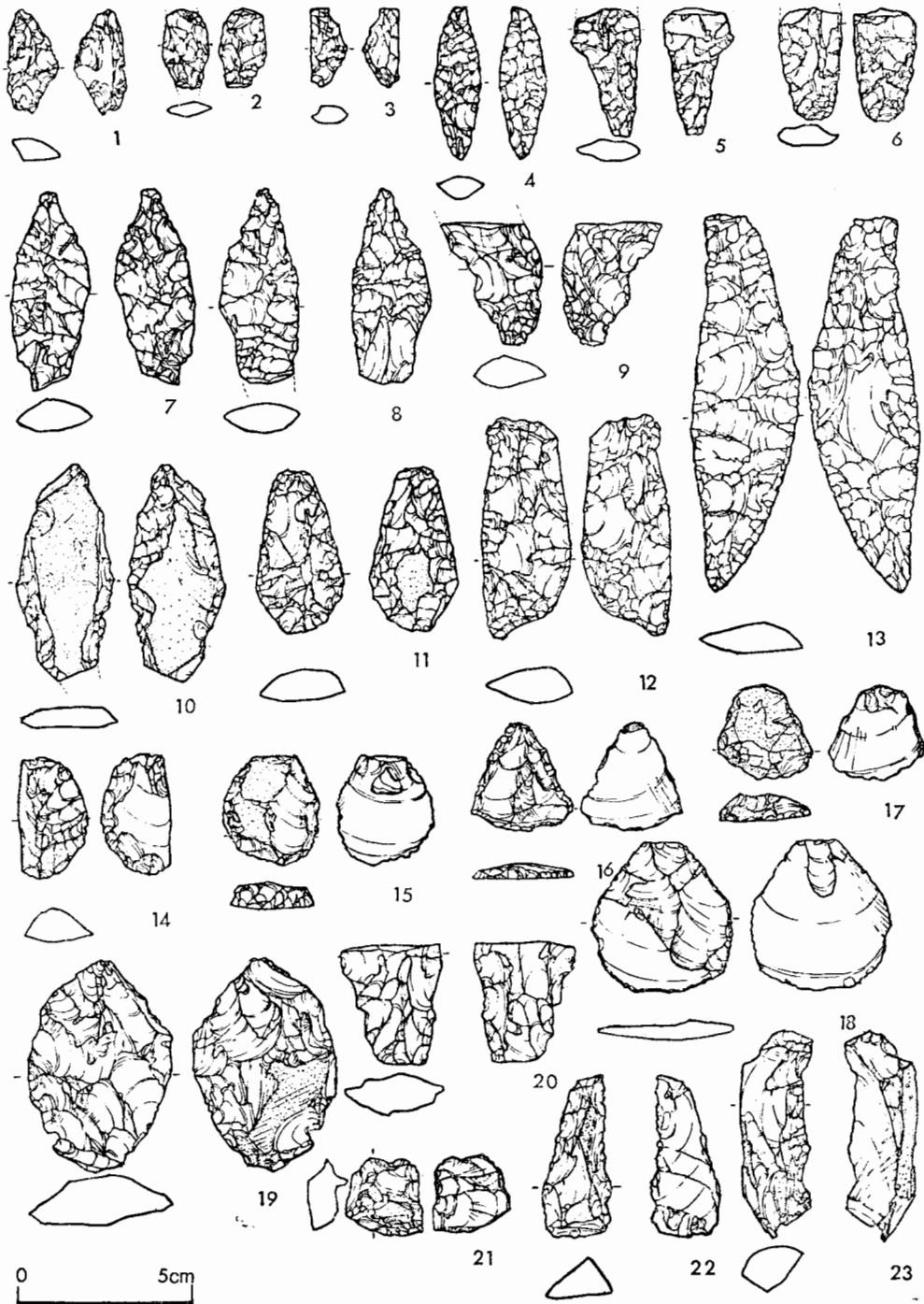
2 石 銛（第36図5～10）

5は、先端部が欠損するが、両面加工で、未発達逆刺が左図左にある。7、8は両面加工で、逆刺はなく、最大幅が前者は上部に後者は中央にある。茎部は太い。共に基部先端を欠損するが、7には、欠損後再度細かい加工を入れている。6、9は、茎部の破片である。7、8に似たタイプの石器であったと思われる。ただ、6は加工が入念で別な器種の柄部破片かもしれない。10は、黒耀石の薄い板状の素材の両側縁に、二次加工を施したものである。両側縁の稜はジクザク状である。恐らく、7、8に似た石器の未成品であろう。

3 ナイフ状石器（第36図11～14）

刃部縁が、直線的になっているものをすべて入れた。11は、両面加工である。右図中央に、一部

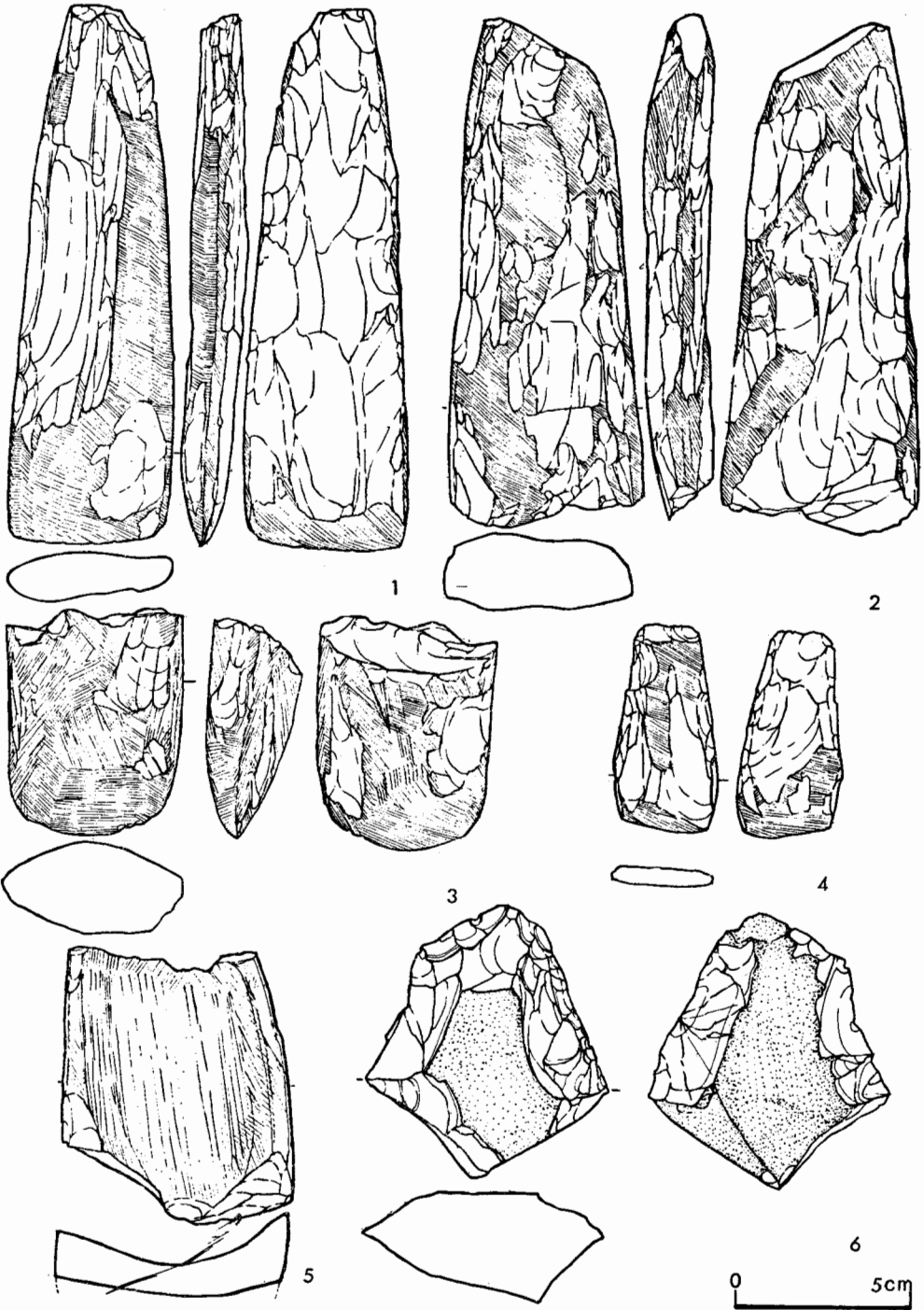
原石面を残す。12, 13は頁岩製で、12には不明瞭であるが、つまみを作出しようという意図が窺える。先端部は欠損する。13は、一方に肩を有し、刃部と柄部は明瞭に区分される。刃部はconvexし、尖っている。14は、左図には、幅広く原石面を残すが、右図右側、両側面に加工を入れ刃部を



第36図 発掘区出土石器実測図(1)

作っている。

13は、第5-1類に相当しよう。



第37図 発掘区出土石器実測図(2)

4 搔 器 (第 36 図 15~18, 21)

矩形、幅広の素材を用いた拇指状ないし円形搔器である。15は、打面を除いて、全周に加工があり、特に打面の反対側の一端は、刃部が高い。16も、15と同様であるが全体形が三角形を呈する。17も、同様であるが、左図面には、幅広く原石面を残す。刃部作出の加工は、あまり顕著ではない。

18は、薄手の剥片を素材にして、打面部分を除いた全周に浅い二次加工がある。用途面では、前述のものとは異なるかもしれない。21は、素材ははっきりしないが、一端に背の高い刃部を作っている。全例、黒耀石である。

5 両面体石器 (第 36 図 19, 20)

19は、扁平石核の残核の可能性もあるが両面共粗い剥離が入っている。尖頭部を作出しようという意図は窺えない。20は、粗い両面加工が入っているが、先端と基部を欠損するので、全体形は判らないが、石槍の破片かもしれない。

6 削 器 (第 36 図 22, 23)

22, 23共に、右図は *negative bulb* で縦長の横剥ぎ剥片を素材にしている。左図左側に比較的背の高い加工を入れ、刃部としている。反対側にも、若干加工がある。

7 石 斧 (第 37 図 1~4) (図 版)

1は、局部磨製の石斧である。右図面は平坦であるが、左図面はかなりふくらみがある。刃部は直線的である。側辺は薄い、面取りしている。2は、刃部を欠損するが、側辺の面取りはなく、断面図は楕円形である。局部磨製。3は、刃部破片である。ほぼ、全面にわたって研磨されている。刃部は、カーブ (*convex*) している。4は、小さな石斧で、局部磨製である。刃部は、直線的で、薄い板状のものを素材にしている。

8 砥 石 (第 37 図 5)

5は、裏面が欠損しているが、図示した面は、*concave* な砥石面である。使用方向は溝に沿った方向である。側辺も、面取りされ研磨している。石質は、砂岩である。

9 礫 器 (第 37 図 6)

頁岩製で、左図面の全周と、右図面側辺に粗い加工を入れている。他は原石面である。左図面右側辺が刃部と思われ、加工は入念である。その反対側の面にも、大きな剥離を入れ、刃部を鋭利にしている。

(上野 秀一)

第6章 石狩海岸の三つの砂丘列の 形成年代について

紅葉山砂丘と花畔砂堤列の形成時期の問題について簡単に触れてみたいと思う。

石狩海岸には、地形的に三つの砂丘列がある事は、第2章で詳述した。この砂丘上の遺跡の研究史は、文献上では、昭和8年犀川会編の『北海道原始文化聚英』において、石狩郡石狩町花畔出土の石器（石のみ、垂玉）の報告があったのが最初かもしれない。この資料に関しては、最近大塚和義が詳しく報告している（大塚1966）。その後、かなりの空白をおいて、昭和29年大場利夫・石川徹らによる手稲遺跡の発掘調査及び周辺の遺跡調査が行なわれている。この報告は、昭和31年に刊行された（大場・石川1956）。その後、昭和38年になって北海道教育大学札幌分校考古学研究室の、この方面を含めた札幌市付近の遺跡の分布調査の結果が発表されている（岩崎・宇田川・河野・西野1963）。また、昭和43年には、札幌西高郷土研究部のマッピング調査の一部が発表された（石本・菅原1968）。また、札幌光星高校もこの方面の分布調査を行なっている（佐藤1964）。この間、この紅葉山一帯が、内外緑地株式会社の手で、宅地造成に入る事になり、昭和42年9月、昭和43年7～8月にかけての2度、紅葉山第33号、第25号A、B遺跡の発掘調査が行なわれ、それぞれ概報が出されている（倉谷1968、藤本・木村1968）。また、石附喜三男を担当者とし、札幌西高郷土研究部の手で調査された上花遺跡の報告も、昭和43年に出ている（札幌西高郷土研究部1968）。また、藤本英夫は、石狩町生振で、開墾の際出土した石棒について報告した（藤本1968）。

昭和35～37年にかけて、文化財保護委員会では、全国的に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を実施した。この北海道編は、昭和43年に発表されているが、この段階では、石狩海岸の三つの砂丘上には、22カ所の遺跡しかない事になっている。昭和47年に至って、急激な開発と埋蔵文化財の破壊を事前に防止するために、北海道教育委員会は、石狩町を手始めに分布調査を開始した。この結果、本砂丘関係では47カ所の遺跡が確認されている。また、札幌市教育委員会の、札幌市西区手稲町前田方面での分布調査でも、8カ所の遺跡がみつかり、都合55カ所の遺跡が所在する事となった。また、昭和48年に発表された『石狩町の先史時代』（石狩町）では、30地点がプロットされている（河野本道ほか1973）。重複しているのを除いて、結局、本砂丘には64カ所の遺跡を数える事が出来るようである。

これらの遺跡の内、縄文時代中期の遺跡を中心に、その概略を順を追ってみたいと思う。なお、石狩町の遺跡番号は、昭和47年に行なった分布調査の台帳の地図番号と一致している。すべて仮称である。なお、掲載した図版の説明は、ここでは編年の問題が本旨でないので、特に説明しない。編年上の諸問題は機を改めて論ずる事がある。

(1) 砂山地区（札幌市西区手稲町）

1. N 295 遺跡（手稲前田 365, 竹内専一）：紅葉山砂丘の最西端、5 m コンタラインで区画さ

れる所より、遺物の出土をみている。軽川の左岸に当る。手稲前田の前田忠氏の資料では、少し幅広の沈線文、ボタン状貼付文、縄文々々を有し、縄文中期末の「手稲砂山式」土器を出土している（第38図、第44図6）。

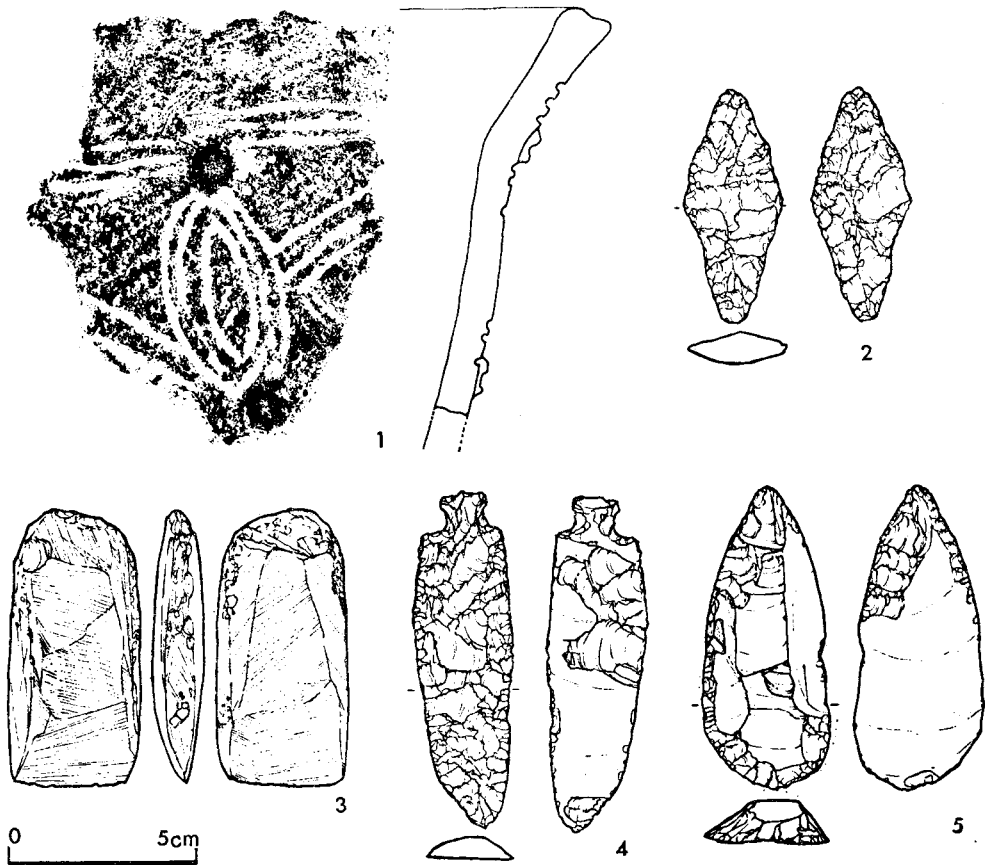
2. N 313 遺跡（手稲前田112）：N293, N309遺跡のつづきで、標高4m程である。かつては、遺物が採集されたいが、現在は住宅の下になっている。

3. N 293 遺跡：今回発掘調査した遺跡である。発掘地点の南西部分からも、トコロ第6類土器を出土したといわれるが、過去の砂取りで壊滅している。

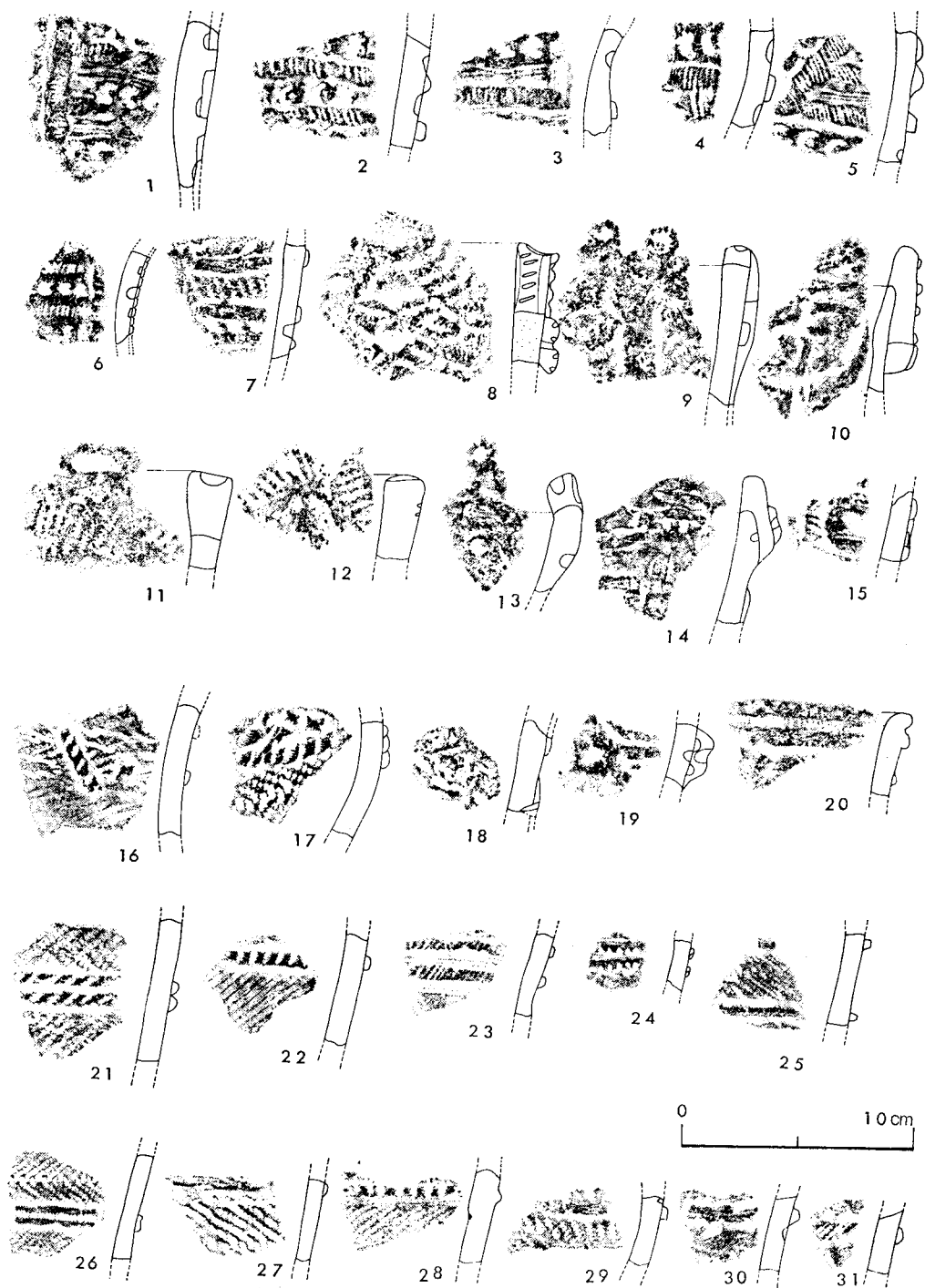
4. N309遺跡（手稲前田105, 宮田正夫）：N 293 遺跡の東側に接しており、サイベ沢Ⅴ, Ⅵ, Ⅶ式, 天神山式, トコロ第6類, 手稲砂山式などの土器群が多量に表採されている（第39～43図, 第44図1～5, 第45図12～16）。

5. N 294 遺跡（手稲前田 525, 佐藤文治）：天神山式土器の系統を引く土器が出土している（第45図7～11）。

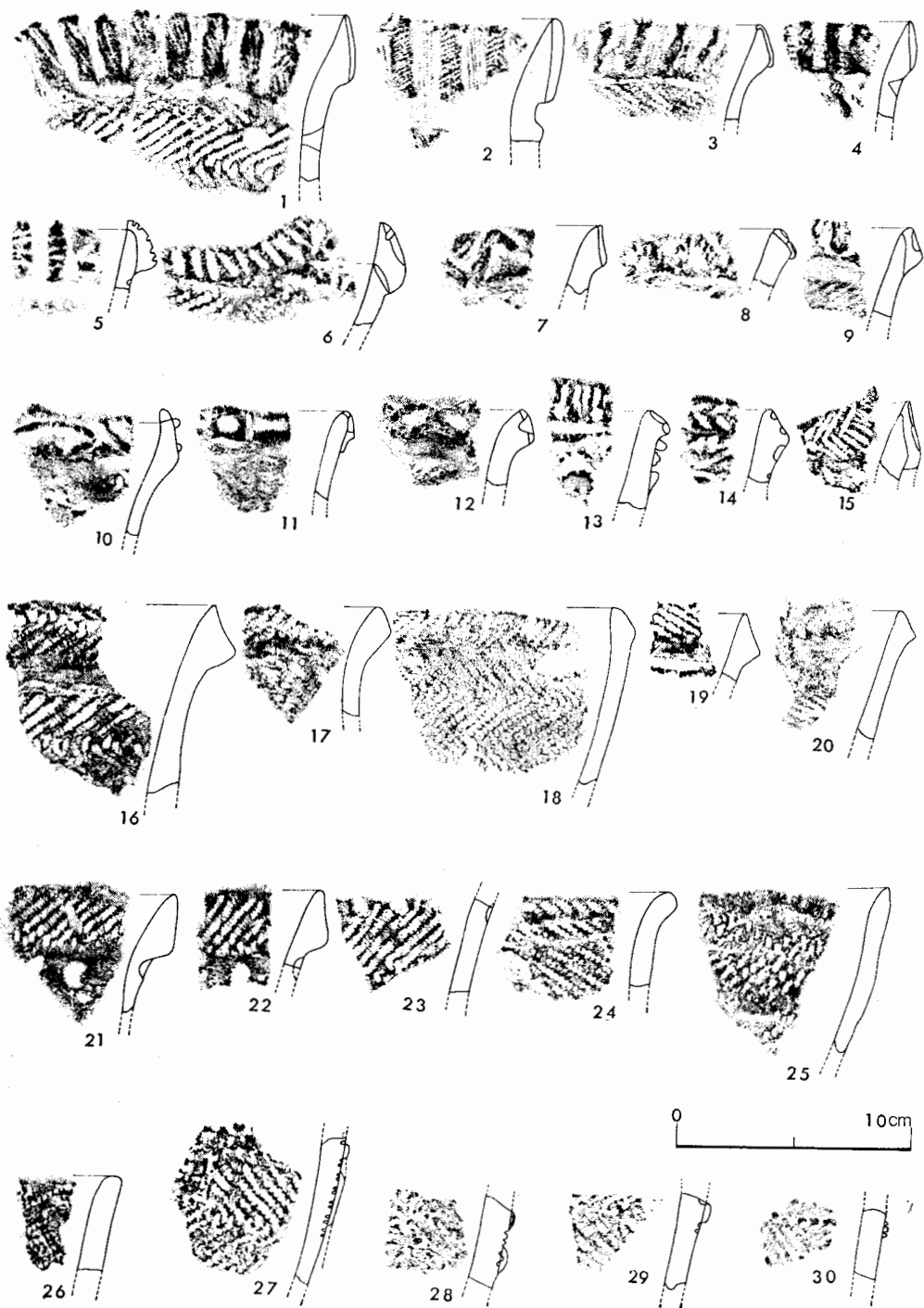
6. N 1 遺跡（手稲前田 524, 佐藤文治）：「手稲遺跡」である。縄文中期の土器も出土している（大場・石川1956）。



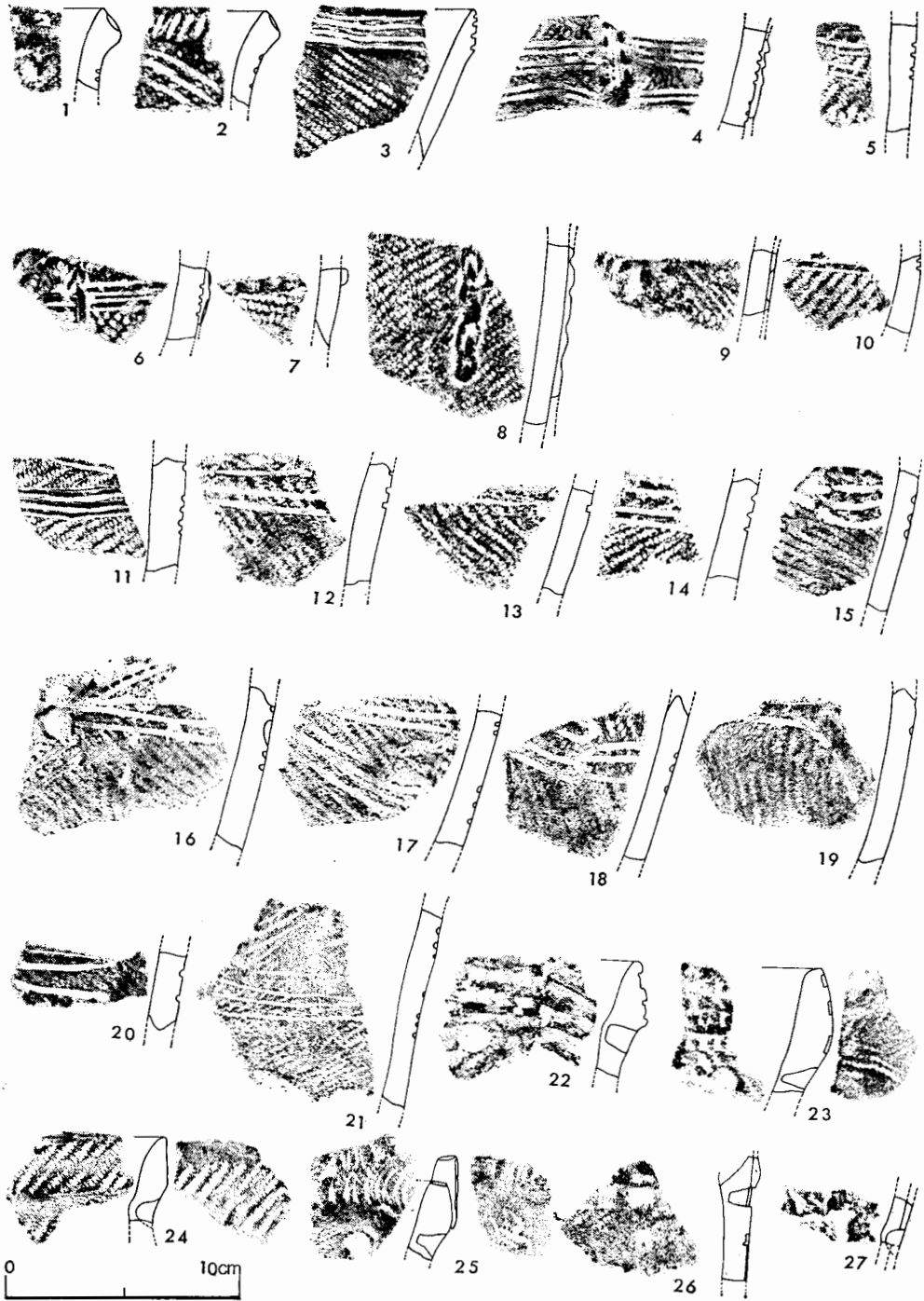
第38図 N 295 遺跡 出土遺物



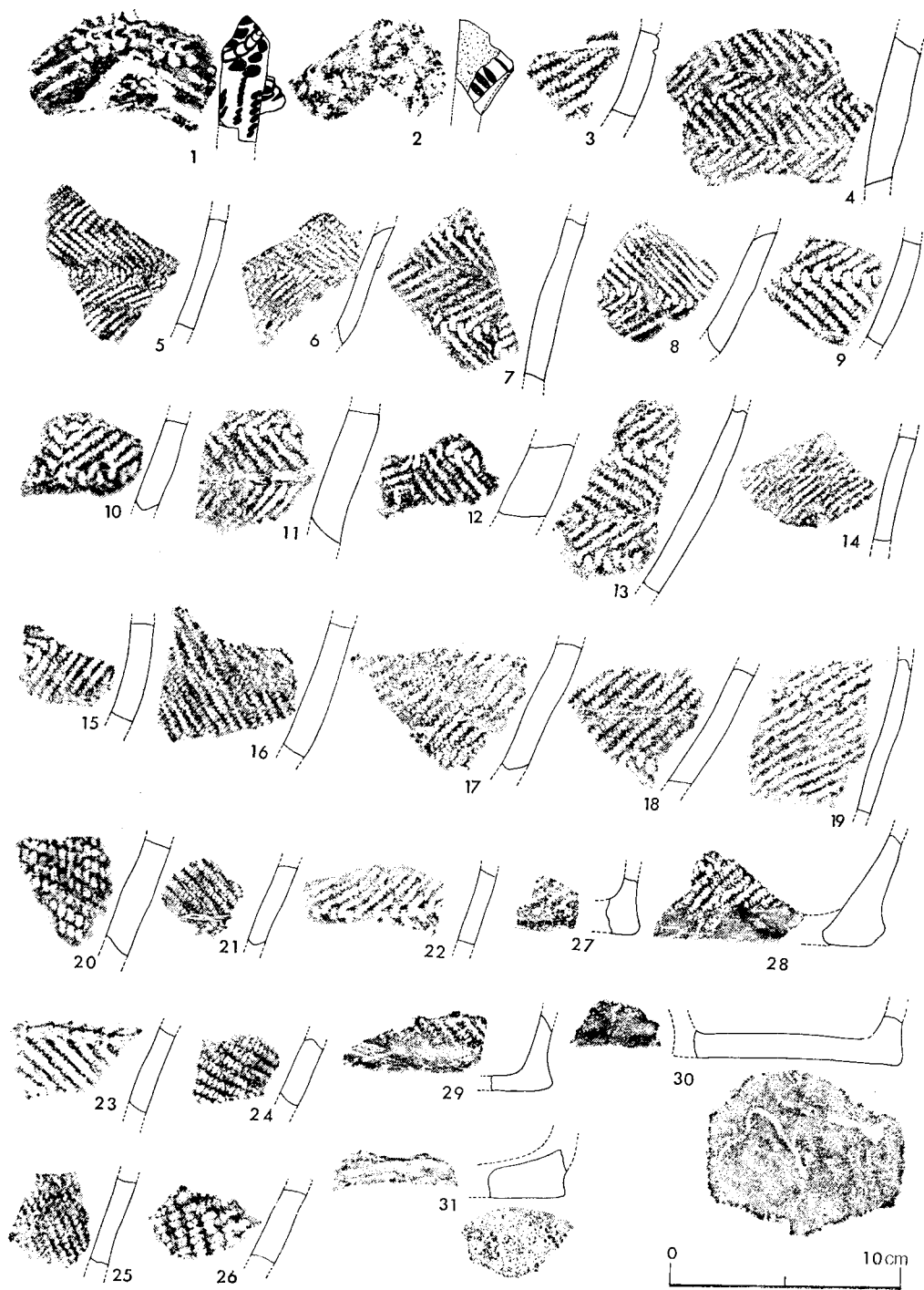
第 39 圖 N309 遺跡出土土器拓影 (1)



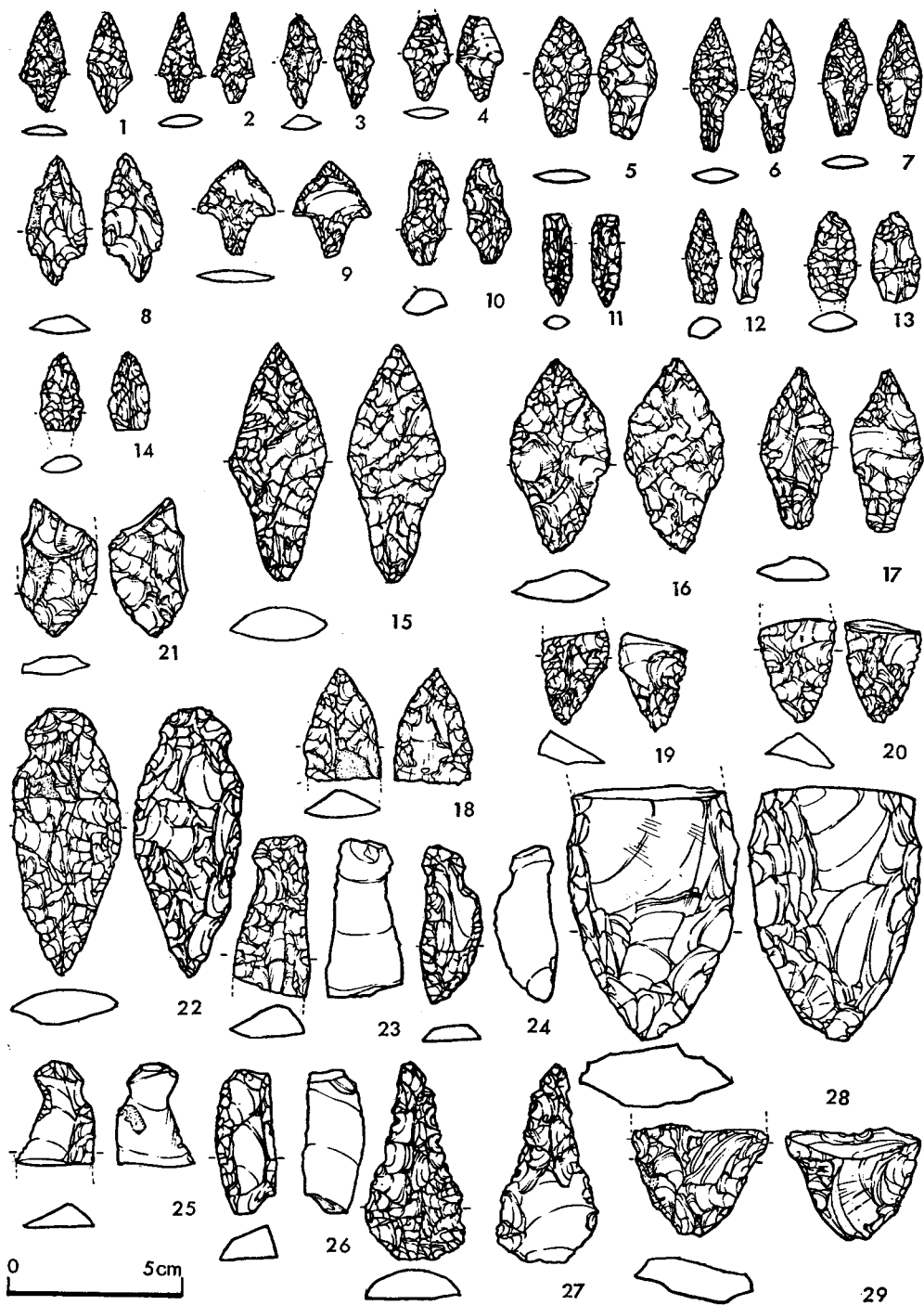
第40图 N309 遺跡出土土器拓影(2)



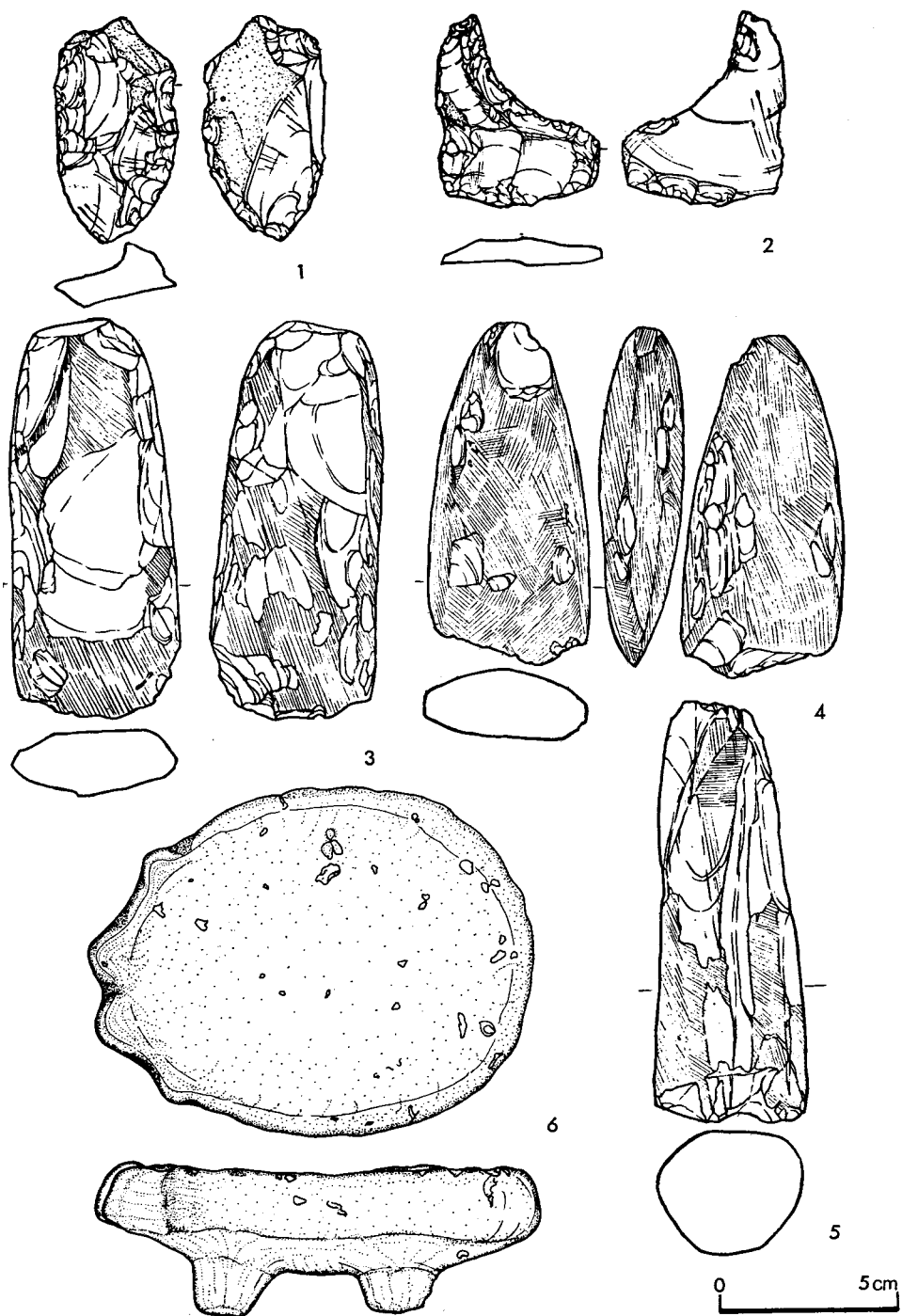
第41圖 N309遺跡出土土器拓影(3)



第 42 图 N309 遺跡出土土器拓影 (4)



第43图 N309 遗址出土石器实测图



第44图 N309 (1~5), N295 (6) 遺跡出土石器実測図

7. N 156 遺跡 (手稲前田 523, 北海道グリーンK.K.): サイベ沢Ⅵ式, 伊達山式土器が出土している (第 45 図 1~6)。

(2) 紅葉山地区 (石狩郡石狩町花畔)

8. M 43 遺跡 (石狩町花畔 230, 福田藤男): 中の沢式, 北筒式土器が出土したという (河野本道ほか1973)。

9. M33遺跡(花畔, 内外緑地K.K.): 天神山式土器の系統を引く土器を出土している。(第46図)。

10. M 117 遺跡 (花畔 1—55, 松浦外吉): 北筒式土器が出土しているといわれる (河野本道ほか1973)。

11. M 26 遺跡 (上花畔): サイベ沢Ⅴ式土器が 1 点出土した (第 45 図 17)。

12. M 51 遺跡 (上花畔): サイベ沢Ⅵ式系の土器が出土している (第 47 図 1~17)。

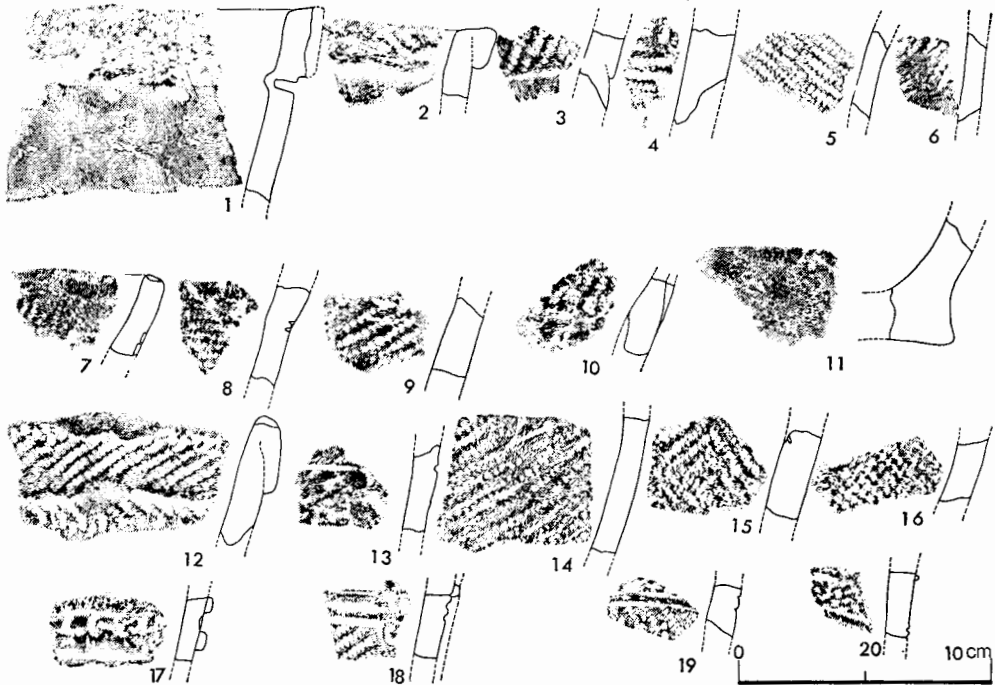
13. M 32 遺跡 (花畔128, 谷口甚作ほか): トコロ第 6 類, 天神山系土器。

(3) 生振地区 (石狩郡石狩町生振)

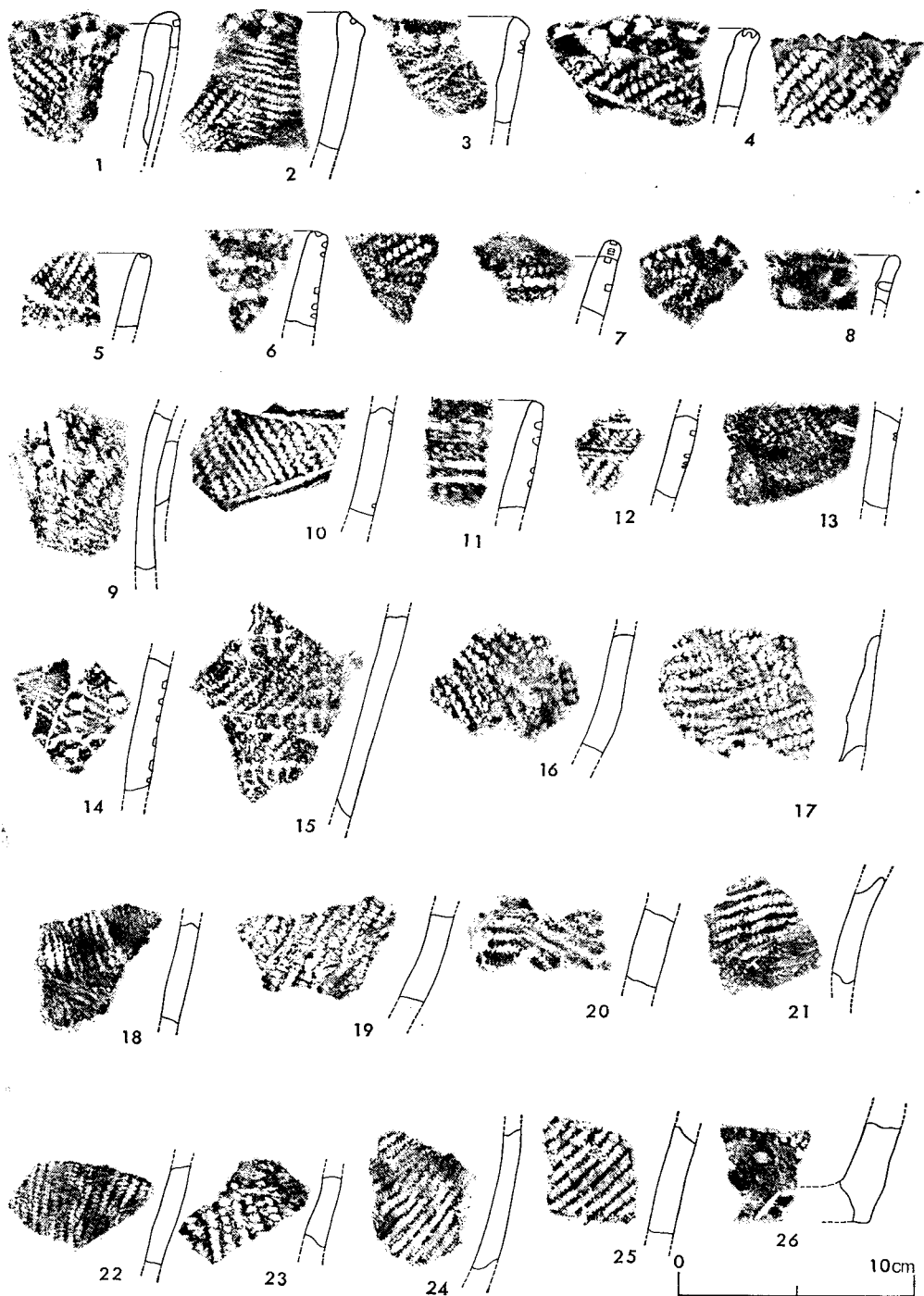
14. O114 遺跡 (石狩町生振): 天神山式, サイベ沢Ⅴ式土器を出土している (第 45 図 18~20)。

15. O71遺跡 (生振 8 線南, 宮前ほか): 縄文中期 (型式不明)。

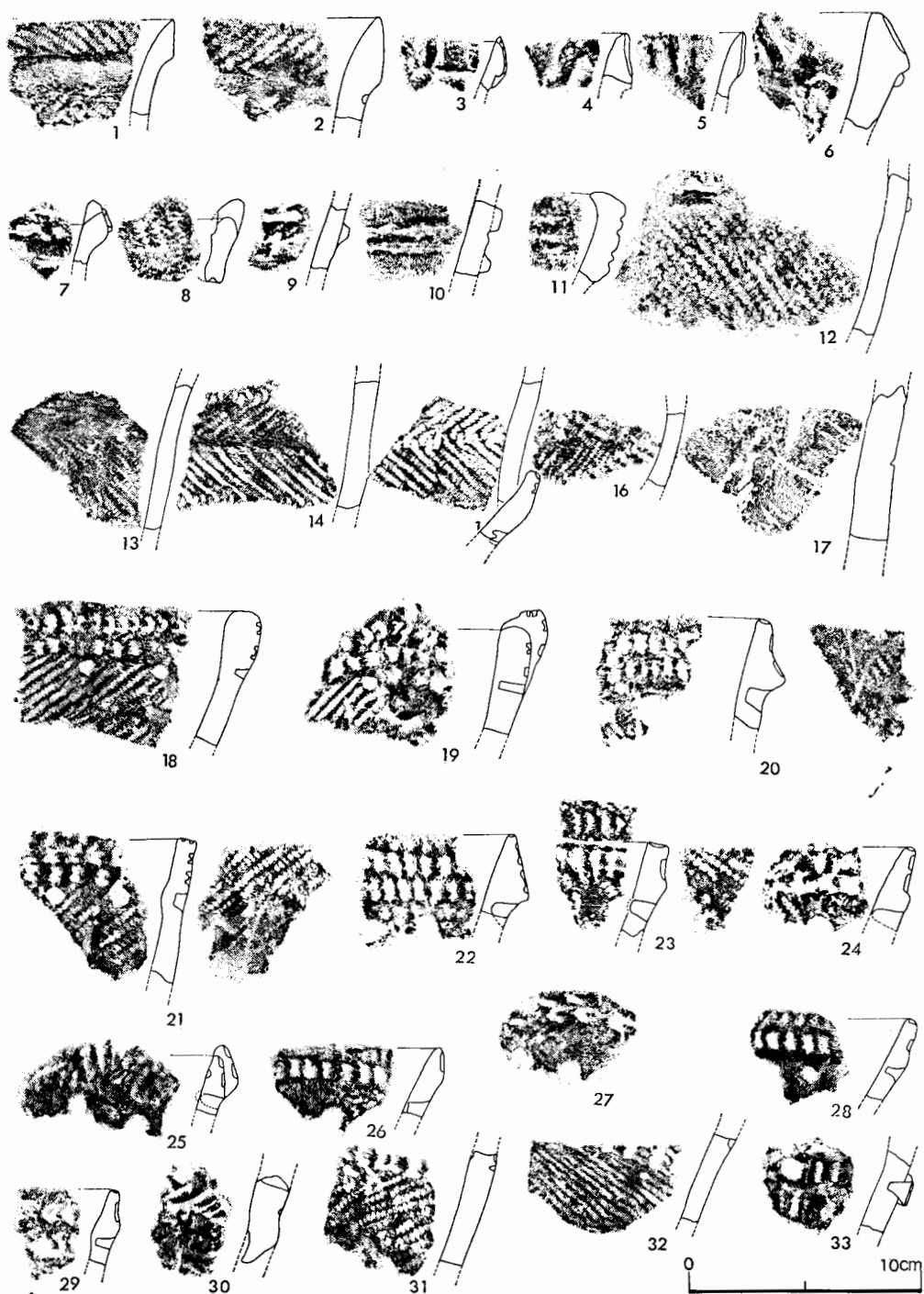
16. O 57 遺跡 (生振 3 線南 3, 4, 鈴木静雄): トコロ第 6 類 (第 47 図 18~33)。



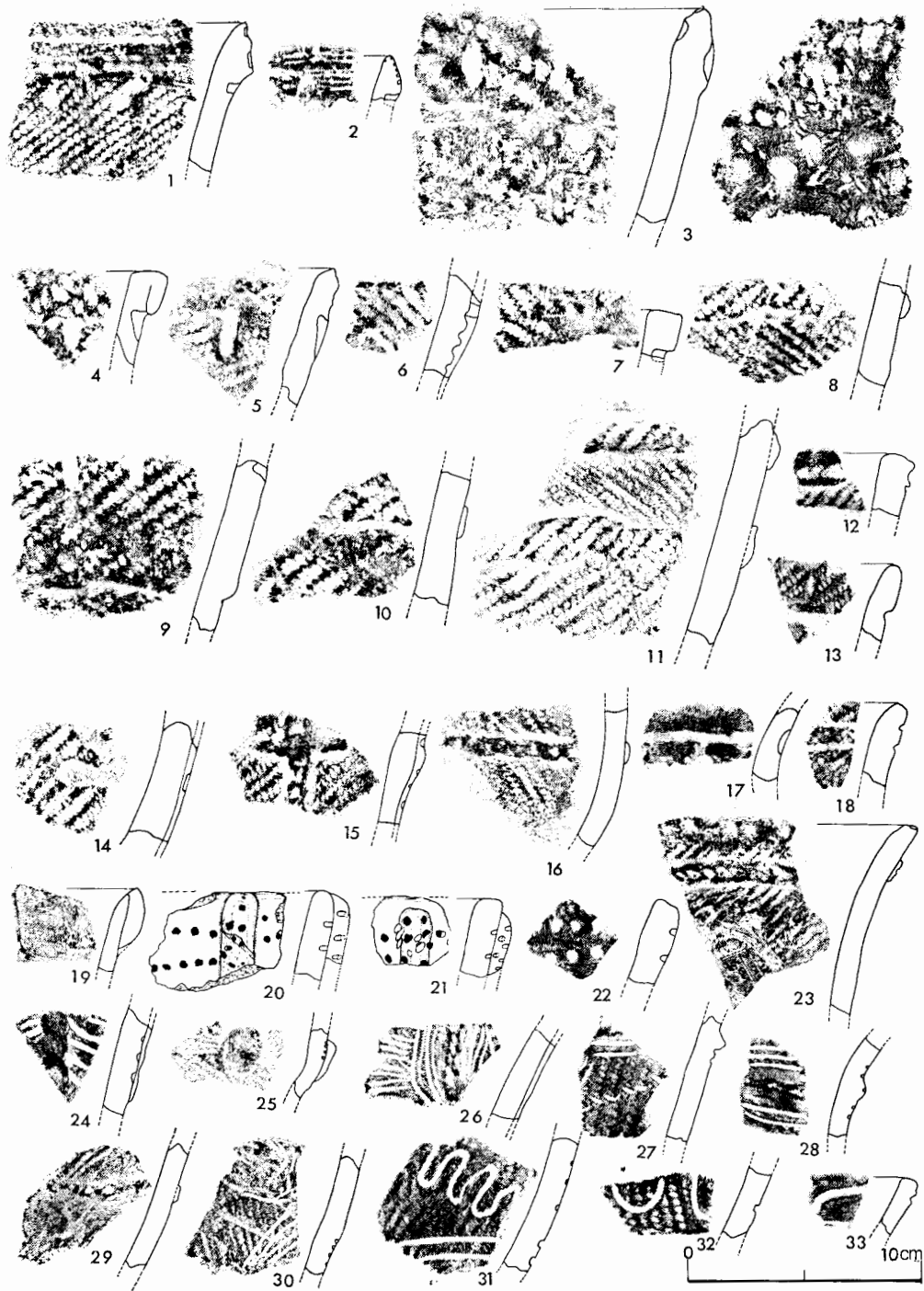
第 45 図 N 156 (1~6), N294 (7~11), N309 (12~16), 石狩町M26(17), 同O114 (18~20)
遺跡出土土器拓影



第46圖 石狩町花畔 M33 遺跡出土土器拓影



第47図 石狩町上花畔 M51 (1~17), 生振 O57 (18~33) 遺跡出土土器拓影



第48図 石狩町生振O25遺跡出土土器拓影

17. O58遺跡（生振3線，吉田隆義ほか）：トコロ第6類。

18. O25遺跡（生振南2線，鈴木静雄ほか）：トコロ第6類土器片若干と伊達山式，手稲砂山式土器を出土している（第48図，図版15B）。

19. O60遺跡（生振南2線，吉田旭）：御殿山式，手稲砂山式土器。

さて，この内，紅葉山砂丘（内陸側列砂丘）上に立地しているものは，N295，N293，N309，N294，N156，M43，M33，M117，M26，M51，M32，O114の諸遺跡であり，中間列砂丘上に立地しているのは，O57，O58，O25，O60の諸遺跡である。これらの遺跡と土器型式との関係を表にすると第5表の如くなる。

第5表 石狩海岸の砂丘上の縄文中期遺跡一覧表

砂丘	遺跡名	サイベ沢 V	サイベ沢 VI	天 神 山	トコロ6	伊 達 山	手稲砂山
紅 葉 山 砂 丘	N 295						+
	N 293		+		+	+	+
	N 309	+	+	+	+		+
	N 294			+			
	N 156		+			+	
	M 43				+	+	?
	M 33			+			
	M 117				+		
	M 26	+					
	M 51		+				
M 32			+	+			
O 114	+						
中 間 列 砂 丘	O 57				+		
	O 58				+		
	O 25				+	+	+
	O 60						+

即ち，紅葉山砂丘では，一番古い遺跡が，N309，M26，O114遺跡などにみられるサイベ沢V式（縄文中期初頭）であり，中間列砂丘では，O57，O58，O25の遺跡でみられる如く，トコロ第6類（縄文中期中葉， $^{14}\text{C}4150 \pm 400 \text{ B. P.}$ ）である事が判る。

この事から，石狩砂丘の形成時期は，遺物という不安定な資料しか用いていないものの，少なくとも砂丘が離水し，固定され，人間が居住しうる環境にあったのが，紅葉山砂丘では，縄文中期初頭，中間列砂丘では縄文中期中葉頃であろうと結論出来る。

上杉 陽ら(上杉・遠藤 1973)も、紅葉山砂丘及び花畔砂堤列について、考古学的資料を加味して、その形成、陸化した年代を説いているが、上述の結論と同様である。そして、「花畔砂堤列地帯は縄文海進の極相期の3～4mの海面高度のもとで浅海底に堆積し、縄文中期以後次々と離水したもので、陸化してもこの時期が……砂丘固定期にあたるため、風成砂の堆積をほとんどみなかった。」といわれる。紅葉山砂丘と花畔砂堤列の考古学上の固定年代が近接しているのもそのためである。

第6表に示したのは、道内及び国内外の新砂丘列の形成時期を一覧表にしたものである。

能登半島平床海岸と氷見海岸の三列の砂丘では、内陸側列と中間列は、5,000年B.P.前後に形成、離水している。山口県の海岸地域の三列の浜堤群では、内陸側列が縄文早期、中間列が縄文後期前半、海岸列が古墳時代前半に形成されているという(三位 1966)。また、北陸の海岸砂丘では内列砂丘が縄文前期後半、中列砂丘が縄文中期初頭、外列砂丘が古墳時代初頭頃に形成されたものという(藤 1971)。

更に、外国のNew ZealandのFirth of Thames砂州海岸では、内陸側列は、3・4000年B.P.に現海上1m前後で形成され、中間列砂丘は、2,000～1,500年B.P.に現海上1m前後で形成され、海岸列は500年B.P.頃に形成されたという。Mississippi deltaの西方Louisiana海岸の浜堤群は、¹⁴C年代測定資料からは内陸側列が、6,500～2,500年B.P.を示し、中間列砂丘は、4,400～1,200年B.P.を示し、海岸列は520年B.P.を示すという(三位 1966)。

一方、道内では、釧路海岸の平原南部の砂丘群は、その基底としての砂州が「釧路潟湖」と呼ばれる時代に形成され、それは文化史的には縄文前～中期に編年される北筒式土器の時代で、縄文後期後半に至って砂丘の形成が始まったと説かれている(岡崎 1962)。

また、苫小牧海岸の砂堤列は、1,500年B.P.とされる樽前C降下軽石の堆積前であるとされている(松下、近堂ほか 1967)。

第6表 新砂丘列の形成時期一覧表

地 域	内 陸 側 列	中 間 列	海 岸 列
能登半島平床海岸と氷見海岸の砂丘	5,000年B.P.前後に形成離水している。		
新潟海岸、鳥取県弓ヶ浜の浜堤群	縄文期以前	弥生期以前	歴史時代以前
山口県の海岸地域の浜堤群	縄文早期	縄文後期前半	古墳時代前半
北陸の海岸砂丘	縄文前期後半	縄文中期初頭	古墳時代初頭
New ZealandのFirth of Thames砂州海岸	3・4000年B.P.	2,000～1,500年	500年B.P.
Mississippi deltaの西方Louisiana海岸の浜堤群	6,500～2,500年B.P.	4,400～1,200年B.P.	520年B.P.
北海道釧路海岸の砂丘群	縄文後期後半以降		
北海道苫小牧海岸の砂堤列	樽前C降下軽石の堆積(1,500年B.P.)前		
北海道石狩海岸の砂丘列	縄文前期中～後半頃	縄文中期初頭～前半頃	

これらの資料よりみて、多少ばらつきがあるが、国内外例共に、ほぼ似かよった時期に新砂丘は形成、固定されている事が判る。この結果は、石狩海岸の砂丘の場合と極めてよく一致している。ただ、このばらつきは「沿岸州の離水は、ごくわずかな地盤隆起によっても行なわれるため、世界的に比較すれば、多少の差があっても当然である」(三位 1966) という事から、ある程度 解決されるであろう。

なお、大島和雄(大島 1969)は、「(紅葉山)砂丘の南西部には、比較的新しい遺跡のみが出土し、砂丘は尖滅しているので、縄文中期頃までは、この南西端部が、かなりの河口もしくは、海水の浸入路であったのではなかろうか。」と述べているが、N 309 遺跡からサイベ沢 V 式土器が出土している事からみて、縄文中期初頭において、この地域に海水の浸入があった事は考えられない。

(上野 秀一)

第7章 N293遺跡の花粉分析

山 田 悟 郎

1 試 料

1973年9月、札幌市西区手稲前田、N293遺跡の発掘に際して、遺跡背後の湿地から採取された試料が、花粉分析を行なうため筆者のもとに届いた。採取地点は、第2図のポイントXである。

試料は札幌市教育委員会、上野秀一氏によって採取された5層準の泥炭と、青灰色粘土、2層準の青灰色砂の8層準である。

泥炭、青灰色粘土、青灰色砂は紅葉山砂丘背後に広く分布するものである。遺跡の南東約300mの発寒中継ポンプ場の試料によると、上位より、泥炭、泥炭と粘土、火山灰質砂の互層、砂まじりのシルト、礫層、頻海性の砂層が堆積している。火山灰質砂の中から出土した木片の¹⁴C年代は、5,090±100 Y.B.P. (Gak-4054)であり、頻海性の砂層中の貝殻の¹⁴C年代は、6,800±150 Y.B.P. (Gak-4347)である。従って、泥炭層は約5,000年前より新しい堆積物であり、粘土層、砂層は約5,000~6,800年前頃の堆積物である。ただ泥炭層については他地域に比べて薄いことから人為的な移動があった可能性が考えられる。

2 分 析 方 法

試料の処理にあたっては下記の方法によった。

- ①試料約50gを10%KOH液に約24時間浸す。
- ②これに水を加えてよく攪拌し、日に一度傾斜法により上澄液を捨て、上澄液が透明になるまで水洗を行なう。
- ③氷酢酸を加えて攪拌してから数分間湯煎する。氷酢酸を除く。次に無水酢酸を加えて攪拌した後、無水酢酸の1/9量の濃硫酸を滴下し数秒間湯煎を行ない上澄液を除く。
- ④水洗後、残渣に比重2.0のZmcl₂を加え、攪拌し約1時間遠心分離を行なう。
- ⑤比重液に浮いた花粉、胞子をスポイトで集め水洗を行なう。
- ⑥グリセリンゼリーで封入して、マニキュア液でカバーガラスの縁どりをする。各試料ごと5枚のプレパラートを作成する。

検鏡にあたっては、出現する花粉、胞子を無作為に250個以上同定した。

分析結果の表示は、高木花粉(A P)については高木花粉総数(250個)に対する百分比で、草本花粉、胞子(N A P)については全花粉、胞子数に対する百分比で示した。

Alnusについては、湿原で出現頻度が高くなるのでA PからはずしN A Pの欄で扱った。

3 分析結果

検出された花粉は、APではPicea(トウヒ^{※-1}属), Abies(モミ^{※-2}属), Pinus(マツ属), Tsuga(ツガ属), Cryptomeria (スギ属), Pterocarya (サワグルミ属), Fagus (ブナ属), Betula (カバノキ属), Carpinus (クマシデ属), Quercus (コナラ^{※-3}属), Juglans (オニグルミ属), Ulmus (ニレ^{※-4}属), Tilia (シナノキ^{※-5}属), Acer (カエデ属), Fraxinus (トネリコ^{※-6}属), Magnolia (モクレン^{※-7}属), Styax (エゴノキ属), Populus (ドロノキ属), Cornus (ミズキ属), Aesculus (トキノキ属), Salix (ヤナギ属), Ilex (モチノキ属), Ericaceae (シャクナゲ科), Myrica (ヤチヤナギ), Aralia (タラノキ属), NAPではAlnus (ハンノキ属), Graminea (イネ科), Compositae (キク科), Carduoidea (キク亜科), Artemisia (ヨモギ属), Cichroioeae(タンポポ亜科), Caryophyllaceae(ナデシコ科), Chenopodium (アカザ科), Persicarya (タデ科), Menyanthes (ミツガシワ属), Geranium (フウロウソウ属), Angelica (シシウド属), Rumex (ギンギン属), Liliaceae (ユリ科), Nuphar (スイレン科), Thalicttrum (キンボウゲ科), Drosera (モウセンゴケ科), Ligstrum (イボタノキ属), Typha (ガマ), Sanguisorba (ワレモコウ属), Cyperaceae (カヤツリグサ科), Osmunda (ゼンマイ科), Monolate Type Spore が検出された。

- ※-1 エゾマツ, アカエゾマツ等が考えられる。
- ※-2 トドマツ, アオトドマツなど
- ※-3 カシワ, ミズナラ, コナラなど
- ※-4 ニレ, オヒョウなど
- ※-5 シナノキ, オホバシナノキなど
- ※-6 ヤチダモなど
- ※-7 コブシなど

これら花粉の出現率と構成状態を検討し、2花粉帯に分帯した。

- ① Quercus-Juglans 帯 (試料番号 8, 7, 6, 5, 4)
- ② Quercus-Abies 帯 (試料番号 3, 2, 1)

① Quercus-Juglans 帯

落帯性広葉樹の Quercus, Juglans, Tilia が優勢で、針葉樹の Picea が 1%弱~4%, Abies が 3~6%と少ない。

Quercus が次第に増加し、No. 5 で 5%に達している。Ulmus は減少している。

No. 5, No. 6 では黒松内低地帯を北限とする 落葉性広葉樹の Fagus が 2%弱, Pterocarya が 1%弱出現するほか、青森県を天然分布の北限とする Cryptomeria が 1%弱出現する。Alnus が増加をはじめている。

NAP では Monolate Type Sporeが多いが減少する傾向にある。Graminea が 10%前後の出現率を保っている。

② Quercus-Abies 帯

Quercus, Juglans 等の広葉樹種が減少し, Picea, Abies 等の針葉樹種が増加する。

Abies はそれまで4%前後だったものが20%に達する。Betula も増加している。Alnus は、ひき続き増加している。

NAP では、Monolate Type Spore が再び増加する。Graminea は10%前後の出現率を保っている。

その他、Compositae, Carduoidea, Artemisia など1%弱であるが出現するようになる。

4 考 察

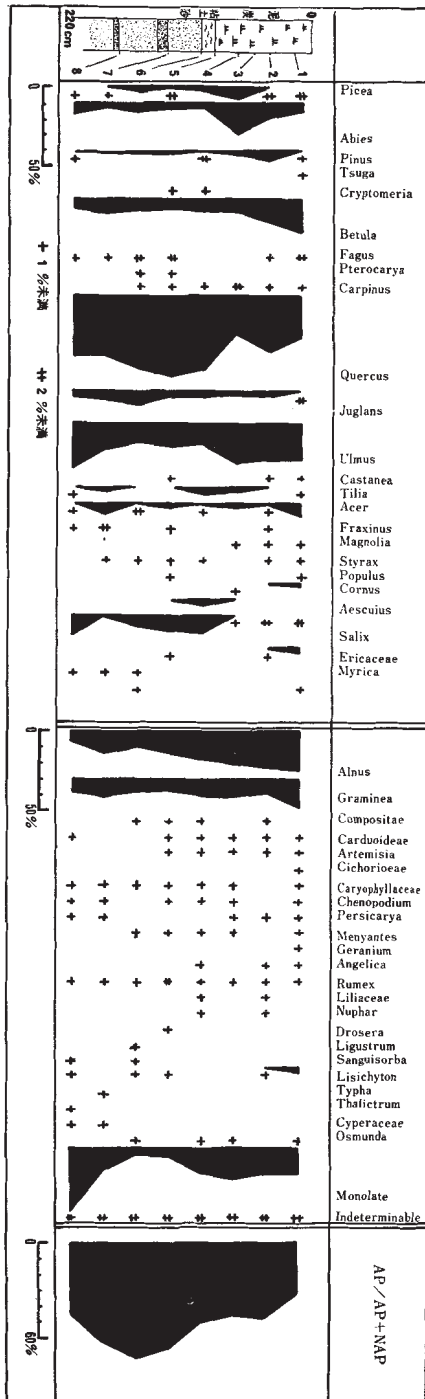
植生の変遷を推定するにあたっては、表土層の花粉組成が現在の植生にもっとも近い花粉組成を示すものと考えて、これをもとに古植生の推定を行なった。

石狩低地帯は森林帯上、冷温帯樹種と亜寒帯樹種が混交する、冷温帯から亜寒帯へ移行する中間帯（汎針広混交林帯）に位置している。紅葉山砂丘列の植生を見ると、カンワが主で、ミズナラ、シラカンパ、イヌエンジュ、ハリギリ、タラノキ、ヤチダモ、ハルニレ等からなっている。又、渡辺・小山(1929)によると、旧手稲村上手稲の軽川光風館付近にトドマツの天然林があったことが報告されている。

No. 1 では、寒冷要素の Abies, Picea 等の針葉樹種の出現率が8%弱である。冷温帯性広葉樹種で、現在周辺に生育している Quercus, Carpinus, Juglans, Ulmus, Tilia, Fraxinus がしめる率は55%で、平野部での汎針広混交林帯の植生を示している。

①の Quercus-Juglans 帯での針葉樹種のしめる割合は5~4%で、冷温帯性広葉樹のしめる割合は約74%である。更に、黒松内低地帯を現在の北限とし、その南に生育する Fagus, Pterocarya 等の温暖な地方の樹種の花粉が Picea, Abies が減少するこの時期にわずかながら出現していることから、この時期の植生は、現在より温暖な地方の植生を示していたと考えられる。水平分布からみると、これに近い植生は現在の噴火湾東側にあたり、年平均気温で約1℃温暖である。

第49図 N 293 遺跡付近の泥炭層の花粉分析図表



②の Quercus-Abies 帯で針葉樹種の Abies, Picea のしめる率が 28%に達し、現在周辺に生育している冷温帯性広葉樹のしめる率は 53%である。これは現在よりも冷涼な地方の植生をしめしており、水平分布からみると、これに近い植生は現在滝川付近で見られ、年平均気温で約 1℃低温である。

5 結 論

筆者は紅葉山砂丘の後背湿地から採取された泥炭の花粉分析を行なった。

試料は No. 1～8 までの 8 層準である。

周辺で得られている ^{14}C 年代 5,090±100 Y.B.P, 6,800±150 Y.B.P から、青灰色粘土層及び砂層は約 5,000～6,800 年前頃の堆積物であり、その上の泥炭層は 5,000 年前より新しい時代の堆積物である。

古気候の推定をすると、① Quercus-Juglans 帯は約 5,000 年～2,000 年前までの間で、Atlantic Stage 末期～Sub-boreal Stage 初期に相当し現在よりも温暖な時期であった。砂丘上の遺跡は、この時期に形成された。② Quercus-Abies 帯は約 2,000 年前～現在までの間で Sub-boreal Stage に相当する。はじめは冷涼な気候であったが次第に現在の気候に近づいてきた。

※-8 石狩町紅葉山遺跡の花粉分析を行なった際、縄文文化晩期の遺物包含層の下から採取した泥炭の花粉組成は、前記の① Quercus-Juglans 帯に類似したものであった。従って、ここではその上限を 2,000 年前とした（未発表）。

以上、砂丘上の縄文文化中期の遺跡が形成された時期は Atlantic Stage の温暖な時であったと考えられる。

お わ り に

この度の花粉分析による研究が今後、この種の研究を進める上で若干の資料として参考になれば幸いである。

同地点での試料の採取を更に詳細に行なえば、さらに分帯が可能になるものと考えられる。

おわりに、この報告をまとめるにあたって種々のご助言をいただいた北海道開拓記念館三野紀雄氏、更に試料を採取し提供してくれた札幌市教育委員会、上野秀一氏には心から感謝の意を表す。

圖版說明

圖版 16

1. Picea	× 400
2. Picea	× 400
3. Picea	× 400
4. Abies	× 400
5. Abies	× 400
6. Pinus	× 400
7. Pinus	× 400
8. Betula	× 600
9. Betula	× 600
10. Betula	× 600
11. Alnus	× 600
12. Fagus	× 600
13. Fagus	× 600

圖版 17

14. Quercus	× 600
15. Quercus	× 600
16. Quercus	× 600
17. Ulmus	× 600
18. Ulmus	× 600

19. Juglans	× 600
20. Juglans	× 600
21. Tilia	× 600
22. Tilia	× 600
23. Styrax	× 600
24. Aralia	× 600
25. Ericaceae	× 600
26. Gramineae	× 600
27. Rumex	× 600
28. Cichorioideae	× 600
29. Carduoideae	× 600
30. Chenopodium	× 600
31. Artemisia	× 600
32. Persicarya	× 600
33. Compositae	× 600
34. Lysichiton	× 600
35. Angelica	× 600
36. Nuphar	× 600
37. Monolate Type Spore	× 600

結 語

以上、各項目別に述べてきたが、N 293 遺跡は、縄文時代中期後半の遺跡である。

本遺跡出土の土器群は、サイベ沢Ⅵ式の系統を引く土器と天神山式土器、トコロ第6類、伊達山式、手稲砂山式、入江B類、涌元式土器などが検出され、その主体はトコロ第6類と余市式土器群である。時代的には、縄文中期後半から後期初頭である。石器の組成も、トコロ第6類及び伊達山式土器に伴なうものと極めて近似している。トコロ第6類と伊達山式土器の石器の器種組成が、類似している事は、文化的関連及び生業上の類似を想像させる。ただ、器種の数量的な比率は、尖頭器類において、相違を示している。即ち、石鏃は、伊達山式土器には多いが、トコロ第6類には少なく、石槍はトコロ第6類に多く、伊達山式に少ない。「石銚」といわれる器種は、両文化共に多い。ひるがえって、円筒上層式土器文化との大きな違いは、円筒文化には「石銚」がない事と、両面加工ないし片面加工の定形化した柄のあるナイフ（石匙）が円筒文化には数多くあるが、トコロ第6類、伊達山式土器にはなく、単に縦長剥片の周辺に加工を加えたもののみであるという点、そして石冠を含めたすり石類がトコロ第6類と伊達山式土器には少ないという点である。このような、土器群と石器組成との関連と相違の問題は、極めて重要で改めて論じてみたいと思っている。

ピット群については、その年代および性格を決定する根拠に乏しく、結論は出なかった。ただ、遺物包含層である下部土壌層の上部を被っている火山灰は、樽前火山起源の Ta-a (1739 年降下) ないし Ta-b (1669 年降下) であり (上杉・遠藤 1973)、それ以前の所産である事が判る。また、ピット 16 から採取した木炭の ^{14}C 年代は、 $3850 \pm 260 \text{ B.P. (Gak-5031)}$ という年代を得ている。この年代は、常呂郡常呂町朝日トコロ貝塚のトコロ第6類包含層の貝殻の ^{14}C 年代、 $4150 \pm 400 \text{ B.P. (Gak-188)}$ 、沙流郡門別町富川町中沢遺跡の伊達山式ないし入江第Ⅲ類に対比される土器を出土した竪穴住居跡内部の木炭の ^{14}C 年代、 $3825 \pm 175 \text{ B.P. (J-552)}$ と極めてよく符合しており、従ってこれらのピット群は、発掘区から出土した土器群とほぼ同時期——縄文中期後半である蓋然性が強い。性格に関しても、積極的にそれを決定する資料に乏しいが、第4章第3節で詳述した通り、現在の知識をもってすれば、「貯蔵穴」ないしは「墳墓」であろうと思われる。

竪穴住居跡状遺構も、同様に不明のままであるが、トコロ第6類期頃に、このような遺構が多いという点は、興味ある事実である。

ピット群と竪穴住居跡状遺構は、砂丘の内陸側にあつて、この立地性は、他の紅葉山砂丘上に立地する諸遺跡のそれと同様である。

今まで、この砂丘上の遺跡で、性格が判っているのは、すべて墳墓遺跡であり、本遺跡も、定住的な遺跡とは断じえなかった。しかし、手稲遺跡では、住居跡があった可能性もあり (大場・石川 1956)、必ずしも上述のような遺跡のみとは限らないのかもしれない。日本海沿岸には、貝塚は少ないといわれる。この問題は、貝の棲息条件という事とも関連するであろうが、注意を要する事である。この砂丘上に住んだ人間は、何に生業の基盤をおき、どのような利点をもって、砂丘上に遺

跡を営んだのであろうか。砂丘は、一般には植生の発達が遅く、しかも砂丘が固定したとはいえ、風による砂の害も多分にあるであろう。特に、本遺跡が営なまれた縄文中期には、まだ、下部土壌層が未発達で、その点は著しいものであったかと思う。それ故、漁労に依存する以外は、このような所に立地する事には、それなりの必然性があったものと思われる。紅葉山砂丘ないし花畔砂堤列上に存在する遺跡の場合、漁労を行なっていたであろう痕跡は稀薄で、しかも当時の人間が居住していた頃には、既に汀線は、現石狩湾あたり迄海退していたと考えられる。砂丘地では、貝塚は砂の下に没している可能性があるものの、紅葉山砂丘上に居住した人間は、漁労にあまりウエイトを置かない生活を送っていたのかもしれない。

縄文中期初頭には、紅葉山砂丘が形成・離水し、人間が居住しうる環境にあった事は確かである。気候的には、この遺跡の営なまれた時期は、Atlantic stage 末期から Sub-boreal stage 初期に相当し、年平均気温で、約1℃温暖であった。しかし、砂丘の後背地では泥炭層が形成されており、付近の環境としては、決してよいとは考えられない。斯考えてくると、この砂丘は手稲山系から石狩高岡方面に抜けるための交通路として利用された可能性も出てくるであろう。

この紅葉山砂丘上の遺跡群を詳細に研究する事は、遺跡の時代による立地性の違い、古代人の移動の問題を明らかにし、ひいては砂丘遺跡の特殊性を解明する上で極めて重要な事と思われる。

それ故にこそ、これらの遺跡群が、近年破壊の危機に頻している事は、悲しむべき事実で、より一層の保護対策が望まれる所以である。

なお、本報告書においては、遺跡の後背地から採取した泥炭層の花粉の分析を、北海道開拓記念館の山田悟郎氏にお願いし、原稿まで執筆して頂いた。この成果は、今後この地域の先史地理学的復原に、大きな成果を果すであろう。心から感謝の意を表する次第である。

また、第2章と第7章は、上野(1968, 1969)に基礎をおく事を断っておく。(上野 秀一)

第7表 N 293 遺跡ピット一覧表

ピット 番号	区 名	平面形	規 模		小ピット	長軸方向	ピット の タイプ	覆 土	土 器	覆 土 石 片	木	炭	骨 片	ピット 番 号	区 名	平面形	規 模		小ピット	長軸方向	ピット の タイプ	覆 土	土 器	覆 土 石 片	木	炭	骨 片	
			横 口	深 度													横 口	深 度										
1	M0-M1	不整多角形	160×(95)	30		NE-SW	Aa	4	2	7				26	J9-K9	不整円形	(83)×73	42		N-S	Ac							
2	M0-M1	楕円形	225×140	40	中央に1個	NW-SE	Bb	5	6	3				27	H8	不整楕円形	(80)×46	23		NNW-SSE	Ab							
3	M1-M2 N1-N2	不整楕円形	220×155	60		N-S	Bd	48	34	2				28	H8	不整楕円形	(107)×59	21		WNW-ESE	Ab							
4	M2-N2	不整楕円形?	(150)×132	40		E-W	Bd	21	7	2				29	J7-K6-K7	不整楕円形	(162)×141	13	南東壁に 1個	NW-SE	Ba							
5	K3	不整円形	115×(83)	20		E-W	Aa							30	J7-K6-K7	不整四角形	122×86	43		NW-SE	Be	1						
6	K3	不整四角形	(210)×170	42		NE-SW	Aa	1	5	3				31	K1	不整楕円形	204×141	22		N-S	Ab							
7	K3-K4	不整楕円形	162×110	35		N-S	Aa	2						32	J1-J2	不整楕円形	124×105	24		WNW-ESE	Aa							
8	I7-I8 J7-J8	不 明	155×(105)	27		NNW-SSE	Aa							33	K6	不整楕円形	113×87	15		NW-SE	Aa							
9	I7-I8 J7-J8	不整楕円形	352×224	72	中央に1個	NW-SE	Bc	4	5					34	E6-E7	楕円形	72×23	13		WNW-ESE	Ab							
10	K6-L6	不整多角形	269×232	33	内部に6個	WNW-ESE	Ba	32	13	1				35	I2-J2	不整円形	84×77	21		NE-SW	Aa							
11	K5-K6	不整卵形	215×172	77	壁に1個	NW-SE	Ba	2	2					36	J6-J7	不整多角形	97×80	20	北東壁に 1個	N-S	Ba		4					
12	N1	不整楕円形	197×128	30	中央に1個	E-W	Ba	1	4					37	I1-I2 J1-J2	不整円形	65×57	16		NE-SW	Aa							
13	L3-L4	不整円形	190×184	37		N-S	Aa							38	F12-G12	不整多角形	290×150	98		NW-SE	Be	4	2					
14	I5	不整楕円形	122×(93)	30	南東寄りに 1個	NW-SE	Ab							39	G12	不整卵形	200×105	68	中央に1個	E-W	Ba	2						
15	H5-I5	不整楕円形	(122)×73	20		NNW-SSE	Ba							40	G10-G11	不整楕円形	250×148	40		NW-SE								
16	M6-N6	不整楕円形	(157)×124	67	中央に1個	NNW-SSE	Ba	2	4	3	2			41	M8-N8	不整三角形	268×237	32		E-W								
17	M6	不整円形	(58)×73			E-W								42	D7-D8-E8	不整楕円形	281×128	38		NNW-SSE								
18	M5	不整四角形	155×117	47		N-S	Ac	15	2					43	G10	不整卵形	220×170	18		E-W	Aa							
19	J6	不整卵形	(130)×(79)	31		NW-SE	Aa							44	E11	不整楕円形	161×70	27		NW-SE	Ba							
20	J6	不整楕円形	(86)×73	15		NW-SE	Aa							45	H10	不整楕円形	118×74	28		NNW-SSE	Aa							
21	J6	不整楕円形	(50)×53	15		NE-SW	Aa							46	J4	楕円形	155×80	30		NW-SE	Ab	1						
22	J5-K5-K6	長方形?	(57)×37	34		NE-SW	Bb		1					47	E12	不整円形	99×97	19			Aa							
23	J5-K5-K6	不整円形	(161)×(103)	26		N-S	Aa	1																				
24	J2	不整楕円形	162×94	51		NE-SW	Ba							48	J7-J8 K7-K8	馬蹄形	323×234	72		NW-SE	C	3						
25	K9	卵形	(76)×63	16		NW-SE	Ab							49	J0-J1	馬蹄形	339×317	67		NNW-SSE	C							

第8表 N 293 遺跡遺構出土石器一覧表

図版番号	遺構番号	名称	全長	最大幅	最大厚	重量	石質	備考
			mm	mm	mm	g		
9—17	3号ピット	石 鏃	21	10	4	0.7	ob.	
18	"	削 器	32	18	8	3.8	rh.	
19	4号ピット	砥 石	(26)	14	7	(2.5)	sa.	
20	"	縦長剥片	29	11	4	1.4	ob.	
21	3号ピット	"	42	11	3	1.2	ob.	
22	"	扁平石核	32	25	10	9.9	ob.	
11—8	1号ピット	縦長剥片	20	17	5	1.9	ob.	欠損後、焼 けている
9	6号ピット	両面体石器	16	16	10	3.4	ob.	
10	"	扁平石核?	33	18	12	8.6	ob.	
11	7号ピット	砥 石	58	32	35	93.0	an.	
14	9号ピット	石 鋸	47	19	8	5.7	ob.	
15	"	両面体石器	(24)	(28)	9	(6.7)	ob.	
15—10	10号ピット	ナイフ状石器	39	17	6	8.9	ob.	
11	"	矩形剥片	(33)	28	10	(9.4)	ob.	
12	"	縦長剥片	(25)	(21)	5	(3.0)	ob.	
13	"	石 鏃	23	10	3	0.7	ob.	未成品
19—4	9号ピット	縦長剥片	41	26	7	5.4	ob.	
11	16号ピット	矩形剥片	28	21	3	1.8	ob.	
12	"	"	(19)	(24)	5	(1.9)	ob.	
29—4	第1号住居状遺構	半両面体石器	23	28	8	4.9	ob.	
5	"	"	(14)	(24)	10	(3.5)	ob.	
6	"	縦長剥片	34	22	4	2.9	ob.	
7	"	"	(27)	14	4	(1.4)	ob.	
10	第2号住居状遺構	ナイフ状石器	(40)	13	5	(2.8)	ob.	
11	第3号住居状遺構	半両面体石器	32	(22)	5	(3.4)	ob.	

〔石質略号〕

- an. (andesite) : 安山岩, bl. (black schist) : 黒色片岩
 gre. (green schist) : 緑色片岩, ob. (obsidian) : 黒耀石
 qu. (quartz porphyry) : 石英玢岩, rh. (rhyolite) : 流紋岩
 sa. (sand stone) : 砂岩, sch. (schist) : 片岩
 sh. (hard shell) : 硬質頁岩

第9表 N 293 遺跡発掘区出土石器一覧表

図版番号	出土地区	名 称	全 長	最大幅	最大厚	重 量	石 質	備 考
			mm	mm	mm	g		
36—1	表 採	石 鏃	30	15	6	2.4	ob.	
2	N 5	"	(23)	13	4	(1.2)	ob.	
3	K 7	"	(23)	10	5	(1.4)	ob.	
4	表 採	"	44	12	7	3.0	ob.	
5	I 4	石 銛	(36)	20	6	(4.2)	ob.	
6	J 5	"	(32)	(18)	(6)	(4.2)	ob.	
7	L 4	"	56	22	9	10.9	ob.	
8	K 8	"	(56)	23	8	(9.5)	ob.	
9	L 4	"	(35)	24	9	(6.7)	ob.	
10	J 3	"	(62)	27	6	(11.4)	ob.	未 成 品
11	L 2	ナイフ状石器	46	25	9	10.4	ob.	
12	J 5	"	(63)	25	10	(19.3)	sh.	
13	T 11	"	108	30	7	32.6	sh.	
14	? ?	"	35	20	10	6.0	ob.	
15	? 8	搔 器	32	27	8	7.2	ob.	
16	L 3	"	31	29	5	5.2	ob.	
17	I 8	"	27	27	7	5.6	ob.	
18	M 2	"	43	40	6	7.7	ob.	
19	J 8	両面体石器	60	41	15	32.4	ob.	
20	M 8	"	(34)	29	11	(10.7)	ob.	
21	M 6	搔 器	22	22	11	4.1	ob.	
22	L 3	削 器	47	20	11	9.5	ob.	
23	表 採	"	61	19	13	15.4	ob.	
37—1	H 12	石 斧	154	46	12	160.0	gre.	
2	K 8	"	(145)	55	22	(290.0)	bl.	
3	I 8	"	(65)	50	26	(120.0)	gre.	
4	表 採	"	59	29	5	17.8	sch.	
5	M 6	砥 石	(76)	66	19	(88.8)	sa.	
6	M 2	礫 器	78	68	31	150.0	qu.	

(註) 石質の略号は、第8表参照。

□ 参考・引用文献

- 嵐山遺跡調査会編 1968 『嵐山遺跡』 (単)
- 五十嵐 鉄 1934 『大谷地貝塚の層位研究 第一編』 (単)
- 石川 徹 1967 「札幌郡手稲砂山出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 石本 省三・菅原 健史 1968 「紅葉山砂丘における縄文期の遺跡」『北海道の文化』14所収
- 岩崎 隆人・宇田川 洋・河野 本道・西野 彰子 1963 「札幌市附近の遺跡——収録篇, 分布図篇」『郷土の科学』41/42所収
- 岩崎 隆人・三室 俊昭・室田 彰則 1970 『伊達山遺跡』(単)
- 上 杉 陽・遠藤 邦彦 1973 「石狩海岸平野の地形と土壌について」『第四紀研究』12—3所収
- 上野 秀一 1968 「石狩砂丘遺跡について」『歴研月報』15-81所収 (山形大学教育学部歴史学研究会, 山教史学会)
- 上野 秀一 1969 「石狩砂丘の形成とその年代について」『歴研月報』15-87所収
- 遠藤 邦彦 1967 「日本沿岸の過去2万年間の海水位変化——海成層の¹⁴C年代測定」『考古学ジャーナル』3所収
- 大島 和雄 1969 「紅葉山砂丘形成についての一考察」『調査研究報告会講演要旨録』20所収
- 大塚 和義 1966 「石狩・花畔出土の石器」『Field』3所収
- 大場 利夫・田川 賢蔵 1955 『静狩遺跡』(単)
- 大場 利夫・石川 徹 1956 『手稲遺跡』(単)
- 大場 利夫・石川 徹 1961 『浜益遺跡』(単)
- 大場 利夫ほか 1962 『室蘭遺跡』(単)
- 大場 利夫・石川 徹 1966 『恵庭遺跡』(単)
- 岡崎 由夫 1962 「東釧路貝塚附近の地形」『東釧路』所収
- 加藤 邦雄・上野 秀一・羽賀 憲二 1973 『白石神社遺跡』札幌市文化財調査報告書1
- 加藤 晋平 1968 「片刃石斧の出現時期」『物質文化』11所収
- 菊地 俊彦 1967 「札幌市平岸天神山出土の土器について」『北海道考古学』3所収
- 北川 芳雄・赤松 守雄・平川 善祥・熊野 純男・五十嵐八重子 1973 「石狩低地帯の後氷期の変遷」『日本第四紀学会講演要旨集』2所収
- 霧ヶ丘遺跡調査団 1973 『霧ヶ丘』(単)
- 倉谷 泰賢 1968 「石狩町紅葉山33号遺跡概報」『北海道の文化』14所収
- 黒崎 康雄・橋本 晋 1965 「北海道浦河郡浦河町浜荻伏遺跡」『古代』45/46所収
- 桑原 護 1966 「北筒式土器」『考古学雑誌』51-4所収
- 河野 広道・沢 四郎 1962 「考察」『東釧路』所収
- 河野 広道・沢 四郎・岡崎 由夫・山口 敏・小沼 宗心 1962 『東釧路』(単)
- 河野 本道・藤村 久和・畑 宏明・岩崎 隆人 1973 『石狩の先史時代』石狩町
- 小山内 照・杉本 良也・北川 芳男 1956 『5万分の1地質図幅説明書—札幌—』北海道地下資源調査所
- 斉藤 武一 1968 「北海道旭川市豊岡遺跡」『日本考古学年報』16所収
- 佐藤 一夫 1971 「苫小牧市美沢植村遺跡調査報告」『郷土の研究』3所収
- 佐藤 光一 1964 「生振遺跡」『いぶつ』3所収
- 札幌市西高等学校郷土研究部 1968 『石狩町花畔上花遺跡(仮称)発掘調査概報』(単)
- 高橋 正勝編 1971 『柏木川』(単)
- 高橋 正勝 1972 a, b 「北海道における縄文時代中期の終末(1), (2)」『北海道青年人類科学研究会会誌』9, 10所収
- 竹田 輝雄・大島 和雄 1970 「石狩高岡遺跡の遺物について」『調査研究報告会講演要旨録』21所収
- 千代 肇・工藤 雅史・武田 稔・土橋 敏明 1972 『涌元遺跡』(単)

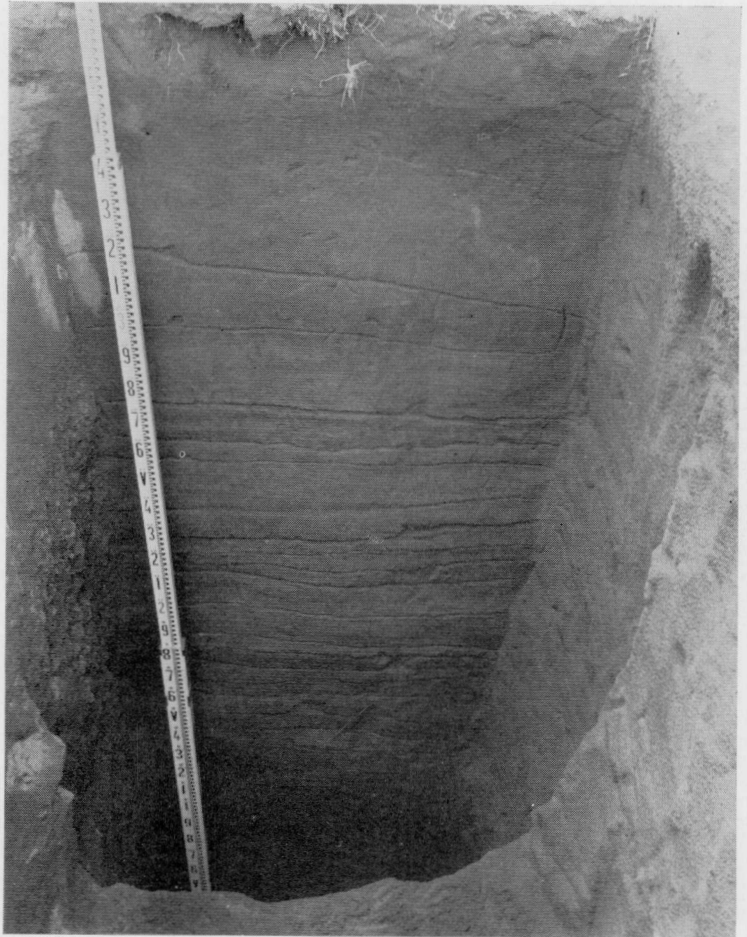
- 東京大学文学部編 1963 『オホーツク海沿岸, 知床半島の遺跡』(上)(単)
 苫小牧市教育委員会(他) 1965 『第四次苫小牧市植苗タブコブ遺跡調査概要』(単)
 中野 尊正・小林 国夫 1959 『日本の自然』岩波新書
 名取 武光・峰 山 巖 1957 「若生貝塚発掘報告」『北方文化研究報告』12所収
 名取 武光・峰 山 巖 1958 「入江貝塚」『北方文化研究報告』13所収
 新潟古砂丘グループ 1967 「日本海側の古砂丘について」『第四紀研究』6-1 所収
 畠山三郎太 1960 「名寄市智東出土の北筒式土器」『ウタリ』2-17所収
 藤 則 雄 1971 「北陸の海岸砂丘の埋積腐植土層の編年とその生成環境」『第四紀研究』10-3 所収
 藤井 昭二 1967 「沖積層とその絶対年代—後氷期の時代区分の試み—」『第四紀研究』6-4 所収
 藤本 英夫 1968 「北海道石狩町出土の石棒」『考古学雑誌』53-4 所収
 藤本 英夫・木村 英明 1968 『紅葉山遺跡』(単)
 松 下 亘・近堂 祐弘・米村 哲英・君 尹 彦・本田 栄作・藤村 久和 1967 「美々貝塚」『千歳遺跡』
 所収
 松野 正彦・佐藤 忠雄・兼重 達男 1970 「礼文島神崎ウエンナイボ遺跡調査概要」『考古学雑誌』56-2 所収
 三位 秀夫 1966 「沖積世における海岸砂州の発達過程」『第四紀研究』5-3~4 所収
 湊 正 雄・井尻 正二 1966 『日本列島(第二版)』岩波新書
 峰 山 巖・金子 浩昌・桐谷 賢一・西本 豊弘・百々 幸雄・上野 秀一 1973 『栄磯岩陰遺跡発掘報告』
 (単)
 峰 山 巖・高橋 稀一・倉谷 泰賢 1973 『中の沢B遺跡』広島町教育委員会
 村 越 潔 1974 『門筒土器文化』雄山閣考古学選書10
 森田 知忠 1972 「精神川遺跡」『北海道南茅部町の先史』所収
 山内 清男 1942 「石器時代の犬小屋」『前篇民族文化』3-8 所収(『山内清男・先史考古学論文集』第五冊
 1967所収)
 山崎 博信 1967 『智東遺跡B地点 図録篇』(単)
 山崎 博信・長谷川 功 1968 『智東遺跡B地点 本文篇』(単)
 吉崎 昌一 1965 「縄文文化の発展と地域性——北海道」『日本の考古学』2所収
 渡辺兵左右衛門・小 山 清 1929 「上手稲村に於けるトドマツ村」『北海道林業会報』29-9 所収



A 遺跡遠景（南より）



B 遺跡近景（北西より）



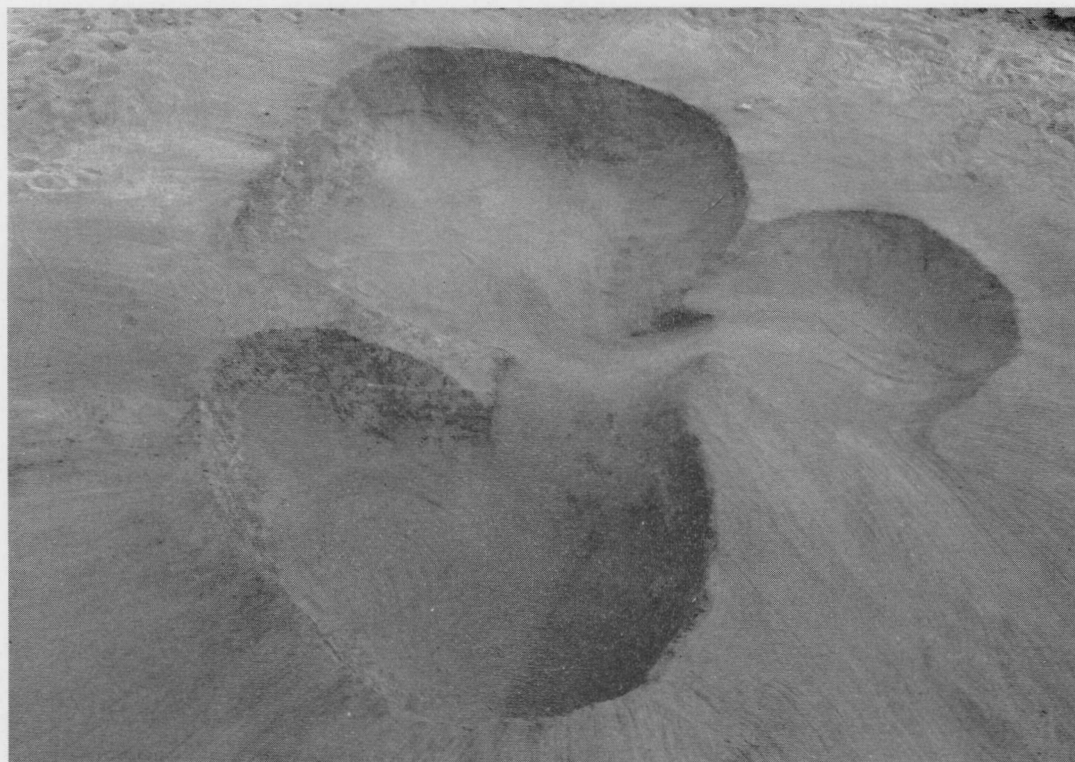
A G-9区セクション



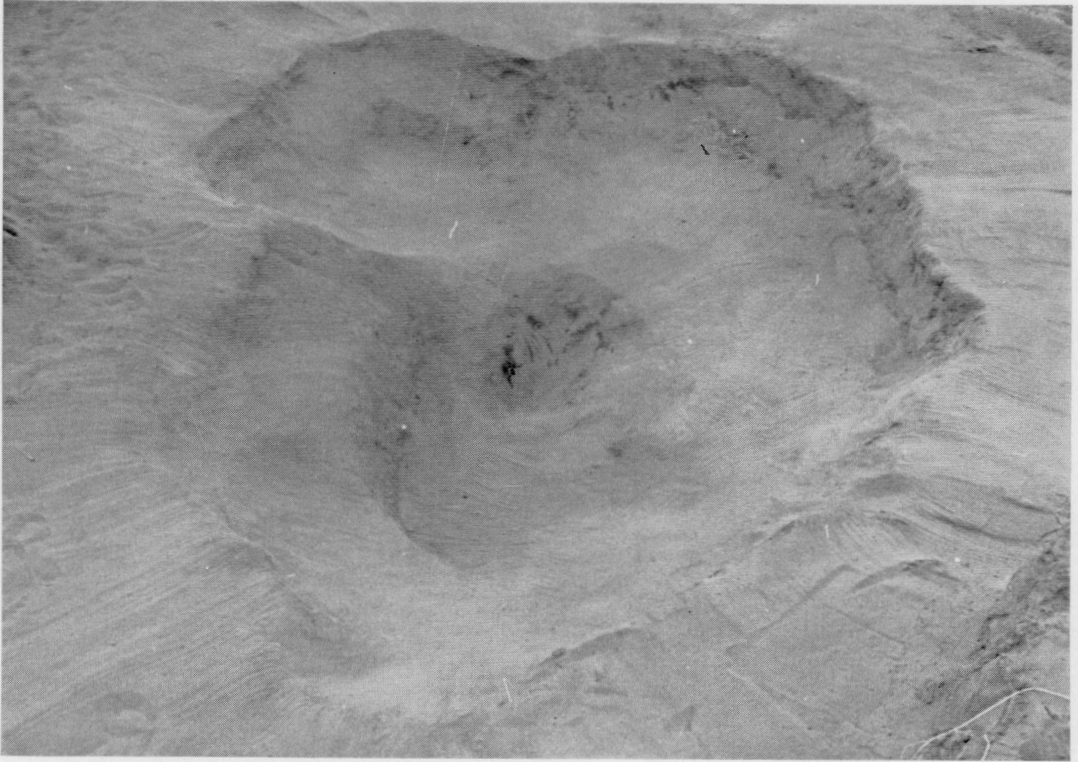
B 第1号, 第2号ピット (東より)



A 第3号, 第4号ピット (南より)



B 第5号, 第6号, 第7号ピット (西より)



A 第8号, 第9号ピット (北西より)



B 第10号, 第11号ピット (南東より)



A 第12号ピット (南西より)



B 第13号ピット (南より)



A 第24号ピット (南より)



B 第25号, 第26号ピット (西より)



A 第32号、第35号、第37号ピット（南より）



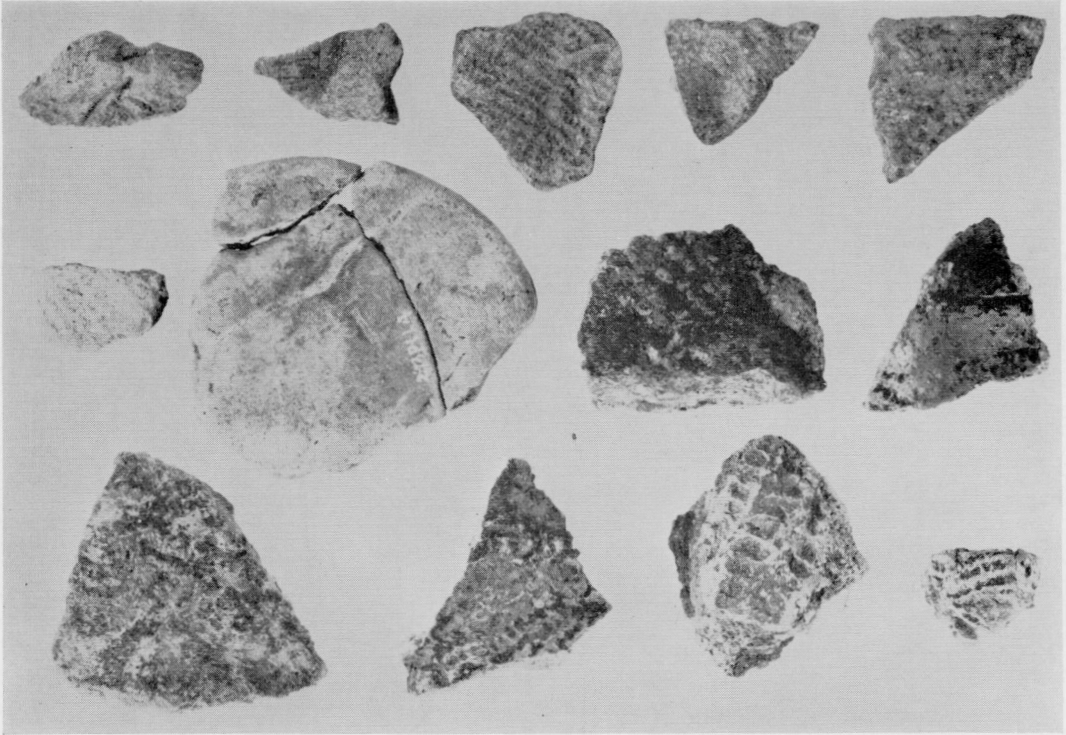
B 第1号竪穴住居跡状遺構（南より）



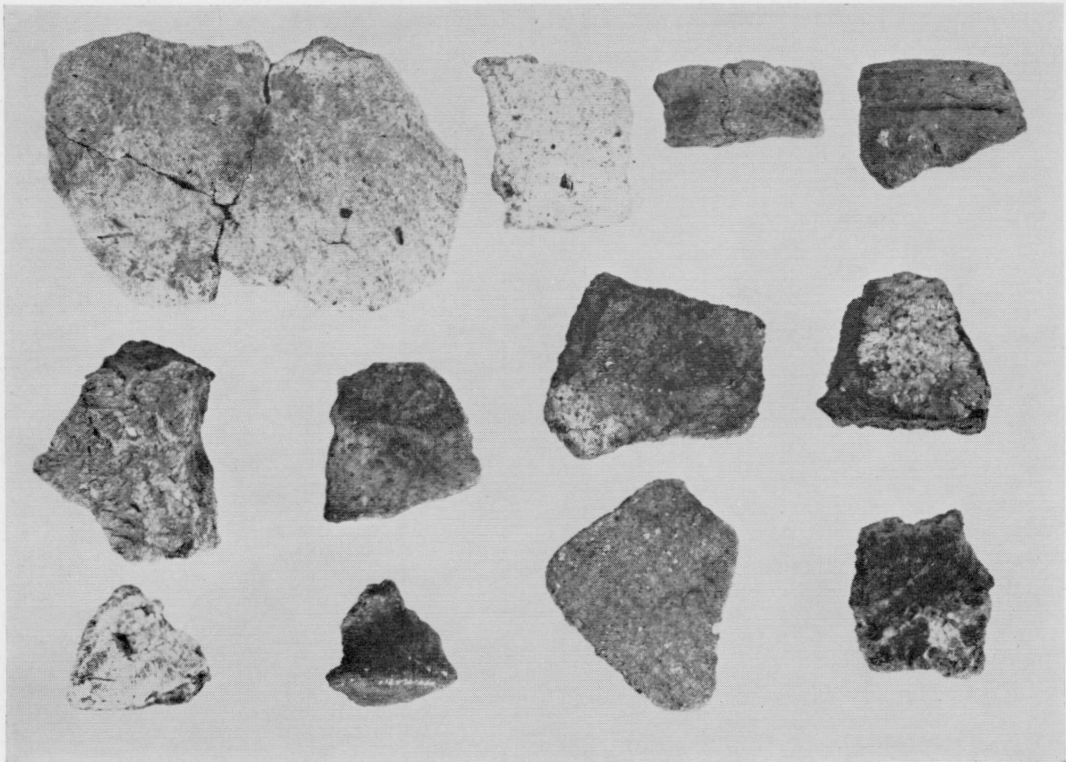
A 第2号竪穴住居跡状遺構（北東より）



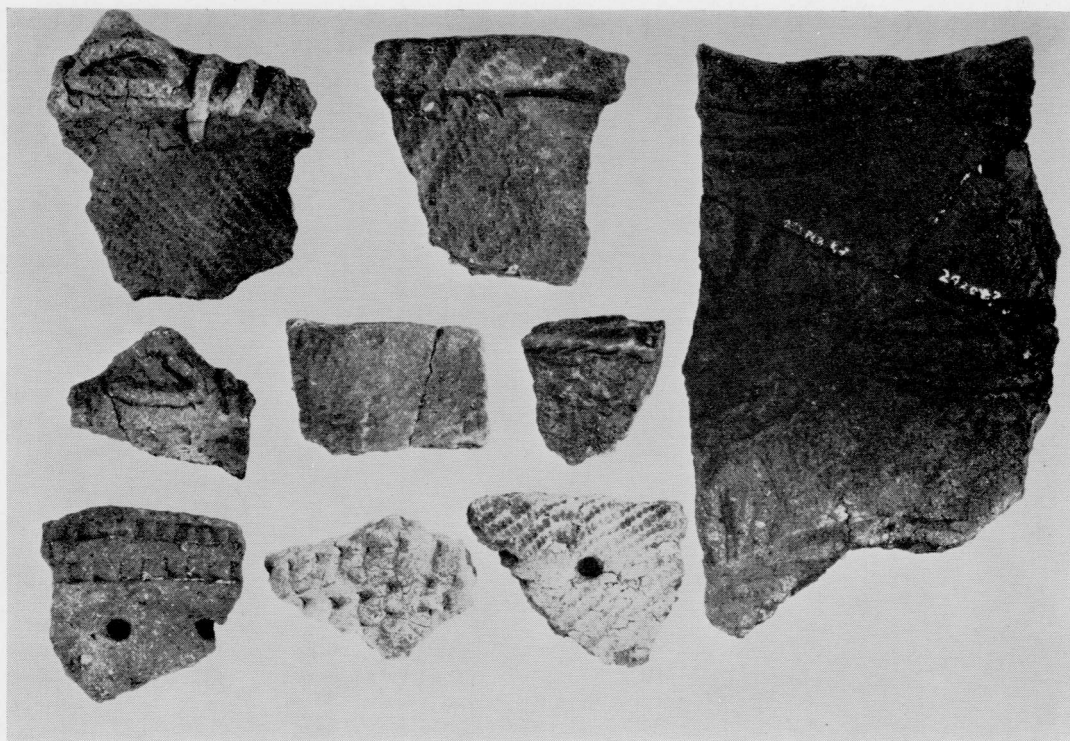
B 第3号竪穴住居跡状遺構（北西より）



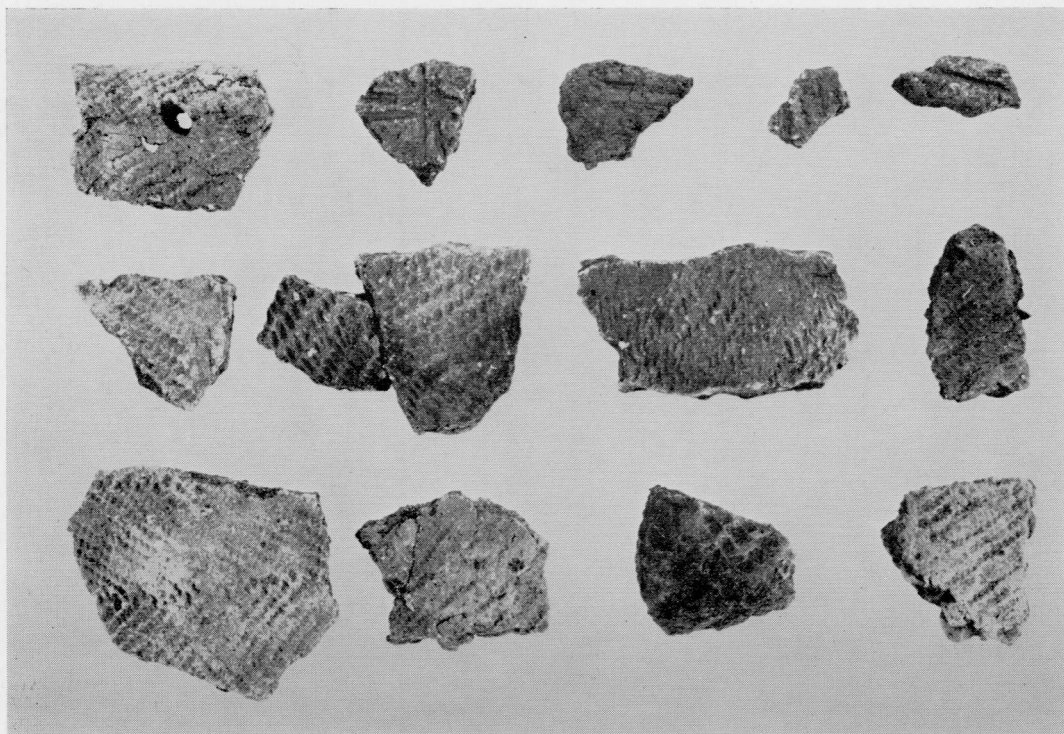
A 第1号, 第2号, 第6号, 第7号, 第9号ヒット出土遺物



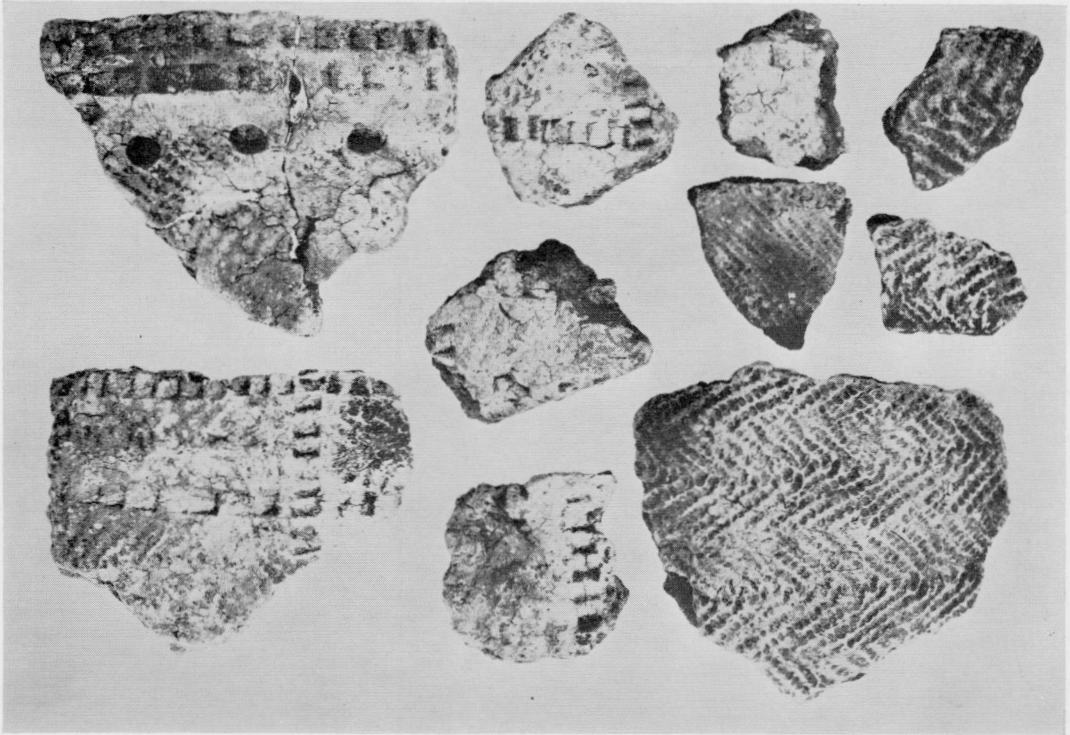
B 第18号, 第29号, 第38号, 第39号, 第46号, 第48号ヒット出土遺物



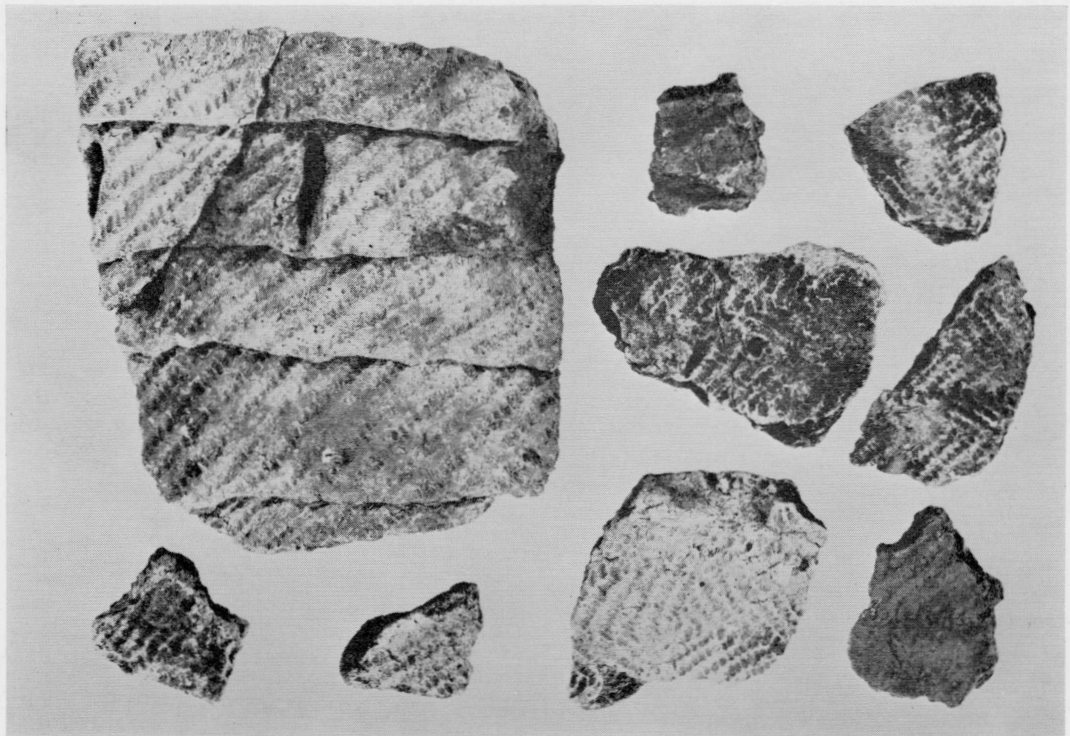
A 第3号 ビット出土土器



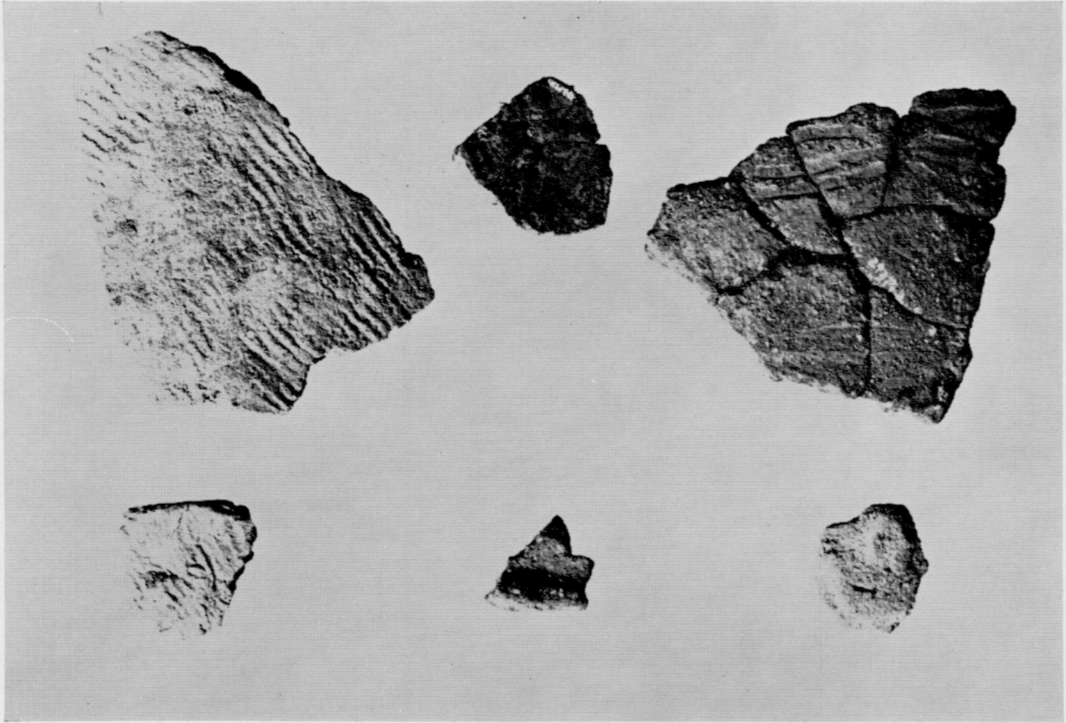
B 第3号, 第4号ビット出土土器



A 第10号, 第11号ピット出土土器 (1)



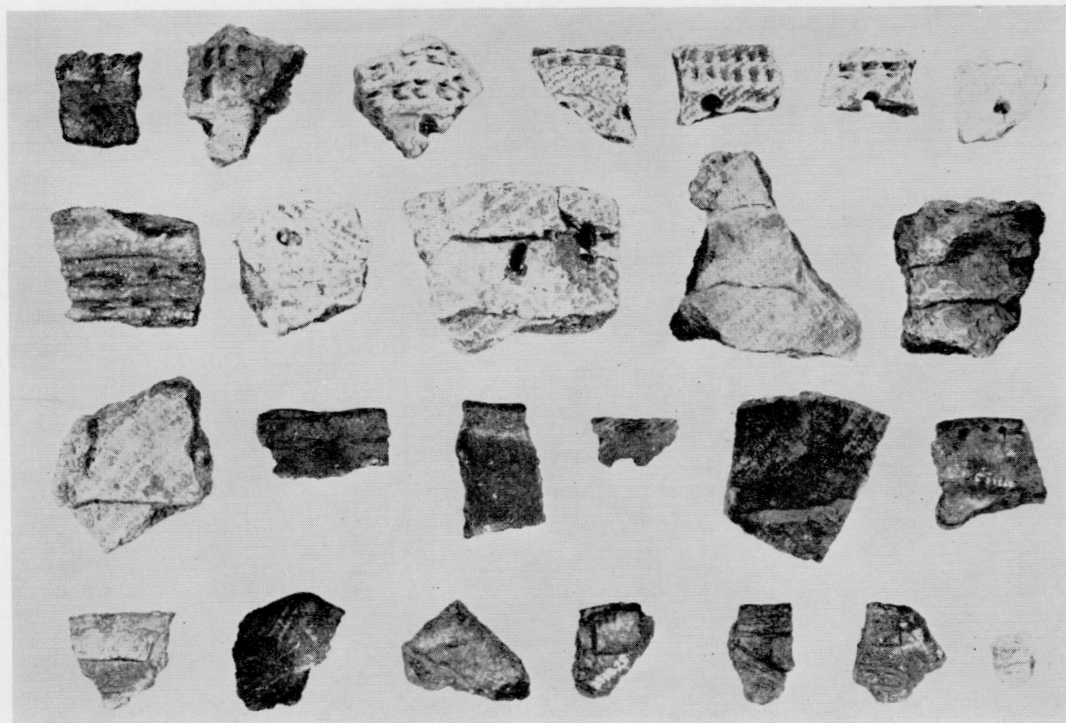
B 第10号, 第11号ピット出土土器 (2)



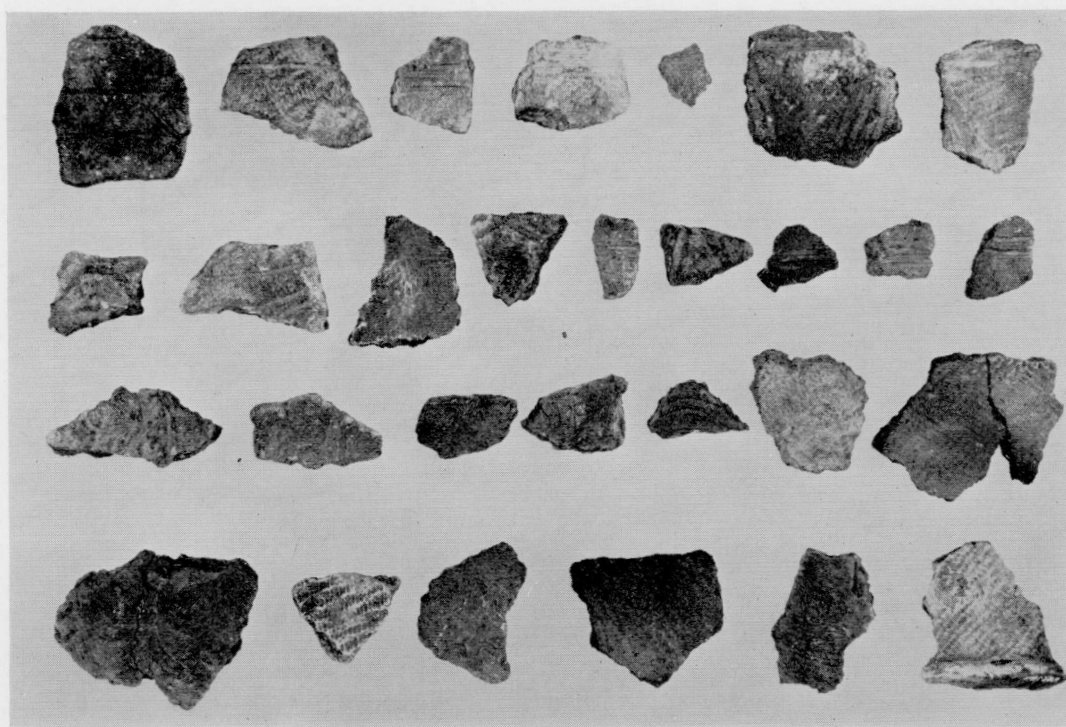
A 第16号ピット，第1号，第2号竪穴住居跡状遺構出土土器



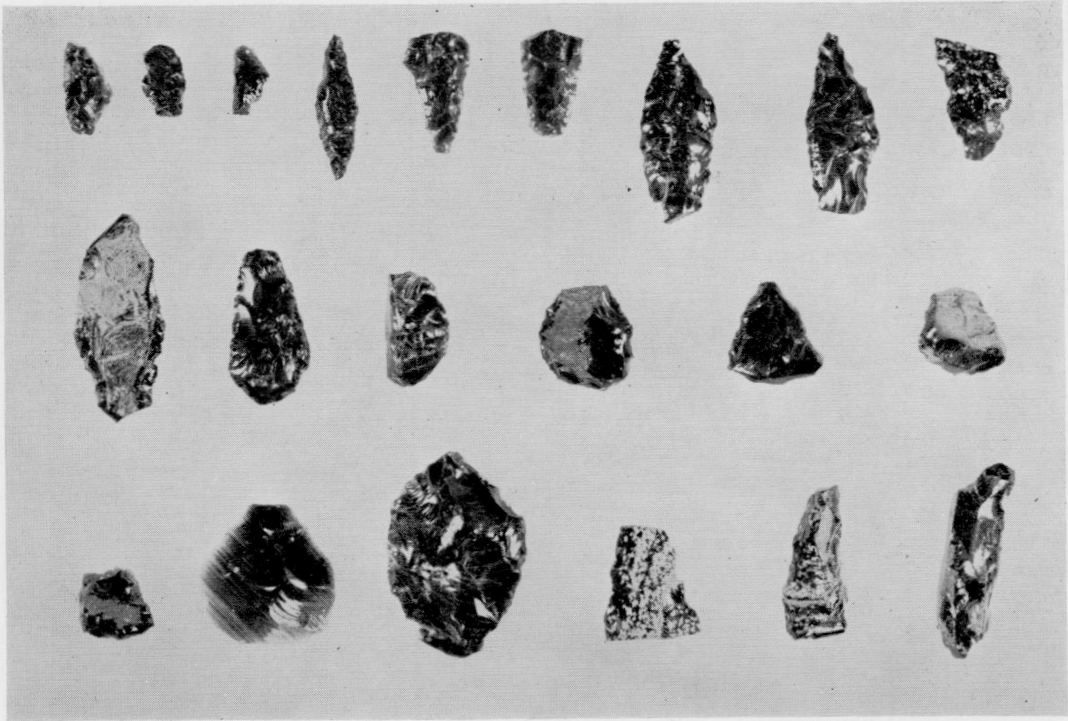
B 遺構（第1，3，4，6，9，10，16号ピット，第1，2号竪穴住居跡状遺構）出土石器・石片



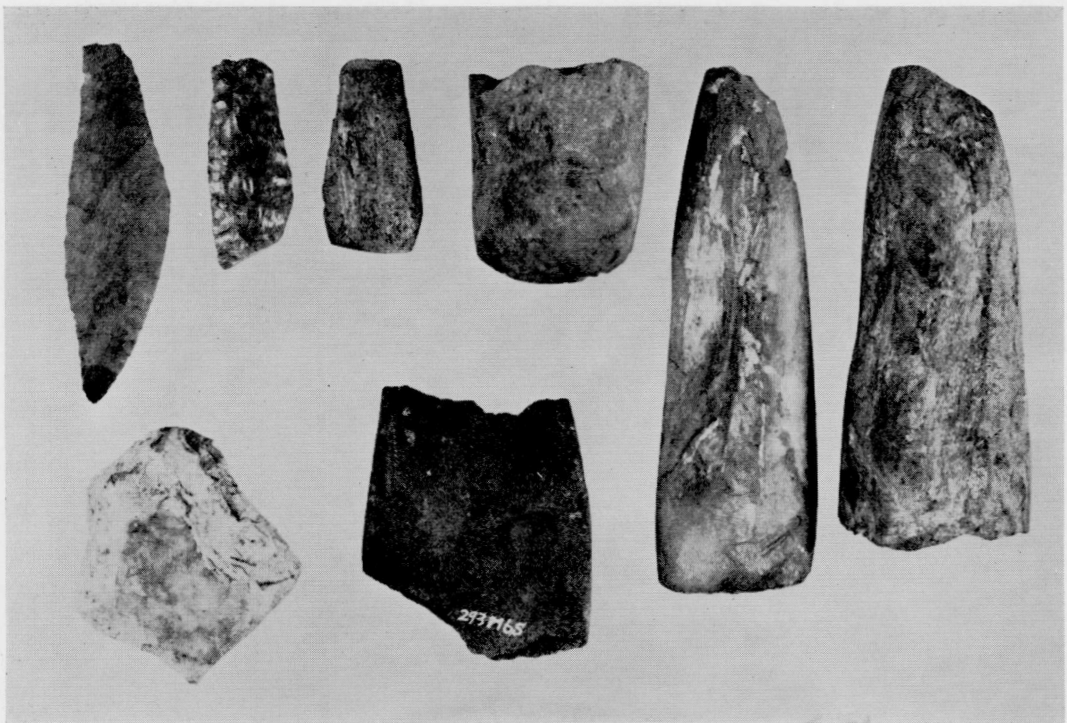
A 発掘区出土土器 (1)



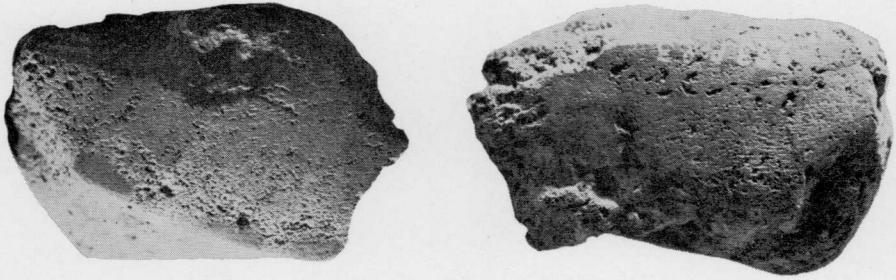
B 発掘区出土土器 (2)



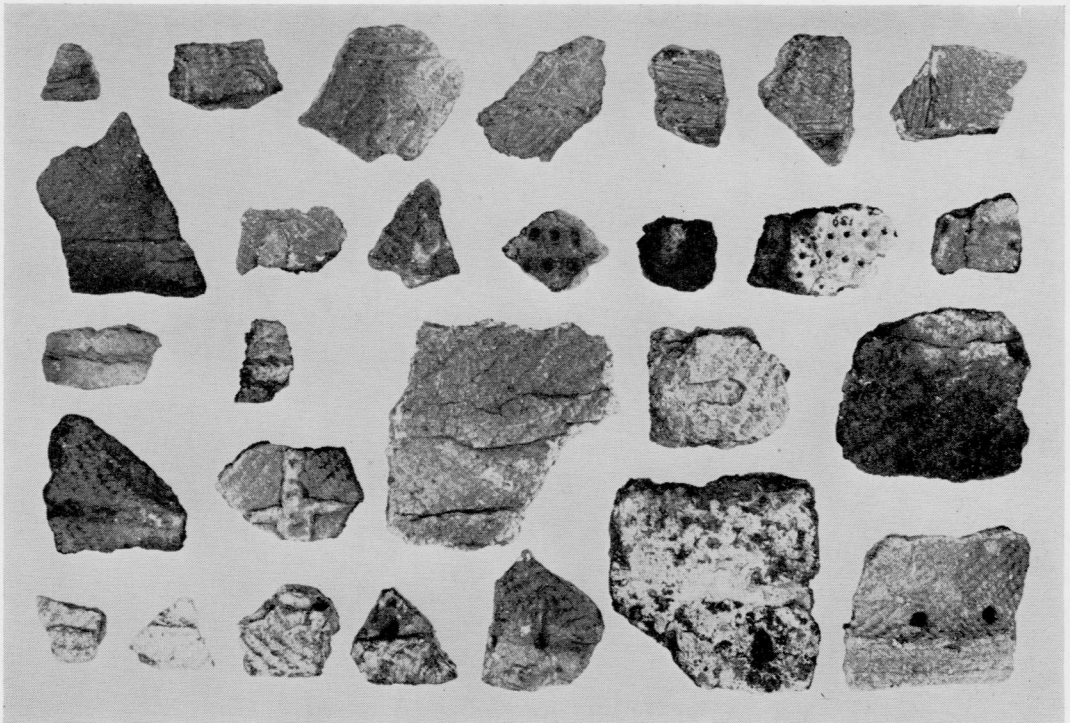
A 発掘区出土石器 (1)



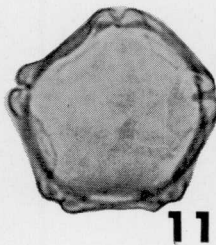
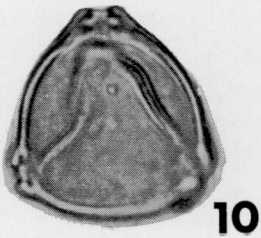
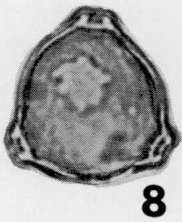
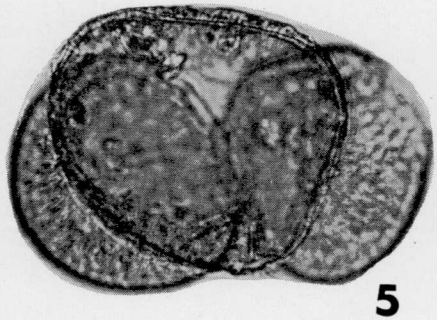
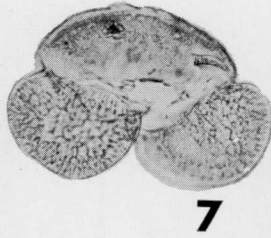
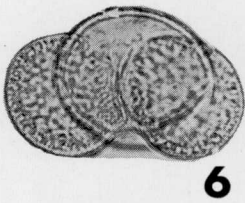
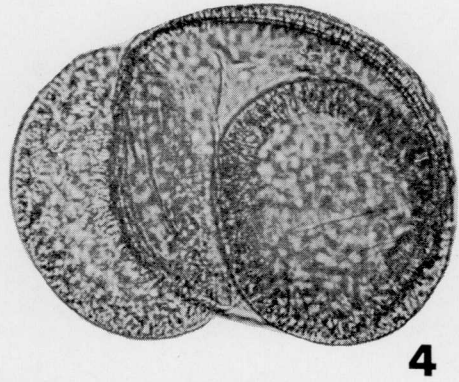
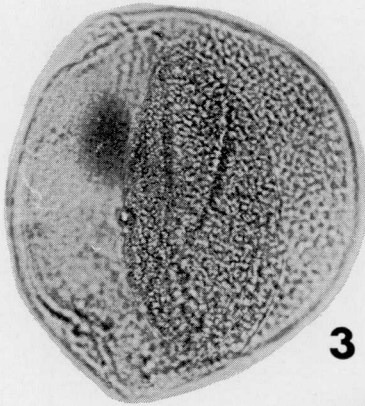
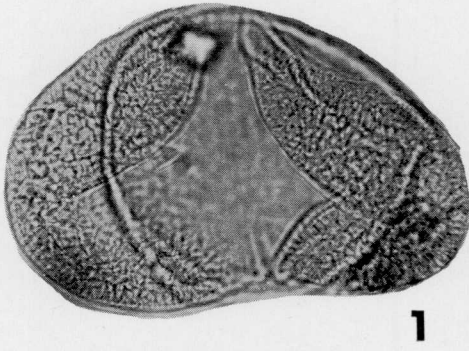
B 発掘区出土石器 (2)



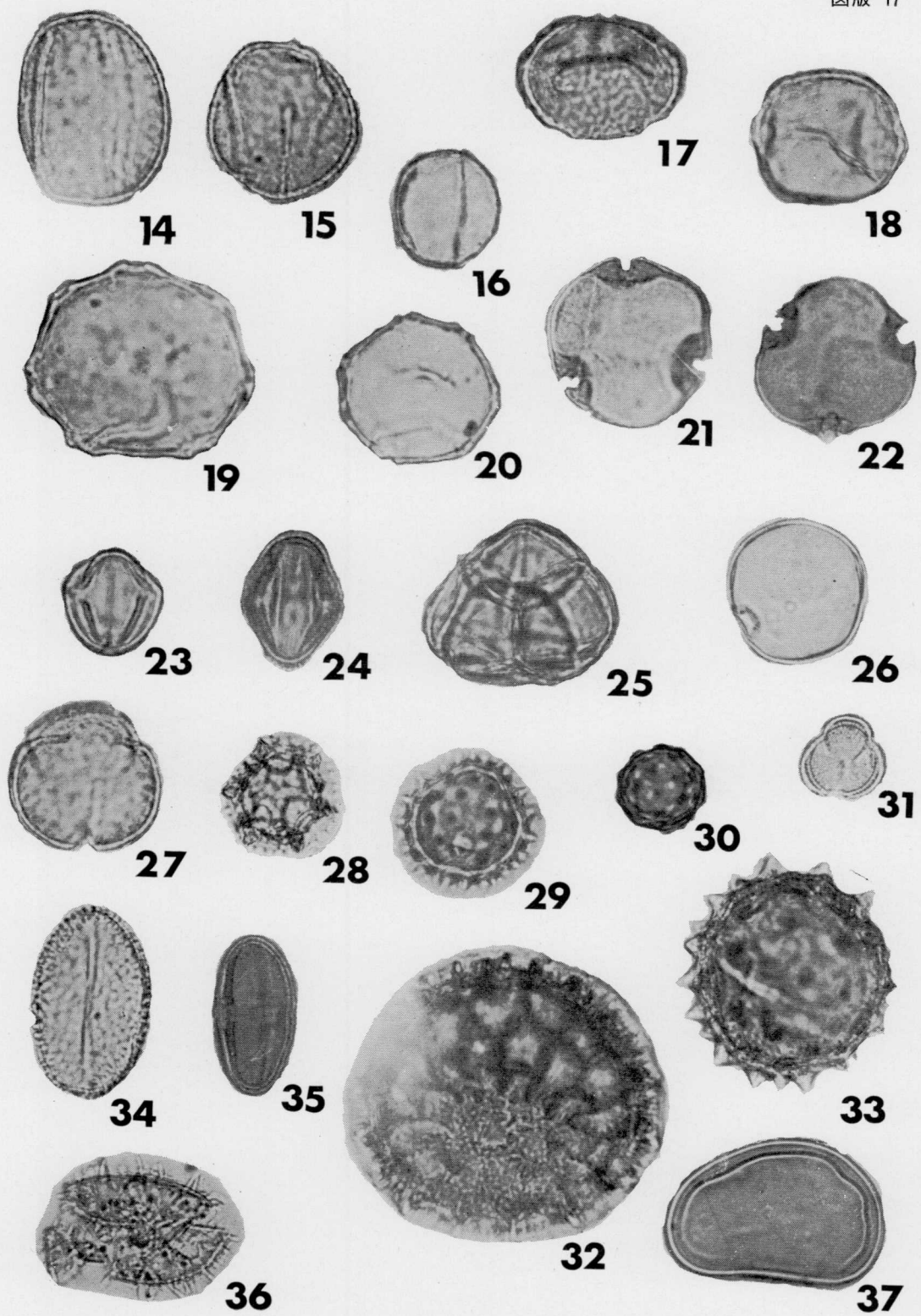
A 第7号ビット出土石器 (1/1)



B 石狩町生振 O25 遺跡出土石器



遺跡付近の泥炭層出土の花粉 (1)



遺跡付近の泥炭層出土の花粉 (2)

札幌市文化財調査報告書 VI

N 293 遺跡

昭和49年6月15日印刷

昭和49年6月29日発行

発行者

札幌市教育委員会

札幌市中央区北1条西2丁目

印刷所

三陽印刷株式会社

札幌市西区手稲東3北2丁目